

## 〈自由研究部門〉

# あそびたい！つづけたい！！またやりたい！！ ～環境構成を見つめ直す～

青森県・青森認定こども園（あおいもり園） 逢坂亜稀美・藤田 唯・青木明菜

### I. はじめに

当園では、以前までは登園後の自由遊びの時間には、2～5歳児までの異年齢児保育をおこない、日中の活動は、クラスでの活動を行うことが多いことから、これまでも活動のあり方について、何度となく意見を交わしてきた。その結果、保育室の環境を変えることや安全面の工夫、何よりクラス単位での一斉保育の枠を超えられないことは大きな問題だと捉えた。そこで幼稚園教育要領、保育所保育指針などが改訂されたことから、子ども一人一人の主体性を尊重した保育について考え、保育者間で、環境構成を見つめなおすことが検討された。その中では、

- ・今まで以上に好きな遊びを遊べるようにしたい。
- ・子どものトラブル、そこに关わる保育者の大きな声をなくしたい！
- ・片付けしないで継続して遊ぶためにはどのように過ごすか？
- ・玩具をどこにどのように置くか？

などの意見が出された。環境構成を見直していく中で、子どもたちの遊びの様子にも変化が見られるようになったため、4歳児を対象とし、姿をとらえ、エピソードをまとめることとした。

### II. 研究の目的

- ・主体的な遊びを考えることで園の課題が何かを見出す。
- ・主体的に遊べる環境を考える。
- ・環境構成から見える子どもと保育者の姿を捉える。

### III. 研究の方法

- ・対象年齢 4歳児
- ・場所（コーナー設定）
- ・遊具（手作り玩具、取り出しやすさ）
- ・時間（自由遊びの拡大）
- ・子どもの遊ぶ姿を観察し、子どもと保育者の変化を捉える。

### IV. 事例と考察

#### 事例1：手作り玩具

手作り玩具でピザ屋さんごっこをしている時の話。

Mちゃん（4歳児）「これお弁当に入れようっと！」

保「おなかすいたなあ。ピザ食べたいなあ」

Mちゃん「おうちにピザ屋さんきたことある！私ピザ屋さんやるね！まずはトマトソースを塗りまーす。何



をトッピングしますかー？」

保「チーズいっぱいお願いしまーす」

Kちゃん（2歳児）「お姉さんたち、何やってるの？」

考察1：環境構成を見直すことの一環で手作りの食べ物を保育者皆で作って提供したものの、最初は何をどのようにして遊んだらよいかわからず、何でもごちゃごちゃに混ぜて使う子が多く見られていた。だが、ピザ屋さんごっこをすることで、一人一人の想像によって見立てられ、遊んでいた。また、手当たり次第材料を弁当箱に詰め込む姿が多かった。だが、ピザ屋さんごっこをすることで、遊びが発展し、一緒に遊びながら、ピザ窯を作って提供するなど、少しだけ遊びの援助をすることで、その後数日「今日もピザ屋さんやる？」といった声も聞かれていた。

### 事例2：ブロック

ブロック遊びをしている時のこと。前日作った物で引き続き遊んでいたSくん。

Sくん「先生、このロボット玄関に飾ってもいい？」

保「いいよ、飾っておいで。」

その様子を傍で見ていたSくん。

Kくん「僕も飾りたいな…どこに飾ろうかな？」



考察2：作ったものを飾ることで、満足感が得られ、友達が作っているものへの興味をより示すようになった。また、前日に作ったものをどんどん改良し、創造力も培われてきたように思われる。以前までは、保育者が遊びを決め、限られた玩具で遊ぶことも多くあった。ブロックの個数も限りがあり、なかなか大きなものは作ることも難しく、また、すぐトラブルになってしまうことがあった。自分でしたい遊びを選んで遊ぶことで多くのブロックを使うことができるため、トラブルも少なくなり、みんなで協力して大きなものを作ってみようとする姿が見られるようになってきた。

### 事例3：半登棒

半登棒で遊んでいた時のこと。

運動神経が良いMちゃん。体を動かすことが大好きで、半登棒では一番最初にうんていを渡りきった。

Mちゃん「さいごまで渡れたよー！」



それを近くで見ていた、仲良しの友だちのYちゃんとKちゃん。競争心に火が付き、それから繰り返うていに挑戦するようになった。

Kちゃん「ちょっぴり進んだよ！」

日々経験を重ねていく中で最後まで渡りきることができた。



あまり積極的に半登棒に挑戦しないHくん。

いつもこの場所が彼の安住の地であった。

春夏秋冬と季節が変わるごとに、周りの友だちがうんていを渡りきったり、登り棒のてっぺんまで登ったりしている姿を見て、少しずつ意欲が湧いてきたようだ。秋、足場のある登り棒を登ったHくん。一番上まで登るのかと思いきや、その一歩手前で立ち止まり涙する寸前の表情を浮かべていた。それを近くで見ていた保育者は、「どうしたいの?」と声をかけてみた。Hくん「…降りる。」保「降りなよ?」そして後日、交通安全指導にて、半登棒を登る実践内容で経験したことがきっかけで、こわそうにしながらも、登りきることができ、それが自信となり、その後も自ら登るようになった。



考察3：環境構成を考えるにあたり、大きな変化の一つとなったのが「半登棒」である。今年度から、マットを常に敷き、いつでも活動に取り入れるよう、半登棒の周りに配置してあった遊具も含めて環境構成を見直した。

#### 事例4：ぬりえ

ぬりえを行う際は、すずらん組（5歳児）の保育室全体を使っておこなうことが多い。

年長児のTくんは絵を描くのが大好きで、最初はぬる



ことに集中して取り組んでいたが、それでは物足りなくなってしまう、ぬりえの紙を裏返して、写し絵をするようになった。

それを見ていた、すみれ組（4歳児）のRちゃん。この子も塗り絵や絵を描くのが好きな子で、Tくんの写し絵を描いている姿を見て、すぐに真似をし始めた。しかし手に取ったぬりえは、コピー用紙よりも厚い色紙であったため、なぞりたい線が中々見えないようで、筆が止まっていた。

紙を回したり、ひっくり返したり試行錯誤していると、紙をくいと曲げて描き始めたのである。紙を曲げることで、目の前にある窓から差し込む太陽の光を利用し、線のはっきりと見えるように角度をつけていたのであった。



考察4：Rちゃんは、自分の世界を持っており、その傾向は製作にも顕著に表れている。今回の事例の中で、接点がないと思われていたTくんのことを良く見ているのだと感じた。それは同じ絵を描くことが好きなもの同士、普段からTくんのことをあこがれていたようだ。

また、日光が紙にあたることで、線の見え方が変わったことに気づき、どのようにしたら自分で描きやすいか考えて行動に移していた姿をみて、Rちゃんの思考力の発達について伺い知ることができた。

個々の表現の仕方はさまざまであり、ぬりえ一つとっ

でも、線の中に色をぬるだけではなく、遊びが展開していく事で、子どもの表現の可能性が広がっていくことについて実感できた。

#### 事例5：お座敷コーナー

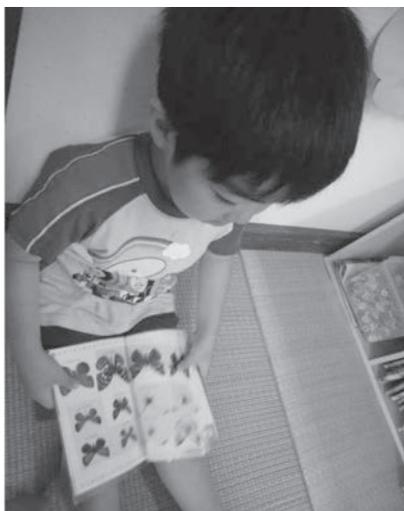
環境構成を見直すことの一環で、クラスにお座敷コーナーを設けた。友だちと一緒にかるたをしているのだが、Hくんは一人でミニ図鑑を見ていた。しばらく様子を見てみると、こちらにやってきて、「先生！このザリガニもガイライシュだよきっと！」

保「ん？ガイライシュって何？」

Hくん「ほんとはアメリカとかにいるいきものなんだけど、日本に来ちゃったんだって！」「このアマガエルもだよ！」

と、一人興奮状態に。よく聞いてみると、先日見たテレビの影響のようだ。

また、Sちゃんは、普段から支援が必要な子で、みんなと一緒に何かするというのが難しいことがほとんどだ。周りの友だちは折り紙コーナーで製作中なのだが、Sちゃんはお座敷コーナーで自分のしたい遊びを取り出し、お手玉で遊んだりすることが多くなった。



考察5：部屋にお座敷コーナーを設置したことによって、まるで家のようにくつろぎながら、自分の世界に没頭することができたようだ。絵本の本棚も設置したことで、いつでも見たい絵本を見ることができる。また、自由に絵本や玩具を取り出せることで、自分一人の時間を過ごすことができるようになった。

#### 事例6：ソフト積み木でパソコンごっこ

登園時間のはやいKちゃん、Yちゃんが2人でソフト積み木で囲いを作り始めた。そこへAちゃんも来て、「ここパソコンのとこにしよー！」と言って部屋が設けられた。また、次々クラスの友だちが登園してきて、いつもは一緒に遊ばない子も一緒に入って遊んでいた。Mちゃん「電話ももってこようよ！」などそれぞれが同じ家の中で自然と役割を決め、遊んでいた。また、それを見る2歳児クラスの子も近づいてきて眺めていた。翌日、異なる場所に同じような家をつくり、遊ぶ姿。Kちゃん「靴は靴箱にしまいまーす」「玄関はこっちで一す。ピンポン押してから来てくださーい」などと話ながら遊んでいた。



考察6：クラス内では、いつも一緒に遊ぶチームがほぼ決まっているため、今回の遊びでは普段遊ばない子も入っており、意外性を感じた。いつも行っている遊びではなく、この日初めて行う遊びということで、真新しさを感じ、それぞれが楽しそうだなと思ったため、今回は一緒に遊びになったようだ。役割を決めながら楽しむ姿が見られ、大きなトラブルをおこすことなく遊びこむ姿だった。

その日は片付けてしまったが、数日片付けずに残しておくことでの変化も見たいと感じた。また、家に必要なアイテムもそろえられたら、個別の空間のように作って楽しむこともできるのではないかと考えられる。また、数日あることによって、他クラスの子も受け入れられるようになるかもしれないと予測される。

#### 事例7：化粧ごっこ

子どもたちに大人気な遊びのひとつに変身グッズがある。中でも、女の子に人気なドレスを着て、化粧セットで遊んでいた時のできごと。Yちゃんはいつものように遊んでいたが、うつむいたままなかなか起き上がらず、泣いているのか？と思いながら近づいてみると…化粧中だったようだ。保「どこかにおでかけするの？」Yちゃん（4歳児）「…」あまり見られたくはなかったようだ。その場を離れ、静かに見守った。

考察7：Yちゃんは非常に真剣に自分の世界に入りこんで化粧をして遊んでいた。その中では、環境構成の一つとして、椅子を用意し、いつでも使えるようにした。だが、その椅子に座るとドレスがちょうど良い高さにならず、椅子にドレスをのせ、床に座って遊ぶ姿も見られているため、もう少し工夫し、大人の真似を楽しめるような遊びに展開できるようにしたいと考える。

#### V. まとめ

以前までは、自由遊びの時間には、保育者が提供した、限られた遊び、玩具の数で遊んでいたことから、子ども同士のトラブルも多く、それに伴い、保育者の「やめて！だめだよ！」の声も大きく、なかなか遊びの輪が広がらない様子だった。だが、環境構成を見直すことによって、子どもたち自身が今までより興味のあるしたい遊びや、またやろうという思いで選択することができるようになった。また、継続して遊ぶことにより、それぞれで工夫して遊ぶことができるようになり、考える力が高められてきた。それと同時に、トラブルも減ってきた。合わせて、保育者自身も援助の仕方が“見守り”に変わってきたことから、遊びの輪が広がり、心にも余裕が生まれたように感じる。

そこで見えてきた新たな課題は、

- ・行政からも高い評価をいただいている、園の特色である“自分の命は自分で守る”ための交通安全指導は、以前は、朝の会の時間に主に取り組んでいたのですが、登園後、時間いっぱい自由に遊べるようにするために、朝の会を廃止したことによって、時間の確保の工夫が必要となった。
- ・子どもと一緒にピザ屋さんごっこをしても、どのように遊んだか保育者間で共通認識されていないことから、連携がうまくとれておらず、手作り玩具を生かした遊びがまだまだできていない。

これらの課題を再度保育者間で話し合いながら、子どもの“あそびたい！つづけたい！！またやりたい！！”を尊重した環境構成にしていきたいと考える。

合わせて、課題の一つに、子どもたちが園生活や遊びの中で学んでいることを保護者へうまく発信できてい

るかと言えば、「遊び＝学び」という認識がまだまだされておらず、どうしても、「学び＝机上」というイメージで捉えられているようだ。今は、一貫して五領域、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿の基礎にあるということ、ドキュメンテーション等を通して保護者に理解してもらえるように伝えていかなければならないと感じている。試行錯誤しながらも、保育者間で話し合いながら、伝えるための工夫をし、取り組んでいるところを、より、保護者に理解してもらうためにさらに発信内容、手段の工夫をしていきたいと考える。

参考文献：「具材」庭プレス、著：子どもの生活と遊び研究会 編著：植山由香里

キーワード：主体性 環境構成

講評：あそびたい!つづきたい!!またやりたい!!! ~環境を見つめ直す~

評者：石川 昭義

子ども一人一人の主体性を尊重した保育について考える中で、「主体的に遊べる環境の構成」を課題に掲げて取り組んだ研究です。環境構成の工夫やコーナーの設置によって、子どもの遊びや子ども同士の関係が変化の様子がうまく描かれています。以前は保育者が遊びを決めていたやり方から、保育者の援助の姿勢が変わっていく様子の記述も良かったです。

一つ一つの遊び（コーナー）でどれくらいの時間が費やされているのか、あるいはトラブル件数がどれくらい減少したのかなど、客観的なデータが示されると良い考察になったと思います。また、一日のデイリープログラムが新旧で示されると、子どもの動きが変わった様子がわかりやすくなったのではないのでしょうか。「まとめ」の記述では、「遊び=学びという認識がまだまだされていない」とあります。遊びたくなるような魅力的な環境構成と、そこでの子どもながらの学びの姿を捉える事例をこれからも収集していってもらいたいと期待します。

評者：田和 由里子

登園後の自由遊びの見直しについての課題を保育者間で問題提起をされ環境構成を見つめ直すことを検討されました。子どもたちが主体的な遊びができるように7個のコーナー遊びを用意し、それぞれに行った事例の紹介（写真の掲載）、考察をされており分かりやすかったです。継続して遊ぶ中で課題である子ども同士のトラブルや職員の援助も「見守り」に変わられ効果が得られたのは素晴らしい取り組みだったと思われます。また、この活動を園内でなく保護者にも発信する手段な

どを今後検討課題として挙げられています。これからも子どもたちの健やかな成長発達の取り組みを期待しております。

評者：馬場 耕一郎

主体性をもった遊びに着眼した素晴らしい研究です。指針の改定においても子どもの主体的な活動は重視されました。環境構成を見直すことで子ども達のトラブルが減少し、保育士の注意する声が少なくなったようです。子どもたちが自分の思いで選択できることは、今後の保育の質向上にも繋がると思います。これからも、保育士間で話し合いを続け、子どものあそびたい!つづきたい!!またやりたい!!!を尊重した環境構成を考えて頂きたいと思います。

## あそびからみるポートフォリオ ～「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」について注目して～

石川県・大徳学園 安田未有・浅香聡彦

### 【はじめに】

当園では、3、4、5歳児異年齢クラスで毎日保護者に対してポートフォリオ<sup>(注1)</sup>の形で、子どもの様子を伝えている。園内に掲示し誰でもみられるようにし、日々のクラス日誌の代わりとしている。また、保護者向けにホームページ上でパスワードをかけて公開している。2018年の3月に試行し、同4月より本格的な導入をした。

ポートフォリオ導入の目的は、保護者と子どもの姿を共有し一緒に子どもの成長を感じたり、保育者自身が保育の振り返りをしやすくしたりするためである。記録用紙の欄外には「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」(当園では「育てたい子ども像」と表記。以下、10の姿)を記し、今日の活動から子どもたちのどんな力が育ったかし点を記入して保護者に見せ、伝えてきた。

ポートフォリオを作り、保育を振り返る中で、子どもへの関わり方に偏りがあるのではないかと感じるがあった。また、10の姿の項目にチェックを入れているものの、本当にこの項目に子どもの育ちが当てはまるのかと悩むことも多くなってきた。そこで今まで記録してきたポートフォリオを使って、10の姿を実際の子どもの姿と照らし合わせながらより具体的に考察し作成上の課題と、より良いものにするための方策を明らかにしたい。

### 【研究方法】

(対象) 3、4、5歳児異年齢クラスの29人

(クラス構成) 3歳児10名、4歳児10名、5歳児9名

(期間) 2018年4月～2019年6月

(方法) 2018年4月から記録してきたポートフォリオの中で、室内のあるテーマあそびに注目し、10の姿と照らし合わせながら、具体的にどんな場面と10の姿が結びついているのかを分析した。また作成したポートフォリオについて、同じ園に勤める同僚保育者からの意見をもらい、その違いについて考察した。

### 【実践Ⅰ】

ポートフォリオの中で、室内のテーマあそびに注目し、10の姿と照らし合わせながら、具体的にどんな場面と10の姿が結びついているのかを分析した。

(背景)

お部屋に設置してある絵本『11ぴきのねことぶた』に興味を持ち、「ねこになってみたい」との声からねこの

喋り方を真似したり、猫耳を作ったりして楽しむ姿が見られる。

### (事例①)

すっかりねこになって楽しんでいる子どもたち。絵本のお話のように「立派なお家建てたい」という話になり、お魚料理屋さんをして、お金を稼ぐことにする。メニューは絵を描いて考え、その絵をもとにどんな材料があるのか、盛り付けはどうするのかを5歳児を中心に考える。5歳児の試作品作りに興味を持って見ていた3、4歳児からは「美味しそう…」との声が漏れていた。(図1参照)

(考察) イラストを見ながら、どんなものを使ったらよいか一緒に考えたり、教材室で使えそうなものはあるかと探したりしながら行った。子どもたち同士でも「これがいいんじゃない?」「これ使えそう!」と自分の思いを伝えたり、相手の気持ちを受け入れたりする姿が見られた。子どもたち同士が話し合える場を提供し、話し合う経験を重ね、子どもたちが自分の思いを相手に伝えられる自信にも繋がっていけばと思う。5歳児を中心に行っていたが、3、4歳児の「おいしそう…」と気になっているつぶやきもあったので誘ってみたり、その子ができることを助けてもらったりして、関わるようにしていきたい。(10の姿：①②③⑥⑨⑩、以下【実践Ⅱ】の①～⑩の10の姿に該当)





図1

## さくらぐみ H30. 8. 27(月)

### 『メニューはどうしようか!?!』

すっかりネコになりきって楽しんでいる31匹のねこ。立派なお家を立てるためにお魚料理屋さんを聞いてお金を稼ぐことに!先週絵をかいメニューを考え、今日はそれをもとに何を使ってどう盛り付けるかなどたいようさんを中心に考えてお店屋さんの準備を始めました!「おいしそう...」との声が聞こえていました!

メニュー



### 『おめでとう★』

日に5歳の誕生日を迎えた くんの誕生会をしました。朝から嬉しい気持ちが顔から溢れ出していた! くん! 終始にこにしながら友達からのメッセージの時には照れ臭そう...! なんとかわかかったです!



おんぶしちゃう!



連絡事項 ☆明日もシャワーの準備をお願いします。 ☆6・7月の写真販売は今月中です!!

(考察)イラストをもとに食材にはどんなものを使ったらよいか一緒に考えました。子どもたち同士で「これがいんじゃない?」「これも使えそう!」と自分の思いを相手に伝えたり、相手の気持ちを受け入れたりと子どもたち同士で話し合える場を提供して、経験を通して、自信に繋がってけるようにしたいです。

- |          |                                    |                                   |  |  |
|----------|------------------------------------|-----------------------------------|--|--|
| 育てたい子ども像 | <input type="checkbox"/> 健康な心と身体   | <input type="checkbox"/> 自立心      | <input type="checkbox"/> 共同性           | <input type="checkbox"/> 道徳性・規範意識の芽生え      |
|          | <input type="checkbox"/> 社会生活との関わり | <input type="checkbox"/> 思考力の芽生え  | <input type="checkbox"/> 自然との関わり、生命の尊重 | <input type="checkbox"/> 数・量・図形、文字等への関心・感覚 |
|          | <input type="checkbox"/> 言葉による伝え合い | <input type="checkbox"/> 豊かな感性と表現 |  |  |

※日々大徳学園で過ごす中でみられる、将来に繋がる大切な「育ち」がある子どもの姿にポイントが入っています。

### (事例②)

LaQやロンディを使って、ねこたちの食事の魚を作り始めている。その魚をねこ達が食べて楽しんでいる中、「やっぱり釣ったての魚が食べたいね!」との話になり、川を作ることになる。初めは5歳児が中心に川作りを行っていたが、その姿を見て「一緒にやってみよう!」と3、4歳児がやってくる。3歳児には難しい所は自然と5歳児がサポートをし、助け合う姿が見られた。(図2参照)

(考察)ねこになりきることで、友だちとのやりとりを楽しむ中で「こんな風に遊びたい」「こんなことしたら、もっと面白そうやね」とアイデアを出し合いながらあそびの準備を進めている。時に意見が食い違ってもあるが、『どっちが正しい』ではなく、『どうしたらもっと楽しめるか』という視点で、友だちの思いも聴き合う姿が見られた。楽しむ中で、自然と協力し

合う経験を重ねていけるように関わっていきたい。また、5歳児が3歳児をサポートする姿には思いやりの心が育っている事を感じることが出来た。助けられている事を感じることが出来た。助けてもらった子やそれを見ていた子など、クラスみんなにもその温かい心が伝わっていったらいいと思う。(10の姿:①②③⑥⑦⑨⑩)



図2

## さくらぐみ H30. 8. 23(木)

### 『美味しい魚をつるにゃ〜!』

11匹のねこたちのお家では、お魚料理をしたり、団らんしたりと、仲間と楽しく過ごしています。

どんどんお家には魚が増えていきすが、「やっぱり釣ったての魚が食べたいね!」と、川を作ることになりました。



ここに大きな川を作ろう!

川で魚釣をする足場を作っていると、次々に「一緒にしたい!」と、手助けをしてくれるほしさんたち。ほしさんの難いところを、サポートしてくれるたいようさんたち。嬉しい姿がたくさん見られました。



ゲームデー、くもってなるの楽しい!

ゲームデー、どこに貼ったらいいかな?

連絡事項 ☆明日はシャワーの準備をお願いします。

(考察)友だちとのやりとりを楽しみながら、「こんな風に遊びたい!」「こんな事したら、面白そうやね!」と、アイデアを出し合いながらあそびの準備を進めています。時には、意見が食い違ってもありますが、「どちらが正しい」ということではなく、「どうしたらもっと楽しいか」という視点なので、友だちの思いも聴き合う姿が多くみられます。楽しみながら、自然と協力し合う経験を重ねていきたいと思います。

- |          |                                    |                                   |  |  |
|----------|------------------------------------|-----------------------------------|--|--|
| 育てたい子ども像 | <input type="checkbox"/> 健康な心と身体   | <input type="checkbox"/> 自立心      | <input type="checkbox"/> 共同性           | <input type="checkbox"/> 道徳性・規範意識の芽生え      |
|          | <input type="checkbox"/> 社会生活との関わり | <input type="checkbox"/> 思考力の芽生え  | <input type="checkbox"/> 自然との関わり、生命の尊重 | <input type="checkbox"/> 数・量・図形、文字等への関心・感覚 |
|          | <input type="checkbox"/> 言葉による伝え合い | <input type="checkbox"/> 豊かな感性と表現 |  |  |

※日々大徳学園で過ごす中でみられる、将来に繋がる大切な「育ち」がある子どもの姿にポイントが入っています。

(事例③)

4歳児A男がお店屋さんをしており、そこに3歳児B子とC子がやってきた時の接客の場面。4歳児A男「400円になります。」3歳児B子「(100円玉をもちながら)400円って何枚？」4歳児A男「(100円玉を持って実際にして見せながら)1、2、3、4枚やよ！」3歳児C子「一緒に4枚数えよう！」(3歳児B子、C子と一緒に数えてみる)3歳児B子「4枚になった！はいどうぞ！」4歳児A男「はい！ありがとうございます。」(図3参照)

(考察) お会計時には必ず数が関わってくる。「1、2、3…10！」と数を数えて言うことはできるが、会計時のお金の計算になると難しく感じる子もいる。しかしそんな時に、分かる子に助けをもらったり、一緒に考えてみたりすることで、やりとりも楽しめるのではないかと思う。ゆっくりと丁寧に、1人ひとりのペースに合わせて関わっていくようにしたいと考える。(10の姿：②③④⑥⑧⑨)



図3

さくらぐみ H30. 8. 31(金)

『がんばれ〜!!!』

園庭では相変わらずかけっこが盛り上がっています。今日はそんなかけっこのコーナーに応援ガールズが現れました！真剣勝負ながらも〇〇くんがんばれ〜！と応援される声が聞こえると真剣な顔が思わずにやっとな！それを見た応援ガールズもにやっとな！可愛くて思わず笑っちゃいました。



今日もお店は大繁盛！お家を買うお金を貯めるために料理の値段も少し高めにしてあります。

★ある接客時にこんな場面がありました！  
 くん 「400円になります！」  
 ちゃん 「(100円玉をもちながら)400円って何枚？」  
 くん 「1、2、3、4…4枚やよ！」  
 ちゃん 「4枚一緒に数えて見よ！」  
 ( ちゃん ちゃん数えてみる)  
 ちゃん 「4枚なった！はいどうぞ！」  
 くん 「はい！ありがとうございます！」



連絡事項 ☆月曜日からシャワーが無くなりますが、しばらくは汗で着替える日もあるかと思うので準備をお願いします。また着替えケースの中身もご確認ください。  
 ☆9月からたいようさんはキラキラタイムが始まります！  
 ☆6・7月の写真販売は今日までです！！ ☆シーツ・帽子洗いの日です。

(考察) お店屋さんのお会計時には数が関わってきます。「1、2、3…10」と言いながら数えられるけどお金になると難しく、悩むこともでてくるとも思います。しかしそんなときには分かる子たちに助けをもらったり、一緒に楽しみながら考えてみたりしてやりとりを楽しんでいけるよう関わっていきたいと思います。

- 健康な心と身体
- 自立心
- 共同性
- 道徳性・規範意識の芽生え
- 社会生活との関わり
- 思考力の芽生え
- 自然との関わり、生命の尊重
- 子ども像
- 数量・図形、文字等への関心・感覚
- 言葉による伝え合い
- 豊かな感性と表現

※日々大徳学園で過ごす中でみられる、将来に繋がる大切な「育ち」あっている子どもの姿にポイントが入っています。

(事例④)

ついに家を建てるために目標としてきた10万円が貯まり、「どんな家を作ってよか…」という話になった。5歳児D子が「ブタの大工さんにきくのはどう？(絵本の登場人物)」「じゃ、手紙書いてみよう！」ということになり、手紙を描くことに。手紙は文字に興味を持っていた5歳児E子が友だちと内容を考えながら書く。その後みんなで郵便局へ行く。切手も郵便局で実際に子どもたちが買う。ポストへ投函する時には「届きますように…」と願いを込める姿がある。(図4参照)

(考察) 子どもたちの想像力は本当に豊かで、発想の面白さも子どもたちならではのなと改めて感じた。園では文字の一斉指導は行っていないが、文字に興味を持っているからこそ、「やってみたい」と感じたのだと思うし、その気持ちを尊重した。また、実際に郵便局へ行き、切手を買って、ポストに投函するという体験は、子どもたちにとって大きなことだったと思う。その中でも「ほかのお客さんもおるかもしれんし、静かにせんなんね」と他の子に注意を促したり、『一番前に行ってやりとりを見たい』という気持ちをこらえて、「ほしさん(3歳児)ちっちゃいから前いってもいいよ！」とさりげなく気遣ったりする5歳児の姿があった。また、5歳児の姿を見て、後ろにいる5歳児のために少ししゃがんで協力してくれる4歳児の姿もあった。そんな中で、切手を買ったり、ポストに投函したりするときには5歳児が代表でみんなの前で少し照れながらも誇らしげな様子だった。そんな子どもたちの姿を見た時にどんな些細な事でも子どもたちの思いを受け止めて、丁寧に関わっていきこうと改めて考えさせられた。(10の姿：①②③④⑤⑥⑧⑨⑩)

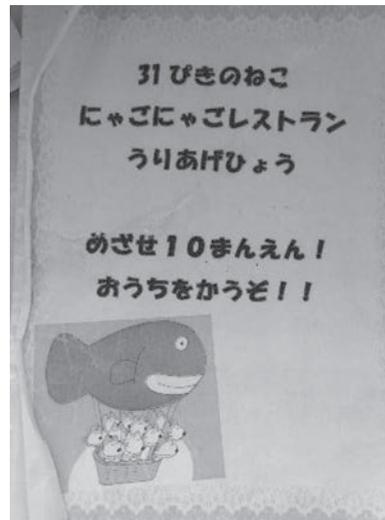




図4

## さくらぐみ H30. 10. 12(金)

『ついに10万円！！』

～お手紙が届きますように…～』



8月30日にやごやごレストランがOPENし、ねこたちの家を買うために10万円の売上を目標に頑張ってきて、ついに昨日売上10万円が貯まりました！！そして「どんな家を作ってようか。」となった時に「11ぴきのねことぶた」にてくるブタの大工さんに手紙を描いて聞いてみようとなり、今日は郵便局へ行ってきました。その後探検をしながら、松村第一公園へ行ってキノコやカエルと出会ったり、坂道をダッシュで上り下りしたりして楽しめました！



連絡事項 ☆シーツ・帽子の洗濯日です。

まずは中に入って、「切手下さい！」と切手を購入！

「ブタの大工さんへ届きますように！」



(考察)8月30日からの長い期間「家を買おう！」と同じ目標を持ってこられたのも、毎日みんなで売上金を数え合ったり、「お店しよう！」とお互いに奮い立たせたり、「もうすぐやね！」と励まし合ったり、そんなみんなでの同じ思いがあったからだと思います。またみんなでの気持ちの共有があったからこそ達成感も何倍にもなったのではないかと思います。ここで終わりではなく、次のおうちを建てるという目標に向かっていきながら、まだまだ楽しんでいきたいです。

<input type="checkbox"/> 健康な心と身体	<input type="checkbox"/> 自立心	<input type="checkbox"/> 共同性	<input type="checkbox"/> 道徳性・規範意識の芽生え
<input type="checkbox"/> 育てたい	<input type="checkbox"/> 社会生活との関わり	<input type="checkbox"/> 思考力の芽生え	<input type="checkbox"/> 自然との関わり、生命の尊重
<input type="checkbox"/> 子ども像	<input type="checkbox"/> 数量・図形、文字等への関心・感覚	<input type="checkbox"/> 言葉による伝え合い	<input type="checkbox"/> 豊かな感性と表現

※日々大徳学園で過ごす中でみられる、将来に繋がる大切な「育ち」あっている子どもの姿にレ点が入っています。

### 〈考察〉

日々の保育の中でも一日だけではなく、同じテーマのあそびのポートフォリオを集め、10の姿について振り返り、考察を行った。10の姿を参照しながら一日ずつ振り返る中で、ある日にはレ点がついていない項目もあったが、改めてじっくりと振り返ることで、テーマあそびというつながりで見ると全ての項目にレ点がついており、自分の視野を広げることが出来た。また『その日はレ点をつけなかった項目も本当はレ点がついても良かったのではないか』と思うことが出来た。しかし、『この事例はどの項目に当てはまるのか』と悩んだことも多く、レ点の付け辛さも感じた。日々レ点をつけていて、自分の保育に偏りがあるのではないかと感じていたが、10の姿を結果ではなく、成長の過程として受け止め、子どもたちと関わって過ごしていきたいと考えることが出来た。

【実践Ⅱ】

同僚の考えている保育観(大切にしていること)を知り、考えたり、真似したりして学びを深め、今後に繋げていくことをねらいに園内研修を行った。ある日のポート

フォリオ(図5参照)について、職員間で意見交換を行い、自分の視点と同僚から出た自分になかった視点を10の姿に照らし合わせてみる。

〈園内研修からの学び〉

10の姿	自分の視点	同僚から出た自分になかった視点
①健康な心と身体	『畑へ水やりにいきたい』『お散歩に行きたい』というやりたいことに向かって、心と身体を動かす。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一日に二つの園外活動だが、意欲的に子どもたちが参加して楽しんでいる。</li> <li>・畑に行った後で散歩にも行ける体力。</li> <li>・健康だからこそ、いろんな感情が生まれ、いきいきと過ごすことができる。</li> <li>・天気が暑いと感じられている。</li> </ul>
②自立心	野菜への水やりとやることが分かり、自分で考え行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・川に魚を見つけて、友だちと共有しようとする力がある。</li> <li>・状況に応じて、自分で考えて行動に移すことができる力がある。</li> </ul>
③協同性	『野菜のお世話をする』という同じ思いを持って、友だちと協力をして水やりをしているところ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒に水やりをすることによって、お互いに気持ちに共感でき、仲が深まる。</li> <li>・野菜の赤ちゃんだと思って仲間と協力し合っていること。</li> </ul>
④道徳性・規範意識の芽生え	散歩時のルールを自分たちで考えながら歩いている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全管理や体調管理ができる力が育っている。</li> </ul>
⑤社会生活との関わり	散歩途中にすれ違う人に挨拶をし、地域の人に親しみを持っている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野菜に対して「またくるね」と友だちのような感覚で接し、話しかけている。</li> </ul>
⑥思考力の芽生え	「暑いからお水ほしがとるかもしれない」と気が付き、みんなにも伝える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・苗の気持ちになって代弁している姿から、優しい気持ちが溢れている。</li> </ul>
⑦自然との関わり・生命の尊重	畑・散歩先で様々な自然物や生き物と出会う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察したり、匂いを嗅いだりと興味関心を持って探求している。</li> <li>・身近な自然や生き物に触れて、命の大切さや感性が育っていくことに繋がる。</li> <li>・自然物をあそびに使って友だちと遊んでいる。</li> </ul>
⑧数量・図形、文字等への関心・感覚	当てはまらない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3歳児F子がツツジを見ている場面で、花の形や数などにも興味を持っている様子から、『数量・図形文字等への関心・感覚』に当てはまるのではないか。</li> </ul>
⑨言葉による伝えあい	魚を見つけた時に友だちにも嬉しい気持ちを伝え、共感しようとする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感じたこと、想ったことを相手に伝えられること、自分の気持ちを伝えている。</li> <li>・友だちの言ったことに対して、顔を見合わせたり、話し合えたりすること。</li> </ul>
⑩豊かな感性と表現	ツツジを含む、いろんな自然物を五感で感じ、言葉や遊びのなかで表現する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「暑いから」「お水がほしい」と繋がる表現の仕方。</li> </ul>

### 〈考察〉

今までも10の姿をもとにレ点を付けていたが、3歳児F子がツツジの花を見ている場面で、花の形や数などにも興味を持っている様子から、⑧『数量・図形、文字等への関心・感覚』に当てはまるのではないかという意見を頂いた。今までは『数量・図形、文字等への関心・感覚』といえば、数字や文字など目に見えて分かりやすいものばかりに注目していて視野が狭かったと気づいた。また同時に同じ保育者として、「私ならこの場面こうやって書く」等注目するポイントや同じ場面での注目の度合いが、保育者1人ひとりによって違い、自分の考えていなかった視点を発見し視野が広がった。また、『別の視点』をもとに話し合うと、作った本人の視野が広がるのはもちろん、同僚の視野も広がり、更に保育者としての見る力や保育力にも繋がったのではないかと考える。

### 【実践Ⅲ】

保護者からは、ポートフォリオの形式で日々の様子を伝える前と比べて、保護者と子ども、保護者と保育者と会話が広がったとの声や、文字だけの日誌と比べ、写真付きで分かりやすくなった等の声を頂いている。しかし、保育者がポートフォリオを作っていて、10の姿に当てはまりづらいことがあり、項目を再考してはどうか考えた。保育者同士の共通理解や保護者へ更にこちらの思いを伝わりやすくするために、10の姿に当てはめにくい事例をもとに、どんな項目があれば保育者も分かりやすく、保護者にも伝わりやすくなるか検討してみた。

#### (事例⑤)

ついに10万円が貯まる。前の日から「明日貯まるかもしれない！」とそわそわしながら嬉しそうな姿がある。貯まった時には「やった～！」「やっと貯まったね！」「お家買える！」等とみんなそれぞれ自分の思いを伝えあう姿とたくさんの笑顔が見られた。全部埋まった売上表を何度も見て、10万円を達成したことに浸る子もいる。(図5参照)

この下線から、最後まで諦めずにやり遂げる力、忍耐力を踏まえた達成感が育っていると考える。

### 〈考察〉

10の姿の②『自立心』の中には達成感が含まれているが、友だちと一緒にやり遂げたり、子ども個々の他の子にはない自由な表現ができたりして達成感を味わったりすることも考えると、10の姿の説明には示されてはいるが、直接的に伝わりにくい子どもの育ちもあると改めて振り返って感じた。これまで10の姿では伝わりづらい子どもの育ちがあったときには、ポートフォリオの考察に記してきたが、10の姿ではなく、園の中で子ども

たちに育ってほしい姿を改めて考え、達成という項目を増やすのはどうかと考える。

図5



### 【まとめと今後の課題】

ポートフォリオを作成し始めてから1年以上が過ぎたが、日々10の姿を捉えることに苦心している。それは、子どもの姿の読み取り方が、自分と同僚で違うこと、また同じ場面を見ているとも見る視点が違うことがあり、自分の読み取りが合っているのか否か不安になるからである。この課題の克服には職員間の相互理解を深めることが必要で、園内研修等で話し合い重ねることが有効だと考える。また、10の姿にこだわるのではなく、自分の園で大切にしたいことは、新たな項目として付け加えることもいいのではないかと考える。そして、その後は共通言語として理解できるまで高めたい。

保育者でも10の姿の捉え方に苦心しているのだから、保護者へはもっと分かりやすく具体的な説明が必要であろう。保護者がイメージしやすいようにクラス懇談会で動画を使ったり、保育参観等でどういうことが10の姿として捉えられるか理解してもらうために何度も説明したりすることで、1場面判断するのではなく、子どものあらゆる姿から、就学までには育っていているのだと安心感をもってもらえるだろう。保育者はもちろん、保護者同士が語りあう機会をもつことで理解が進むこともあると考える。10の姿が小学校以降にどうつながってい

くのか見通しをもってもらっても必要で、小学校との協力関係も今後の課題である。

(注1) 当園では、ポートフォリオとは、A4用紙1枚に写真付きで毎日の保育の様子を示すことをいう。週案に対応して記録することが多いが、子どもをつぶやきや思いがけない子どもの行動やあそびについてのものもあり、制約はない。

#### 参考文献

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 2017年 内閣府

## 講評：あそびからみるポートフォリオ

～「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」について注目して～

評者：石川 昭義

近年注目されてきているポートフォリオについて、その作成上の課題を正面から論じていることは評価できます。子どもの成長の様子を可視化しつつ記録に留めるというポートフォリオですが、当園のやり方（資料付）は他園の参考になると思われまます。職員間で意見交換を行い、「別の視点」をもとに話し合うことで、自分になかった視点や注目の度合いに気づく場面は、職員間の相互理解に取り組む姿勢をよく表しています。事例に対する考察（10の姿を通して）、異年齢の交流の様子もよく描かれています。また、10の姿以外に、新たな項目の追加を試みたことも良かったです。

本文中には「視野が広がった」、「見る力」、「保育力にもつながった」等の表現があり、それらについて具体的な記述があると園の考えをより明確に示せたと思います。ポートフォリオの作成から1年以上が過ぎている中で、子どもの成長の捉え方や説明の仕方における成果や苦心について、さらに検討が進むことが期待されます。

評者：田和 由里子

異年齢での活動を毎日「ポートフォリオ」という方法で保護者に子どもの様子を伝えているのは素晴らしいと思います。室内遊びを基本にテーマ遊びに注目し「5歳児の終わりまでに育ってほしい10の姿」を自園用にアレンジして具体的にどんな場面でどの様な力が育ったかを分析し、また他の保育者の意見を求めるなど保育の振り返りを行うなどの工夫が見られました。保護者の方にも参観日やクラス懇談で動画や自分たちが行っている事を知らせ共通理解してもらっている事がすごいと

思います。毎日の保育で伝えたいことを発信するのは、大変なことです。今後は、小学校との連携が記載されておりましたがこのようにわかりやすい「ポートフォリオ」を示して発信して頂きたいと思います。

評者：馬場 耕一郎

保護者と子ども達の姿を共有し、一緒に成長を感じ、保育者が保育の振り返りをしやすくするためにポートフォリオを活用されています。今回の研究から、同じ場面を見ていても、子どもの姿の読み取り方に違いを感じられました。様々な読み取り方があることを発見されたことは素晴らしいと思います。また、職員間の相互理解を深めるために話し合いを重ねられていました。この取り組みを重ねることにより、保育の質が向上されると思いました。

## チーム保育の質を高める研修の在り方 ～全職員が生き生きと保育に取り組むために～

岐阜県・たちばな保育園 佐藤 鉄司

### 1. テーマ設定の理由

本園は、園児定員60名、職員数28名（保育士21名）の3歳未満児専門の小規模私立保育園である。保育士の構成は、正規職員8名、嘱託職員（準正規職員）3名、非常勤職員10名となっている。

昨今、保育士の処遇や保育料の無償化が話題に上ることは多いが、肝心の「保育の質」等、本質的な問題が取り上げられる機会は乏しいように思う。折しも、平成29年度告示の保育所保育指針は、乳児保育の充実を謳っている。私たちの未満児保育は、本当にこのままでよいのだろうかという疑問を抱くようになった。

本園での課題を整理したところ、次のようにまとめることができた。

- ・自らの保育を見直す機会が少ない
- ・保育の質の向上のための目標管理が弱い
- ・研修時間の確保が難しい
- ・研修が形骸化し、学びの実感が乏しい
- ・研修が他律的で主体性に欠けている
- ・研修の内容が保育士のニーズに合っていない
- ・研修の成果が共有できず、生かしていない

そこで、研究テーマを「チーム保育の質を高める研修の在り方」とし、これまでの研修の在り方を見直し、より実効性のある研修を構築しようと試みた。

### 2. 研究の仮説と方法

全職員が目標を共有し、主体的に参加できる研修を仕組みれば、職員の意識がかわり、日々のチーム保育の質が高まるとともに、自己の保育力を向上させようという意欲が高まると考えられた。

以下の具体的な方策を実践することとした。

- (1)クラス目標の願う園児の姿の明確化と共有
- (2)保育士の思いを大切にした「改善研修」
- (3)全職員対象とした外部講師を招いての園内研修
- (4)職員会における伝達研修の充実
- (5)指導案の改善と公開保育の充実
- (6)個人目標の設定と自己評価

### 3. 実践の概要

(1)クラス目標の願う園児の姿の明確化と共有

4月当初、第1回目の園内研修を以下のようなプログラムで実施した。

- ①全体会（園長・主任講話）②分科会（部屋ごと）③

全体会（まとめの交流）

1時間という限られた時間ではあったが、各部屋のチームの結束力を高めるとともに、クラス目標、願う園児の姿、保育士の具体的行動目標を共有し、それをさらに園全体で確認できたことは有効であった。さらに、部屋長がリーダーシップを発揮する場面を設定したことで、リーダーとしての自覚を高めることもできた。上の図は、その際の成果物である。

特に大切にしたのは、「保育士の具体的行動」の内容である。ここに挙げられた項目が、日々の振り返りの視点になり、目標を形骸化させないための手立ての一つになった。

2019年度 ぞう組 保育目標	
<b>保育目標</b> <b>明るく つよい 元気な子</b>	<b>保育の重点</b> ①子ども一人ひとりの思いによりそった保育。 ②一人ひとりの心身の発達に適切な援助。 ③保護者との連携を重んじ、子どもの成長と共に見守る。
<b>保育理念</b> 子ども一人ひとりを大切に、ゆったりとした保育 ～すべての子どもが健康・安全であり、情緒の安定した生活を十分に自分を表現した活動ができるように～	
<b>クラス目標</b> 想いを受け止めてもらえたことを支えに その子らしく力を発揮していきいきと過ごす	
<b>願う子どもの姿</b>	<b>保育士の具体的行動</b>
・保育者を信頼し、安定した関係が築ける。 ・保育園に来ることを楽しみにし、毎日笑顔で登園できる。 ・活動に興味を持ち、意欲的に楽しむ。 ・体を十分に動かして遊んだり、誰んたり励みあっても褒められる。 ・外あそび(水・砂・泥あそび、散歩)、室内あそび(手拍子を使ったもの)を十分に楽しむ。 ・自分の思いを保育者や友だちに伝えようとする。	・子どもが笑うサインを見逃さず、その子の思いに合った言葉かけ、対応を心がける。 ・それぞれの子の特性を理解し、気持ちにゆとりを持ち、子どもに寄りかかっている。 ・「一緒に遊べるよ」といふ言葉の姿勢で接することで、「自分と同じ気持ちになって遊んでくれる人がいる」という安心感が持てるようになる。 ・自信から子どもたちが自ら向け、興味を引き出せるようなあそびや活動を提供できるようにしたい。 ・保護者、保育士間、職員との連携をしっかりと取り、みんなで共通理解を促していく。 ・子育てに関心・保護者の気持ちにも寄り添い、家庭での様子を聞きながら、園での様子も共有し合い、子どもの育ちを一緒に見守っていく。

(2)保育士の思いを大切にした「改善研修」

本年度新たに計画した「改善研修」、本園では、「茶話会」と呼んでいる。

敢えて、こんな名称にしたのは、職員が気楽に自分の意見を出し合うことをねらうとともに、全職員が研修に主体的に参加し、所属感を高めることをねらったことである。

- ・ヘルシーなおやつづくり方（体にいい）
- ・子どもの好きな料理レシピ（簡単）
- ・おいしいごはん屋さん情報
- ・好き嫌いをなくすには・・・
- ・食べることに対して、意欲的でない子、関心のない子
- ・朝早く起きる方法（スッキリ）と。
- ・雨の日の過ごし方
- ・給食の待ち時間、何をしていますか？
- ・手作りおもちゃ、情報交換
- ・抱っこひもの使用
- ・研修の持ち方について
- ・おんぶの方法
- ・けいれんや発作時の対応
- ・保護者対応（伝えにくいことを、どのように伝えますか？）
- ・ストレッチや肩こり解消法
- ・ストレス解消、息抜き方法
- ・仕事の楽しみなんですか？
- ・おすずめのおでかけスポットは？
- ・その時に感じたこと、気になっていることを話したい。

研修テーマについては事前にアンケートをとり、副主任保育士（研究主任）がコーディネートして進めた。前頁右下の資料は、アンケート結果である。話題は様々であったが、そのうちの一つ、プロジェクトの活用については、その後実際に実現させ、保育活動の充実につながった。このように、自分の意見が園の活動に活かされていくことの喜びを感じることで、仕事への意欲に繋がっていくと考える。

### (3)全職員対象とした外部講師を招いての園内研修の実施

キャリアアップ研修等、外部研修に参加する職員は限られている。特に、本園のようにパート職員の占める割合が高いと、保育士間の「もっと質の高い保育を目指そう」という思いにどうしても温度差が生じることとなる。

そこで、年に1回、全職員を対象にした外部講師を招いての研修を実施し、保育の力量向上に役立てたいと考えた。時間の確保が課題であったが、保護者にも趣旨を説明し、保育時間を1時間短縮した日程を組み、実施にこぎつけることができた。

県内の大学から、著名な先生をお招きし、①各部屋の保育の様子を参観 ②主任、副主任との懇談 ③全体講話（90分）という展開で実施した。全体研修については、「乳幼児が主体的に活動するための環境構成や支援の在り方」について学ぶことができた。

研修後の保育士の感想の一部を紹介する。

- ・私はパート職員なので、こういった研修を殆ど受ける機会がありません。最近の保育の動向がよくわかり、とても勉強になりました。子どもが主体的になれるような言葉かけをもっとしていかなければいけないと強く感じました。
- ・キャリアアップ研修の内容と重なった部分もありましたが、部屋でもう一度再確認しなければならないことを示唆してもらい、大変参考になりました。保育士の都合で、子どもの主体性を阻害しないよう気をつけなければならないと思いました。

研修後の感想を各部屋で交流し、今後の保育実践に生かすことも部屋長会で確認し合った。



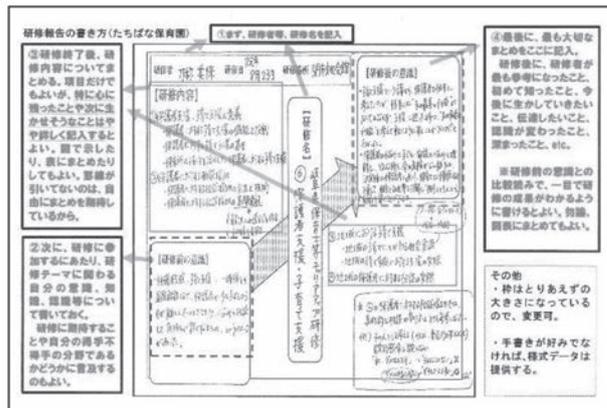
### (4)職員会における伝達研修の充実

本園では、月に1回、全職員参加の職員会を実施している。その中で、研修報告の時間を位置付けている。

研修会に参加すると膨大な資料から、伝達用の資料を

作成しなければならないため、研修者には負担となっていた。また、伝達してもらう側の立場にたつと、もう少し内容を焦点化してもらおうとよくわかるという意見が多かった。そこで、研修報告書の様式を統一し、図のようなものに変えることにした。膨大な研修内容から、強心に残ったことや収穫となったことを中心に、A4用紙一枚にまとめることで、研修者の学びを整理しようとしたものである。

この報告様式による伝達研修により、内容の焦点化、時間の効率化を図ることができるようになった。



### (5)指導案の改善と公開保育の充実

本園では、年に2回公開保育を計画している。その内1回は、市の保育研究会が主催するものであり、外部からも参加者がある。もう1回は、園内研修としている。保育時間中の公開保育となるため、職員の参加は限られ、指導案と事後の研究会記録から学ぶことが中心となる。

過程のねらい	保育士の働きかけと予想される子供の姿	保育士の配慮及び留意点	
		T1	T2,3,4,5,6
・手遊びを見たり、いないいないばあの写真を見たりすることを楽しむ。	1. 子どもたちの好きな手遊びをする。(かいでり) ・保育者の動きを見たり、真似たりする。 ・前に出てきたり、どこかに行こうとする子がいる。	・大きな身振り手振りやゆくりと行う。 ・子どもの反応を見ながら手遊びを行っていく。	・着らなくて参加できるように、子どもを膝に座らせたリ、子どもに寄り添って座らせる。 ・子どもたちと一緒に手遊びを楽しむ。 ・人見知りをする
	2. 写真を見せながら子どもたちといないいないばあを楽しむ。		

そこで、公開保育の財産を共有するために、より普段の保育に活用できる指導案をめざして、次のように様式を変更した。

- ・新たに「過程のねらい」を明確に記す。
- ・「保育士の働きかけ」だけだったものを「働きかけと予想される子どもの姿」も記す。
- ・「留意点」としていたものを「保育士の配慮及び留意点」とし、さらに、T1とそれ以外の保育士に分割して記述するようにした。

また、これまで「園児の実態」の記述は、部屋全体に関わる大まかなものが多く、公開保育を参観する観点から曖昧になっていたことから、「一人ひとりの実態」を新たに書くことにした。

①	興味のある所に歩いて移動をし、探求活動を楽しんでいる。保育者の簡単な言葉掛けも分かるようになり、保育者と簡単なやり取りを楽しみむ姿も見られる。
②	興味のある所に移動し、様々な感触の物を自分から触りに行き、感触遊びを楽しんでくれると思う。また、見つけたものを囁声や言葉で保育者に伝えようとする。
③	「冷たいね」「気持ちいいね」などの言葉を代弁していき、まくらちゃんの指差しや喃語に優しく応答しながら言葉の発音へつなげていく。
④	カラーボリ姿やプラプラのマットを出して遊んだところ、それほど興味を示さず他の所へ行ってしまった。動くものや車が好きで他のものにはあまり興味がない様子。歩行ができるようになり一人で歩くことも楽しんでいる。
⑤	保育者の声掛けにより、様々な感触のものを一緒に触ってみようとする。
⑥	「なんだらう」と周囲の気になるものに手を伸ばして触れる姿を見守りながら、時に保育者も一緒に探す、叩くなどして確かめながら少しずつくんの興味を広げていく。

①実態 ②予想 ③願う姿の3つの視点から個々の実態を明確にすることで、保育の内容が豊かに描けるようになったと考える。個々の実態を書くことは、保育者には負担になるように思われるが、実際は、これを書くことで、保育中の園児をみとる目や園児への言葉かけが変わってくる。本園3年目の若手保育士は、大変勉強になったと語ってくれた。

#### (6)個人目標の設定から振り返りまでのPDCAサイクルの確立

4月の第1回職員会で、クラス目標を立案するとともに、各個人においても、自己研修課題(目標)及び具体的な行動目標を設定するように働きかけた。

チーム保育の質を高めるためには、個々の保育士の質の向上は不可欠である。日々目標を意識し、保育に努めることで、園全体の保育力を高めようと考えた。そして、個々の目標を集約して、「たちばな保育園保育士憲章」を掲げた。

研修課題	具体的な行動目標
クラスの先生たちとともに子供の成長を喜び合い、子供とともに楽しく日々を過ごすようにする	子どものことについて関心することなど、意識的な研修を通じて共通し、共通の気持ちで保育にあたる。「園児、職員の状態管理」に努める
子どもが主体的に活動できる保育環境を構築していく	その場の状況に即応することなく、子どもたちにとって本当に良いことは何かを考え、環境を整えるように心がける
子ども一人一人の気持ちに寄り添い、笑顔で接していく	子どもや保育士の表情や状態の変化を敏感に察知し、声をかけていく
子どもたちが安心して、楽しんで過ごすことができる場所をつくる	子どもの興味や好奇心、音などに関心をもち、興味を喚起し、安心して過ごすことができるようにする
お互いに信頼関係を築くための努力、励みあえる	笑顔で対応、まずは相手の言葉から聞くこと、笑顔、言葉「ありがとう」

**たちばな保育園 保育士憲章**  
 一、私たちは、安全で安心、清潔で衛生的な保育環境づくりを心がけます。  
 一、私たちは、子どもたちの利益を最優先に考え、見守り、寄り添う保育に全力を尽くします。  
 一、私たちは、子どもたちの健やかな成長を喜びとし、子どもの気持ち、保護者の思いに共感しながら、保育にあたります。  
 一、私たちは、コミュニケーションを園児ながら、同僚性を高め、よりよいチーム保育を目指します。  
 一、研修を大切に、自己研鑽に励み、保育士としての力量の向上を図ります。

本園では3年前から、項目を決めての自己評価(自分のみの評価)、項目を決めての内部評価(園全体の評価)を実施してきた。

さらに、昨年度からは、各自の研修課題の到達度評価も実施してきた。昨年度10月の到達度評価の際の「今後努力していきたいこと」に記述された

保育士の反省の一部を紹介する。

- ・感情的にならず、落ち着いて子どもたちに接していきたい。
- ・常に笑顔を中心掛け、心に余裕をもち楽しんで保育をしていきたい。
- ・同僚や保護者とのコミュニケーションを大切にします。
- ・研修には、意欲的かつ積極的に参加していきたい。

- ・自分の分掌、役割を果たすとともに、園に貢献したい。
- ・保育士間の報告、連絡、相談、情報の共有を大切にしていきたい。
- ・目立つ子どもにも目が行きがちなので、どの子どもも関りを深め、気づきができるようにしたい。
- ・子どもの思いを一連の流れの中で察して対応していく。
- ・日々成長する子どもたちに合わせた保育を心掛けていきたい。
- ・他の先生方から学びながら保育に努めるとともに、子どもと同じ目線に立ち喜びや楽しさを共有したい。
- ・様々な視点から多面的に子どもを見ながら保育にあたりたい。

以上のように、個々の保育士の個人目標及び具体的な行動目標を明確にしたことで、日頃の保育に対する意識が高まったと言える。昨年度までは下表のように、到達度評価として、数値で自己評価をしてもらったが、具体的な行動目標にまで踏み込んでいなかったため、振り返りが曖昧になってしまっことから、本年度は、評価の窓として「具体的な行動目標」の設定まで行った。

個人目標から振り返りまでのPDCAのサイクルを確立するとともに、今後の保育力の向上を目指していきたい。

研修課題	前期平均 63.8	
	分担	自己評価
職員の間・絆が深まるように研修に意欲的に取り組める職員集団	職場全体	50
皆が参加しやすく、やってよかったと思える園内研修するための環境、雰囲気づくり	職場全体	60
感覚統合についての理解を深め、保育にいかしていきたい	専門分野	40
何でも話し合えるクラスの雰囲気づくり	部屋経営	65
障害児保育について学び、保育力を向上させる	専門分野	70
保育士も子どもたちも居心地のよさを感じる保育室経営	部屋経営	80
保育士間の連携を密にし、子どものことを共通理解し、同じ思いで関わっていく	保育姿勢	78
保護者との積極的なコミュニケーションを図る、積極的に研修に参加し、知識・技能の習得をめざす。常に笑顔を中心掛け、子どもたちと毎日楽しく過ごす。	保育姿勢	70
勤務形態等への疑問、不安等に答えられるように基本から勉強し、最新情報等も把握し、先生方が保育に専念できる働きやすい環境づくりに貢献したい	専門分野	60
園の食育テーマ「五感で旬の食べ物を食べる」に沿った視察、聴覚、臭覚、味覚、触覚でも楽しむような給食をめざす	専門分野	50

#### 4. 成果と課題

チーム保育の質を高めることは、各保育士相互の連携による組織力の向上はもとより、個々の保育士の意欲と保育力の向上が不可欠である。

これまで述べてきたように6つの方策で、保育力の向上に努めてきたが、次のような成果と課題が明らかとなった。

- 「誰かがしてくれる」から「自分がしよう」という職場風土が醸成されてきた。
- 働き方の違いから見られていた保育に対する意識が、職員誰もが「よりよい保育をしたい」という意識に変わってきた。
- 研修の持ち方、報告様式の変更、指導案の改善等の具体策により、研修の活性化が図られた。
- 日常の保育が多忙なため、やはり研修時間の確保は難しい。短時間でも行える密度の高い研修を考えて

いく必要がある。

- 園長、主任、副主任主導の研修だけでなく、部屋長等のミドルリーダーの活躍する場を意図的に設定していく。

研修は、ともすると研修すること自体が目的になってしまい、本来のねらいである保育士の力量の向上や保育

の質の向上に繋がっていかないことがある。そうならないためには、常に保育の現状を的確に把握し、職員の誰もが目指すべき姿を共有しておく必要がある。今後も、現状分析、目標の設定、評価・反省（到達度の測定）というサイクルを大切にしながら、チーム保育の充実に努めていきたいと考える。

講評：チーム保育の質を高める研修の在り方～全職員が生き生きと保育に取り組むために～

評者：天野 珠路

保育士21人中、正規職員が8人という厳しい状況の中で、園長のリーダーシップにより全職員が保育改善に前向きに取り組んでいる様子が伝わります。園内研修の重要性や自己評価の取組の必要性が実感される一方、研修報告書の様式をA4一枚にするなど効率化を図ったこともよい点です。今後は園長や外部講師等によるトップダウンでない、保育士からのボトムアップをどう図っていくかが課題であると思われますが、園長先生自身、こうしたことを認識されていることでしょう。

評者：石川 昭義

3歳未満児専門の小規模の園としての課題を整理するなかで、研修の在り方を見直し、実効性ある研修を目指した研究です。園での課題を整理し、仮説を立てて取り組んだ過程は評価できます。研修報告書の様式の提案によって、内容の焦点化と時間の効率化を図った実践は他園にとって参考になります。指導案の改善を図ったこと、自園の保育士憲章を定めたこと、自己評価の取組など、複数の方策で組織全体のPDCAサイクルを確立することを通して保育力の向上に努めました。

項目の設定による保育士の自己評価の結果、(個々の力量を越えて)園全体としての強みと弱みが出てきているかもしれませんが、そうした課題に対する共通理解や組織としての改善がどのようになされようとしたのかについて、これも園内研修テーマの一つに掲げて今後さらに保育の質についての検証が進むことが期待されます。

評者：田和 由里子

「保育の質の向上」は、保育施設にとっては永遠の課題です。園長先生が問題提起をされ課題を洗い出し、研究テーマを設定されていました。小規模施設で正規職員の少ない中でのチーム編成は、困難でないかと思われました。研修内容をどのようにするかを6点にまとめ実践を行なわれ、各クラスの目標と園児の姿を図にまとめたり、研修内容を改善したり、必要であれば外部講師を依頼する。研修報告を簡素化するために「研修報告書」の作成、外部からの参加のある公開保育、個人の目標に対しての自己評価から振り返り保育力の向上を目指して努力されている様子が素晴らしいと思います。「研修報告書」など独自で作成されていましたが、小さすぎて読みにくかったのが少し残念でした。小規模施設でもチーム編成をして研修体系を確立できるという事の研究を深め今後とも発信をして下さい。

## 「生きる力」につながる「食農教育」をどのように進めていくか

大分県・荻保育園 小出久 美夫

### 1. はじめに

本園のある竹田市荻地域は大分県西部の大地にある。地域の基幹産業は農業で、冷涼な気候の中で生産される高原野菜は品質が高く、特にトマトは西日本有数の生産地となっている。全国的に少子高齢化が進む中、当地区も同様の傾向はあるものの、当地域での農業に魅力を感じ新規就農する若者も多く、児童生徒数は横ばいから増加の傾向がある。地域の教育に対する関心は高く、園の活動に対しても理解が有り、大変協力的である。

本園は、平成31年度4月の園児数は75名、常勤職員15名(保育士11名)と非常勤5名(保育士2名)である。「人や自然との豊かな関わりの中で生きる力を育む」という保育理念のもと、「明るく元気で、あいさつのできる子ども」「感性豊かで、思いやりのある子ども」「よく見て、聞いて、考えて行動する子ども」「粘り強く、最後まで頑張る子ども」を保育目標に日々の実践に取り組んでいる。

地域の特性を活かした農業体験にも開園以来取り組んでおり、本報告では食農教育として、平成30年度から令和元年度に上記のテーマで取り組んだ研究内容を報告する。

### 2. 研究の背景

食品流通技術の発展による時間的、距離的な障壁の克服や作物の品種改良、栽培技術の開発により、私たちの「食」に関する環境は大変「豊か」になってきた。

その一方で、子どもたちの状況を見ると、野菜の旬の時期が分からないなどの知識不足だけでなく、いわゆる「粉食」「固食」「孤食」「濃食」が社会問題化されるなど、将来を担う子どもたちの「食」の乱れは重大視されている。

このような状況を見たとき、人が生きていくために必要不可欠な「食」と、その食料を生産する「農」について、知識だけでなく、五感を通して捉え一体的に進める教育を幼児期から進めていくことが必要である。子どもたちが農業体験、自然体験を通して命の大切さを認識し、「食」を考え「食」への感謝の気持ちを持てるようになり、心身ともに健康な生活を送るための基礎を培うような「食農教育」のあり方を探らなければならない。

### 3. テーマのとらえ方 『生きる力』につながる『食農教育』とは

1996年の文部省(現在の文部科学省)の中央教育審議

会答申の中で「生きる力」について、「・・・自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力など自己教育力・・・自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性・・・たくましく生きるための健康や体力・・・」と述べている。「幼児期で育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と相通じる所がある。

「食農教育」を通して、望ましい食生活について家庭・保育園等で十分指導することは、心身ともにたくましい子どもを育てていく上ではとても大切である。同時に、自らの命を維持する「食」が、他の生命をいただいていることを知ることは、豊かな心を育てていく上からも重要なことである。また、その「食」がどのように作られているかを知ることにも必要なことである。さらに「農」では、地域の特性を活かした「食」の指導や農業体験活動などの豊かな地域体験活動を通して、「命の大切さ」「感謝の心」等児童の内面に根ざした豊かな人間性の育成を図ることが出来る。また、自然を大切にすることや思いやり、感動、知的好奇心等と呼び起こし、科学的なものの見方や問題解決能力の育成にも役立つものである。従って、「食」と「農」の教育が「生きる力」の育成に密接につながると考える。

### 4. 研究仮説

幼児教育において、「食」と「農」に関する教育を、体験活動を中心として意図的・計画的に取り組んでいけば、児童が「食」や「農」に関心を持つとともに、内面に根差した豊かな人間性や主体性と創造性が育ち、生きる力が身につくであろう。

### 5. 研究の目的

- ①子どもたちに「生きる力」を育むために、「食農教育」を、保育・教育計画の中にどのように位置づけ、どのように環境整備をし、保育士や地域人材等をどのように組織化し取り組んでいくか実践をもとに明らかにする。
- ②「食」と「農」に関する指導を通して、日常生活において適切な健康に関する活動につなげ、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎を培うための実践をどう進めるか実践をもとに明らかにする。
- ③「食農教育」がもたらす豊かな心の育成について注目し、その効果を生み出すためにはどのような配慮や仕

掛けが必要か実践をもとに明らかにする。

## 6. 研究の実際

(1)「食農教育全体計画」の作成及び実践内容を「年間指導計画」へどう位置づけたか

食農教育の目標を下記のように設定し、食農教育全体計画を作成した。その内容を年間指導計画に位置づけた。(資料1・2)

### 【食農教育目標】

- 1 食や農業等の豊かな体験活動や自然とのかかわりを通して、「命の大切さ」「感謝の心」等児童の内面に根差した豊かな人間性の育成を図る。
- 2 児童に「生きる力」を育むことを目指し、「食」と「農」を生かした特色のある活動を展開する中で、主体性と創造性の育成を図る。
- 3 「食農教育」を通して、「食」に関する関心を持たせ、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎を培う。

があり、年間1万円で借り受けることができた。

### ②農地の整備

普段の耕うんは、園所有の小型耕うん機で行うが、定期的に深耕する場合は、保護者の協力をお願いした。

### ③「子ども農園」の看板設置

子どもたちに、「自分たちの農園」を意識させるために、農園の看板を製作した。枠組みは地域の木工所に安価で製作をお願いし、園児が装飾した。

### (3) 栽培計画をどう進めたか

#### ①作物の選択

次の視点で、下記の11種類の作物を決定した。

- ・比較的栽培がしやすく、ある程度の収穫が期待できるもの
- ・農薬を使わず栽培しやすい
- ・地域で多く栽培されている
- ・給食の材料によく使われる
- ・栽培期間が短く、成長の様子が分かりやすい

ミニトマト、ピーマン、ナス、カボチャ、スイカ、枝豆、サトイモ、サツマイモ、ジャガイモ、キュウリ、ニンジン

### (2) 環境の整備をどう進めたか

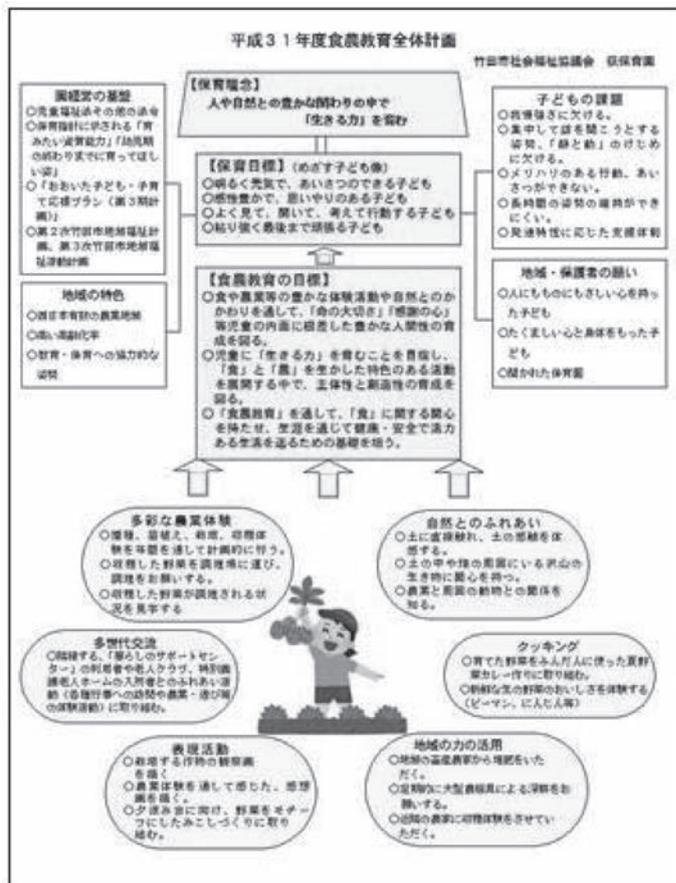
#### ①農園の確保

園舎から250mほどの場所に、休耕中(約800㎡)の畑

#### ②作付け計画

作付けについては、苗などが手に入りやすい時期に植えるということを基本にしたが、収穫時期を「夕涼み会」

資料1



資料 2

平成 3 1 年度		年間指導計画		荻保育園ばら組 (5 歳児)	
保育目標		・友だちとのつながりを深め自主・協調の態度を身につけ、集団生活を楽しむ	小学校教育との連携	・小学校見学や交流を通して修学絵への期待を高める	園長 主任 担当
年間区分		I 期(4月～6月)	II 期(7月～9月)	III 期(10月～12月)	IV 期(1月～3月)
ねらい		・年長児としての意欲と自信を持って活動する	・運動能力を高め活発に遊ぶ	・友だちと共通の目的を持ち、協力しながら活動し充実感を味わう ・新園舎での生活を楽しむ	・就学への期待を持ち、自覚や自信を持って意欲的に行動する
養護	生命	・一人ひとりの健康状態を把握し、異常のある時は、自分で伝えられるようにする	・水の怖さを教え、プールの中でふざげないよう指導する	・運動遊びを通して丈夫な体を作る	・生活習慣を見直し、自信や満足感を持てるようにする
	情緒	・集団の中で、安心して活動できる信頼関係をつくる	・誉めたり認めたりする中で、自信を持って生活できるようにする	・安定したリズムの中で、落ち着いて活動できるようにする	・一人ひとりにしっかり関わり、安心して小学校に送り出すようにする
教育	健康	・戸外でのびのび遊ぶ ・さくらんぼリズムで体幹を鍛える	・プール遊びを通して丈夫な体をつくる ・水分補給をさせる	・手洗い、うがいをして、健康な生活習慣を身につける	・強い足・腰をつくる(雑巾がけなど) ・自分の健康状態がわかる
	人間関係	・気の合う友だちと好きな遊びを十分楽しむ ・野菜の栽培を通して、高齢者とふれあう	・自分の思った事を相手に伝え、相手の思っている事に気付く	・友だちとのつながりを深め自主・協調の態度を身につけ、集団生活を楽しむ	・異年齢の友だちに思いやりや親しみを持つ ・在園児とのおもいでづくり(種を託す)
教育	環境	・散歩などを通して、自然の変化に気付く ・植え付けた野菜の生育を観察する	・暑さが厳しくなるので日陰や涼しい場所で遊ぶ	・保育所内外の行事に喜んで参加する	・園内をみんなで協力して片付けたり、飾ったりする
	言葉	・人の話をよく聞き、相手にわかるように話す	・色々な体験を通して、イメージや言葉を豊かにする	・共通の話題について、相手の気持ちに寄り添いながら話し合う	・日常生活の中で文字や数字を使って、遊びを広げていく
教育	表現	・水・砂・土・紙・粘土など様々な素材に触れて楽しむ ・観察画に取り組み	・友だちと一緒に歌ったり、リズムに合わせて体を動かす ・みこしづくり	・動きや言葉で表現したり、演じて遊ぶ楽しさを味わう	・描いたり、制作することを楽しむ ・英語遊びや茶道教室、音楽教室を楽しむ
	食育	・健康と食べ物の関係に興味をもつ ・お箸を正しく持ち行儀よく食べる ・芋植えをする ・野菜を育てる	・偏食しないで食べる ・野菜を収穫する ・収穫した野菜を使ったクッキングに取り組み	・食事を作ってくれる人に感謝の気持ちを持ち、残さずよく食べる ・芋ほりをして収穫を喜ぶ	・自分の健康に関心を持ち色々な食材をバランスよく食べる ・小学校の給食を食べる
健康・安全		・避難訓練・内科健診・歯科健診 ・交通安全教室・身体計測	・避難訓練・きょう虫検査・身体計測 ・水遊び前の健康チェック	・避難訓練・内科健診・歯科健診 ・防犯教室・身体計測	・避難訓練・身体計測
環境設定		・固定遊具の安全点検して、正しい使い方を教える	・プールの衛生管理(水の塩素検査)	・運動あそびが思いきりできるように、安全な園庭にする	・一人ひとりの発達を再認識して、苦手な事を克服できるよう援助する
配慮事項		・子どもたちが楽しく園生活を送っているか把握する	・プール遊びでは、危険が伴うので充分配慮する	・意欲的に行事に取り組んでいるかを把握する	・就学への期待と自信をもたせる
保護者等への連携		・生活リズムの大切さを知らせる ・早寝・早起きの習慣をつけてもらう	・園の行事に参加することで、安心感や信頼感を持ってもらい子育ての自信につなげてもらう	・朝食の大切さを知らせる ・新園舎を公開する	・卒園にもつづける生活や就学までご準備しておく事などを知らせる
行事		・入園式・親子遠足・子どもの日・虫歯予防デー ・芋植え・誕生会(毎月)	・保育参観・七夕行事・プール開き・夕涼み会・カレー作り	・運動会・親子バス遠足・芋ほり ・クリスマス会	・節分・発表会・保育参観・ひな祭り・お別れ会 ・卒園式(種を在園児に託す)
保育士の自己評価					

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿10項目

○健康な心と体 ○自立心 ○協同性 ○道徳性・規範意識の芽生え ○自然との関わり・生命尊重 ○数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 ○社会生活との関わり ○思考力の芽生え ○言葉による伝え合い ○豊かな感性と表現

のおやつ、クッキング、老人会との交流等の行事に合わせるよう計画した。

(4) 子どもの体験活動をどう進めたか (一部実践例)

①栽培・収穫体験

ア、さつま芋のつる植え (地域の老人クラブとの交流)

a : 参加クラス 4・5 歳児

b : 活動内容及び子どもの姿

- ・地域の老人クラブの皆さんを紹介し、各グループにクラブの皆さんに入っていた。
- ・各グループごとで自己紹介の後、分担された場所で作業に入った。
- ・ほとんどのグループでクラブの方が竹で穴をあけ、そこに子どもたちがツルを植えていくという手順で行った。作業をしながら、「うまいよ」「優しく植えてね」など、クラブの方が声掛けをする姿が見られた。
- ・クラブの皆さんには常に笑顔が見られ、子どもたちへの優しい声掛けで子ども達も楽しい作業になったのではないと思う。
- ・翌日より晴天が続くツルがしおれていき、農園を見た子どもたちから「ツルがカラカラになって大丈夫?」「水をかけようか」など心配する声が聞かれた。



(写真 1) サツマイモ植え

イ、枝豆の種まき

a : 参加クラス 5 歳児

b : 活動内容及び子どもの姿

- ・説明の後、穴があけられたマルチの中に、3粒ずつの種をまいていった。
- ・播種後「さっきからハトやカラスが見てたよ。大丈夫かな」と聞かけると「見張ってカラスが来たら追っ払おう」とか「上に網を被せよう」「案山子をつくろう」等様々な発想で答えが返ってきた。
- ・子どもたちの意見を取り入れ、網をかけ、芽が出るまで成長を見守ることにした。

#### ウ、ピーマン、ミニトマト、ナスの収穫

a：参加クラス 3～5歳児

b：活動内容及び子どもの姿

- ・ピーマン、ミニトマト、ナスについては、毎日収穫できたので、各クラスの計画に合わせ調整しながら収穫を体験させた。
- ・「先生こんなに大きいよ」「僕のほうがもっと大きい」など、歓声を上げながら競い合って収穫する様子が見られた。
- ・ミニトマトは、近くの水道で洗いそのまま食べさせることもした。



(写真2) ナスの収穫

#### エ、さつま芋の収穫（地域の老人クラブとの交流）

a：参加クラス 収穫：2～5歳児

試食：1～5歳児

b：活動内容及び子どもの姿

- ・縦割りのグループに老人クラブの方が2名ずつ入るようにグループ分けをし作業を進めた。
- ・芋が掘りあがると「わーっでかいぞ」「4つも連なってる」など歓声が聞かれた。
- ・予め収穫し、蒸かしておいた芋を皆で味わった。クラブの皆さんから温かく見守られる中での活動で、子どもたちもやさしさを感じ、満足の様子であった。

#### ②クッキング「夏野菜カレーづくり」

a：参加クラス 5歳児

b：活動内容及び子どもの姿

- ・子ども農園で栽培した野菜たっぷりの夏野菜カレー作りに挑戦した。
- ・包丁遣い、野菜の皮むき、米とぎ・炊飯など、初めての経験者が多かったが、すべての行程を経験することができた。
- ・試食会には近隣施設利用の高齢者を招待した。食事をしながら利用者に調理の行程や野菜の成長の話を楽しそうに説明する姿が見られた。
  - ・おいしさも格別な様子で、何杯もおかわりをする様子が見られた。



(写真3) クッキング

#### ③表現活動

##### ア、成長観察画

a：実施クラス 5歳児

b：活動内容及び子どもの姿

- ・枝豆やじゃが芋の成長を自由画帳に描き記録をとっていった。1回目に芽生えの記録を描いたが、ほとんどの子どもが土の中の様子まで描いていた。植えた時の記憶が残っていたと思われる。
- ・また、1回目の記録は、1回目の記録に書き足す子どもがほとんどで、これも、前回の様子が記憶にあり、そこから成長した様子を想像できたのだと思われる。
- ・3回目以降は特に指導しなくても、見てきたものを記録する姿が見られた。



(写真4) ジャガイモの観察画

##### イ、みこしづくり

a：実施クラス 5歳児

b：活動内容及び子どもの姿

- ・夕涼み会に向け、みこし製作に取り組んだ。みこしの上に何を乗せるか話し合わせたり、みこしのまわ

りの装飾も自分たちで考えさせた。その結果、スイカ、ピーマン、トマトが乗った3台のユニークなおみこしが完成した。

- ・完成したみこしは、夕涼み会だけでなく、敬老会や地域の収穫祭でも披露することができ、地域の方にも喜んでいただけた。



(写真5) みこしづくり

## 7. 結果及び考察

- 栽培活動や観察には非常に興味・関心を持ち、農園での活動にはとても取り組んだ。「学問なき経験は、経験なき学問に勝る」という諺があるが、まさに実体験に勝るものはないと考える。土に触れ、果実の感触や香りを感じ、周囲の虫等小動物の存在を知る。このような体験によって、興味や関心の幅が広がり、これからの自然観や食への関心も広がると考えられる。
- 体験を通して、作物が育つまでに、病気や水不足、害虫、害獣による被害があることを知り、また、自分たちの育てた野菜への愛着から、食への感謝の気持ちも芽生えたようである。苦手な野菜も有難くいただくような子ども育成につなげたい。

- 地域の高齢者との交流により、お年寄りの知恵や温かい優しさにふれる経験ができた。核家族化が進み、田舎であっても別所帯の家庭も多く、子どもたちにとってはこのような体験は、豊かな人間性を育てていくうえでとても重要なことであると考ええる。

- 野菜や植物、周囲の小動物への関心を、製作活動の意欲につなげることができた。また、みんなで作物の安全な成長を考えたり、成長を想像したり、効率的な作業方法を考えたりする活動は、子どもに思考力・判断力・協働性等を育むことにつながると考える。

- 活動を通して「幼児期で育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の育みの様子を確認することができた。

## 8. おわりに

昨年度より「生きる力につながる食農教育をどのように進めていくか」をテーマとして研究に取り組み、上記のような成果を得ることができた。「はじめに」で述べた通り、農業体験については開園以来取り組んできており、その幼児教育における有効性は述べられてきた。しかし、体験活動を前例踏襲的に毎年行うだけではその意義は薄れ、その準備等保育士の多忙感ばかり残ってしまいかねない。大切なのは「その取り組みでのような力を子どもたちに育てていくのか？」という「取り組みの意義づけ」ではないかと考える。そのことにより、どんな工夫・仕掛けが必要か？子どもの変容をどうとらえていくか？といった取り組みのし方も違ってくる。今回子どもを取り巻く課題から「生きる力を育む」という目的を確認して取り組み、一定の成果を実感できたことは大きな成果だと言える。今後ともこの経験を生かし、目的を持った実践を重ねていきたい。

## 講評：「生きる力」につながる「食農教育」をどのように進めていくか

評者：天野 珠路

「食育」を保育内容の一環として指導計画に位置付け、積極的に取り組む様子が記録されています。地域の方との連携・交流を図りながら本格的に取り組む「食農教育」はかなり大掛かりで、園長の熱意とリーダーシップがあつてのことと思います。地域とのつながりの中、広い農園で繰り広げられる活動は子どもたちにとって思い出に残る貴重な体験になるでしょう。食農教育が成長に及ぼす影響や子どもの変容について、具体的な記載がもう少しあったらよかったですと思います。

評者：田和 由里子

保育理念・保育目標に従いました、地域の特性を生かし農業体験を長年取り組んで来られた様子が伺えました。園児数や職員数の少ないなか農業を行うのは大変な作業であつたかと思われます。農園の確保・整備等地域の老人会の協力など園長先生の地域でのつながりが深いのだと察することができました。それを保育の中に取り入れる年間計画の作成等全職員で意識統一を行い進めて行かれたとも思われます。子どもの体験活動も四季を通じて行えるように作付け計画もしっかり検討されていまして。写真などでその様子が伺え楽しみながら学んでいたと思われます。収穫した作物でのクッキングから製作活動へと発展している。一つの活動があらゆる分野の学びに繋がっていると感じさせられる研究であつたと思います。取れたての野菜をその場で食べることはとても得難い体験ですが、安全面に配慮している記述があつたほうが安心できると感じました。今後とも地域の方々と協力して継続して下さい。

評者：馬場 耕一郎

年間計画に基づいて、栽培活動から様々な活動へ広げられた研究です。体験活動を前例踏襲的に毎年行われていると保育士の多忙感ばかり残りってしまう考えは、保育現場が抱える大きな悩みと言えます。研究を通して、保育園が行う取り組みにより、子ども達にどのような力がはぐくまれるかという視点を再認識されたことは、今後の計画を構築する上でも大変重要なことです。栽培活動から子ども達の生きる力が身につくことを願っています。

## 絵本に親しむ中で見えてきた子どもの姿 ～絵本がつなぐ親・こども・保育園～

沖縄県・第2愛心保育園 宮平典子

### I はじめに

近年、タブレット端末やスマートフォン等、中高校生のみならず幼い子ども達にも身近な存在になり、様々な情報がいち早く入る時代になりました。

また、若い保護者（親）が育った環境を振り返ってみると、物心がついた時からゲームやDVDが身近にあり、中高生の頃にはほとんどの人が携帯を持っていた世代です。スマホやメディアに頼るのはよくないとわかりながら、子どもに「おとなしく、静かにしてほしい」という思いで、病院での待合室等公共の場で、利用している状況が多いように感じます。その他にも例を挙げると、お迎えにきた母親のバックから子どもがスマホを取り出し、園内で子どもが歩きスマホをする姿がありました。

一方で、保育園では保育士が暑い真夏の日にも関わらず、読んでいる本が真冬の絵本を読み聞かせており、季節にそぐわない絵本選びをしていました。状況を確認してみると、そのクラスに備えられている本は、季節外れの絵本が多かったのです。

このような現状から、今一度「絵本」を通して乳幼児期の今、大切な親子のふれあいについて、そして新任保育士の質の向上に向け、保護者も巻き込んで絵本の素晴らしさを伝えながら、絵本がもっと身近な存在になれるよう計画的に実践し取り組むことにしました。

### II 研究の目的

- ・絵本を通して、心にしみ込んでいく内容の楽しさと愛情を子どもや保護者へ知らせていく。
- ・絵本から得る乳幼児期に大切な非認知能力、コミュ

ニケーション能力を高めていく。

- ・保育士の質の向上につなげていく。

### III 研究の期間・方法

- ・平成30年6月～令和元年9月・・・1年3ヶ月
- ・園が取り組んでいる絵本の貸し出しを強化（環境グループ絵本担当）
- ・0歳児～5歳児の毎月発行しているクラスだよりにておすすめの絵本紹介
- ・各年齢に応じて絵本にふれる機会や活動を増やす
- ・講師を招き保護者、保育士が学ぶ機会を作る。（育児講話）
- ・保護者アンケートを実施

### IV 実践と考察

【実践1】親子の「絵本」についての関心度を知る。

（現状）これまで園が取り組んでいる保護者支援の一つである、「絵本コーナー」を玄関先と、2階に設け、テーブルと椅子を設置している。夕方のお迎え時など親子で楽しそうに声を出して絵本の読み聞かせをしている微笑ましい光景を見かけるが、その光景は同じ親子が多く、貸し出し表の記録からも、残念な事に、全クラスほぼ同じ親子が絵本の貸し出しを利用していることがわかった。（実践）

- ①各階の絵本コーナーを充実（季節の絵本紹介ボードを作成）

絵本の貸し出しをより多くの保護者へ周知してもらうための方法を環境グループで話し合い、更に各クラスの



拡大図：親子で一緒に・・・

①環境グループによる紹介ボード

子ども達の絵本の好み、興味深い本などの情報を共有した。実践方法として保護者へ情報を発信する事を提案、絵本コーナーの場所にスペースを作り、環境グループによる毎月「季節にあったおすすめ絵本」の紹介ボードを作成、掲示し絵本を並べて保護者、子ども達へ興味、関心を持たせられるようにした。

②各クラスのクラス便りによる情報発信（クラス便りに毎月掲載）

各クラス担任が、毎月発行しているクラスだよりを有効活用し、その年齢にあったおすすめ絵本、また日頃の子どもの様子、興味関心を示している大好きな絵本、季節にちなんだ親子で楽しめる内容の絵本を毎月掲載する。

それに加えて、クラスでも午睡前等に紹介した絵本を繰り返し読み聞かせしたり、家庭においても共通の話題

につながるように行った。

③環境グループによる「絵本だより1号」発行（別添1）

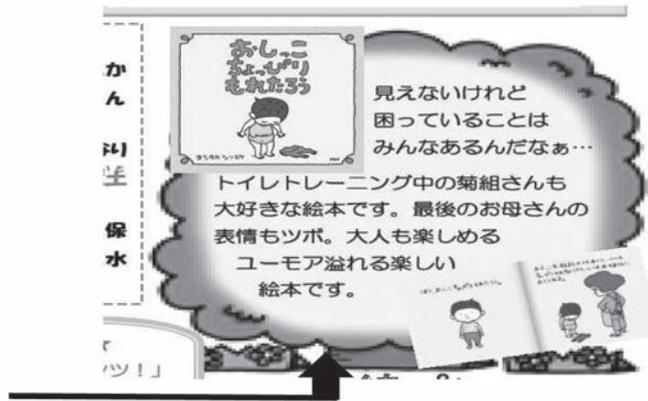
職員が研修で学んできた内容を保護者へ発信。

子育て支援の一つとして、「絵本だより」を発行する。

（別添1）

考察

子ども達は紹介ボードを掲示することにより、絵本コーナーに興味を示し帰り際に保護者の手を引いて絵本コーナーに向かう姿が見られた事は良かった。また、毎月のクラス便りの掲載、絵本だより（別添1）発行により、保護者からも好評の声が聞かれたことや関心、理解に繋がったことは良かった。また、職員も絵本を紹介するにあたり絵本とふれあう時間が増え、子ども達への読み聞かせ等でのポイントを確認したり、実践へと繋がり、保育の質の向上につながった。



②各クラス便りによる年齢に応じたおすすめ絵本を掲載

【実践2】各クラスでの実践報告

○3歳児クラス…漢字絵本から見てきた子どもの姿  
当保育園では、特色のある保育内容として漢字教育を取り入れている。

3歳児より、石井方式の「漢字絵本」を設定保育の中で、子ども達と楽しく読みながら文字に親しみをもち、絵本の内容を理解している。5月の漢字絵本「3匹の山羊」を読んだ後日の会話より、子どもたちの姿を紹介する。

・クラスみんなで散歩へ出かけた時、山羊をみた子ども達の様子

Aさん：「あっ、がらがらどんと、同じ山羊がいるね」

Bさん：「だけど、みて、大きい山羊と小さい山羊がないよ～」

Cさん：「山に草を食べに行ってるんじゃない？」

A、Bさん：「そうだね、山に行っているかもしれないね」

○4、5歳児クラス…絵本にふれあう時間を計画して作

り、子ども達の様子をみる。

少しずつ字に興味を持ち始め、字が読める喜びを感じている（5歳児）。

また、絵本コーナーを、3階にも設置して週に1回、朝の15分絵本タイムを設ける。

本を増冊し、生き物、植物など生命に関する図鑑なども用意し、自ら調べやすい環境構成も考慮したり、絵本、図鑑等が取りやすい場所に設置してみた。

考察

3クラスの実践から、3歳児の漢字絵本を通して見てきた事は、子どもは目（視覚）耳（聴覚）脳を使って内容を理解しつつ、体験を通して（普段の体験+絵本の体験）によって感性が育ち、言葉（表現力）想像→コミュニケーション能力、非認知能力に繋がっていることが見えてきた。

また、4、5歳児では静かな保育環境を設定することにより、子ども達も落ち着き、静と動の区別も自ら気持ち行動へ移せるようになってきた。



・教室で育てているグッピーを観察し、  
図鑑で確認する5歳児

・4歳児の子ども達も絵本に興味を持ち始め  
好きな絵本を選び集中して読んでいる。

5歳児クラスがグッピーを飼育しているが、グッピーに変化がみられた。(産卵)

友だち同士で図鑑を広げ調べたりと、話し合う様子も見られた。また、隣のクラスの4歳児も、5歳児クラスが静かにしていることで相手の事も(静かにする時間)理解するようになり、5歳児の真似をするようになったことから、道徳性、規範意識の芽生えと成長が感じられた。(絵本を見る時間を設ける)

【エピソード：2歳3ヶ月のY君の暗記力、語彙の育ち】  
(Y君の状況)

0歳児から入所している6月生まれのY君は、現在2歳3か月。4歳になる姉と両親の4人家族。仕事の関係上、朝も早く、帰りも遅い時間まで保育園で過ごしている。(実践、エピソード)

子ども達の成長や様子等は、送迎時や、各クラス担任が毎月発行しているクラスだよりでも、子育て情報、季節や年齢の特徴に合わせたおすすめ絵本、子ども達が関心を見せる大好きな絵本等を紹介、発信し情報を共有している。

Y君が0歳児クラスの時の取り組みとして、保育士が活動を始める前に、子ども達を集めて繰り返しの言葉がある絵本を選んだり、子ども達の発語につなげる要素がある絵本を読み聞かせしており、その中から、エリックカール作：はらぺこあおむしの絵本をよく読んでいた。

Y君の保護者も忙しい中、「はらぺこあおむし」の本

を就寝前に読むようにしていると報告があり、そのような状況からY君の「絵本」に対する興味関心が強く芽生え始めてくる。

0歳児クラスも後半を迎え、指差しでの意思表示や喃語が活発に現れ、絵本の置き場所などY君は覚え、指差しで「あ〜し」と、Y君なりに「あおむし」と、発語、要求する姿が見られた。

進級し、1歳児クラスになると、CDによる読み聞かせを好むようになり、「あおむし」の曲が流れだすと体を揺らしながら、踊りを楽しみ、行動も活発になってきた。そんな中、Y君の行動にある変化がみられた。保育園の玄関先に設置している絵本コーナーがお気に入りのY君。保護者が迎えにくるといつものように大好きな絵本棚へ向かうと、いつもは、決まって「はらぺこあおむし」の絵本を探して持ってくるが、いくつもある絵本から、エリックカール作の特徴ある絵を覚え、違う絵本を取り出して、保護者へ「読んで」と、要求していた。字が読めるわけでもなく、1歳児の行動とは思えないほど優れた暗記力、視覚からの絵本選びに衝撃をうけた。Y君の影響もあり、運動会では「はらぺこあおむし」をイメージして、親子競技に取り組み、周囲の子ども達もおおむし、ちょうちょになりきり、親子で楽しむ事ができた。

令和元年9月現在、2歳3か月のY君は、3語文での会話が成立。おしゃべり上手で表現力豊かなY君の今後の成長が楽しみである。



・1歳児クラスの読み聞かせ



・お面をかぶり、「あおむし」  
になりきる1歳児



・担任による手作り  
ペープサート(曲付き)

### 【実践3】 保護者アンケート（別添2）

保護者87名中／60名 回収率 69%

毎年、講師をお招きして保護者向け、また、地域の子育てセンターの拠点として近隣の保護者へも情報を提供しながら「育児講話」を開催している。今回は、「絵本が持つ力」～親と子のふれあい～と題して、保護者へ絵本を通して子どもとのふれあいを楽しんでもらいたいという思いから、NPO法人「絵本で子育てセンター」の認定講師をお招きして、有意義な時間を共有することができた。講話終了後、予想以上に保護者の反響が大きく、様々な声を聞くことができたのはよかった。

#### ●保護者アンケートを通してみてきたもの

育児講話を開催した後、保護者アンケートを配布・集計し、0歳児～5歳児の子を持つ保護者対象にいろいろな声を聞くことができた。

その中から「絵本にふれることは大切だとわかっていても、なかなか日々の忙しさに、読み聞かせをする事をおろそかにしていた。」「保育園で絵本を読んでもらえば充分ではないのか?」「絵本が良い事はわかっていてもスマホやタブレットに頼ってしまう」等、家庭で絵本にふれる時間を作ることが難しい現状があることが見えてきた。保育園で絵本に親しむことはもちろんだが、絵本は、家庭で大好きなお父さん、お母さんにも読んでもらいたいもの。なぜなら親と子が寄り添いふれあいながら、互いのぬくもりを感じ、楽しむ・・・そこに絵本の醍醐味があると思う。就寝前の少しの時間等に、ひと工夫して意識的に時間を作ってあげる事が、乳幼児期の子どもにとって生涯にわたり忘れる事のない深い愛着関係や感性、コミュニケーション力・言語力を育むことが出来るという事を保護者へ伝えていくことの大切さを感じた。また、保育園で取り組んでいる週2回の絵本貸し出し利用状況の回答についても、(別添3参照)「お迎え時間がギリギリの為利用できない…」「ゆっくり選ぶ時間がない…」など、保護者は日々の生活に余裕が持てない実態も貸し出しが少ない要因の一つだと感じた。

講師の大湾仙氏より、読み聞かせのポイントやタイト

ル作者名も読む必要性等(同じ人が書いた本だということに気づく)をはじめ、多くの大切なことを学ばせていただいた。保護者支援の手立てとして、忙しい人や子育てに悩んでいる保護者に5～10分の絵本の読み聞かせを通して親と子の心のふれあい(愛着関係)を育みながら絵本の持つ力と楽しさを伝えていきたい。

#### まとめ

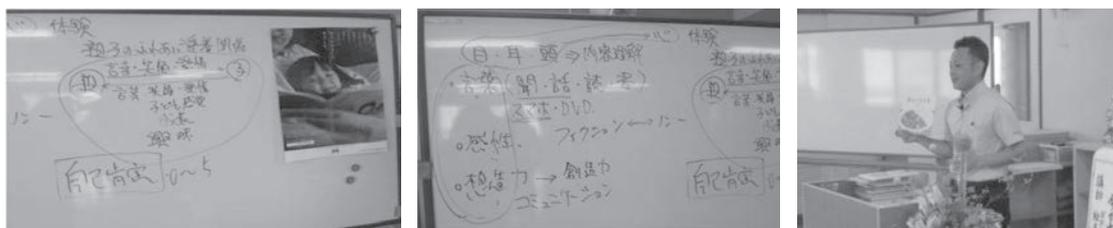
1年3ヶ月にわたり「絵本に親しむ中で見えてきた子どもの姿」をテーマに、職員間で保護者へ発信の手立てを考え、又、自ら日頃の保育を振り返り話し合いを重ねてきた。幼い頃、身近な人に絵本を読んでもらった経験はかけがえのないもの。大人になっても大好きだった絵本を思い出すたびに、身近な人の肌のぬくもりや読み聞かせをしてもらった声がよくえり、勇気づけてくれると言われている。読み聞かせの効果として「言葉の力(豊かな語彙、表現力)」「言葉を繋げて新しい物を組み立てる力(思考力)」「話しを集中して聞く力」「活字や本への親近感」「知的な好奇心」等、多くの効果があげられ、いくつもの恵みをもたらしてくれる絵本。

このことから、読み聞かせをする事で子どもは、目や耳、思考力を使い、コミュニケーション能力、数値化が難しい非認知能力(言葉・感性・想像力)が育つことが見えてきたと同時に、言葉(発語)から→聞く、話す、書くといった乳幼児の成長において大切な事も理解できた。絵本の読み聞かせは、私たち保育士のみならず、保護者も一緒になって「親子の心のふれあい」の手立てとして一番に大切にしてほしい。

今後も私たち保育士ができる事(人的環境)を創意工夫しながら、子どもが主体的に活動できるよう物的環境も取り入れ、質の高い保育を目指していきたい。

子ども達にとってずっと記憶に残る絵本との出逢いは人生を豊かにする。

そして、一冊一冊の絵本がもっと子ども達の心に響くような伝え方を工夫することは、私たち保育士にとっても大きな財産になる。そのことを保護者にも発信していきながら、子ども、親、保育園と三位一体となり、これからも絵本の素晴らしさを共有していこうと思う。



・育児講話の様子(大湾 仙氏) 令和元年5月26日 場所: 第2 愛心保育園



# 絵本だより ～第2 愛心保育園～ 第1号



【別添 1】

令和元年 5 月 17 日

環境グループ

絵本担当

発行者 金城千亜紀

☆絵本の貸し出しが始まりました☆

新年度の絵本の貸し出しがスタートしました。今年度も“子ども達にたくさんの絵本と出会ってほしい”、ご家庭で絵本の読み聞かせを通して“親子のふれ合う幸せな時間を作ってほしい”という想いで、絵本コーナーのご利用のお知らせ「絵本だより」を発行いたしました！どうぞ、ご利用下さいね！

(水槽の横)



(1F階段の横)



(絵本ファイル)



↑ 1階に設置している絵本貸し出しコーナーです。絵本を借り、絵本ファイルに記入をお願いします。



↑ 絵本の返却はこちらの返却箱へ♪



「今月のおすすめ絵本」も毎月紹介していく予定です。お楽しみに☆

## ☆絵本の貸し出しのルール☆

・絵本の貸し出しは、毎週木曜日と金曜日で、返却は月曜日と火曜日です。返却日は基本的に月曜日と火曜日ですが、他の曜日に返却しても大丈夫です。返却する時は返却箱に入れて下さいね。

・絵本が破れたり、汚れたりした場合は、保育士に声かけ下さいね。園で修正します。

※お迎え時（5時過ぎ頃～）は、駐車場が混雑する事が多いので、絵本貸し出し日の木曜日と金曜日に、絵本を借りる予定のある保護者さまは、学童前の駐車場のご利用をお勧めします。

幼い頃に親にしてもらった読み聞かせは、一緒に共有した場所や時間の思い出が、大人になってもずっと記憶に残るものなのだそうですよ。今の時期だからこそ、親子の絆を深めてみませんか。

☆来週 25 日（土）に行われる保育参観、育児講やでは、絵本をテーマに「絵本の持つ力～親と子のふれあい～」

の内容でNPO法人「絵本で子育てセンター」認定講師・大滝 仙先生にご講話頂きます。

どうぞお楽しみに!!



【別添2】

保護者の皆様へ

令和元年7月1日  
第2愛心保育園  
保育実践研究グループ

**\*絵本についてのアンケート～ご協力お願い～**

毎年子ども達のより良い成長の支援につながるように、保育の質を高めるために職員が取り組んでいる“保育実践研究”（日本保育協会主催）。今年度は昨年に引き続き、実践を深めたいという思いで、「絵本を通して育む心・感性(親子のコミュニケーションを深める)」をテーマに研究を進めております。そのようなわけで、保護者の皆様のご意見も反映させていきながら、絵本の持つ力が子どもの成長に繋げることができるよう、研究を深めたいと思っております。何かとお忙しいことと思いますが、11日(火)までにご提出くださいますようご協力よろしくお願いたします。

☆アンケート☆ (当てはまるところに○印を付けてください)

- ①ご家庭で絵本とふれ合う環境または、機会がありますか？  
(それぞれの回答の内容、又は理由をお聞かせ下さい。)

ア はい [ ] イ いいえ [ ]

- ②お持ちになっている絵本は何冊ぐらいありますか？  
ア 1～5冊 イ 6～10冊 ウ 11冊以上

- ③どれくらいの頻度で読み聞かせをしていますか？  
ア ほぼ毎日 イ 週に1～2回 ウ していない

- ④いつ読んであげる事が多いですか？  
ア 寝る前 イ その他 [ ]

- ⑤お子さまに読み聞かせすると喜ぶ絵本は、  
どのような絵本ですか？(絵本のタイトルでも可)  
[ ]

★5月末に開催された、大湾仙氏による絵本についての育児講話のご感想をお寄せ下さい！

- ⑥絵本はどのようにして入手されていますか？  
例) 書店で子どもと購入  
[ ]

☆最後に園での絵本の貸し出しについて

- 1、絵本の貸し出しを利用したことはありますか？  
ア あります イ ありません

- 2、利用したことのない理由や貸し出しについてのご意見等がありましたらお書き下さい。

[ ]

クラス名に○印を・・・苺組、桜組、菊組、梅組、百合組、桃組

**\*ご協力ありがとうございました。アンケートは回収箱か担任までご提出くださいませ！**



講評：絵本に親しむ中で見えてきた子供の姿～絵本がつなぐ親・子ども・保育園～

評者：天野 珠路

絵本を通して育つものを園全体で共有し、保護者に伝えるなど親子関係にも着目した取組になっています。絵本を介して子どもと保護者がもっと触れ合ってほしいという保育者の願いが伝わります。しかし、大人に「与えられている絵本」という感があり、子ども自身が楽しく面白く読んだり見たりする中で育つ創造力や表現力、遊びへの展開に言及してほしいと思います。年長児が自分で描いたり写真などを張ったりして絵本を手作りする活動を取り入れてみたらどうでしょうか。

評者：田和 由里子

「絵本」を通して非認知能力やコミュニケーション能力を高めるという研究の目的・方法や期間も長く取り組まれていました。「絵本」を家庭に貸し出しをして親子のコミュニケーションの手助けをしているのはどこの園でもされているとは思いますが。絵本コーナーに「季節にあったお勧め絵本」の紹介ボードやクラスだよりによる紹介、グループによる「絵本だより」の発行など情報発信を駆使されていました。「絵本コーナー」に親子で絵本の読み聞かせができるスペースがあるのは羨ましいです。これからもどんどん活用して欲しいですね。今回、外部講師の方から「絵本が持つ力」と題しての講話を受けての保護者アンケートのまとめが掲載されていたら良かったらいいと思いました。沢山の絵本がある中で保育者自身も保護者や子どもたちに紹介できるように研究を積み重ねることが大切ですね。

評者：日吉 輝幸

今回の実践報告は絵本に関する取り組みですが、絵本を通して親子の愛着関係を深めてもらいたいとの願いで、保育園だけではなく保護者へも読み語りの大切さを伝えているのは評価すべき点であると思う。しかしながら保育の現場では、保育者による読み語りだけではなく、CDによる読み聞かせがあるとの記述は意外でした。互いのぬくもりを感じ、楽しむのが絵本の醍醐味と記述している園の活動とは信じがたいものです。事実であるならば、取り組みの再考を願いたい。

## (4) 奨励賞

### 〈課題研究部門〉

#### ・課題研究①人とのかかわり

子どものこころの育ち～おもいやりを通じて見えてきたこと～

野上 知美、詰坂 晴代、川邊 紅瑠未、國丸 美穂、今川 未来、  
古木 杏誉、緒方 詩織（福岡県・まみい保育園）

### 〈自由研究部門〉

運動能力を養う保育とは

高萩 久美子（福島県（研究会員）・ユーパロ室ノ木保育園）

発達トレーニングを保育に導入すること

伊丹 陽（福島県（研究会員）・ユーパロつつみ分園）

園での安定した生活向上を目指して～3つの取り組みを通して、見通しを持てる子を育成する～

鈴木 智美（岐阜県・川辺町第3こども園）

我が園の食育がいつでも、どこでも、だれにでも定着することを願って！

大神 敬一（福岡市・多々良保育園）

「お散歩コースから見えてくる危険な場所」

比嘉 淳子（沖縄県・愛心保育園）



## 課題研究① 人との関わり

### 子どものこころの育ち

#### ～おもいやりおやつを通じて見えてきたこと～

福岡県・まみい保育園 野上知美・詰坂晴代・川邊紅瑠未・國丸美穂・今川未来・古木杏誉・緒方詩織

#### 1. はじめに

当園は、保育者が普段の保育から感じた、疑問や興味を研究するグループを作っている。本稿はその一つの研究グループのテーマである「食と心」チームによる研究と実践から報告する。今年で17年目を迎えた当園は、子ども一人ひとりが主体的に遊びに取り組み姿が定着し、子どもの選択を大切に、自主制のある保育が行われている。しかし、いつもと違う状況や、困った事があると時間を要する子、または困っている人に対して無関心な子の様子が気掛かりだった。子ども達が生きていくこれからの未来は、どのような状況や場面でも自分で乗り越えたり、人と協力し関わり合う力が必要不可欠となる。友達との協同的な関わり中で、子ども達の中に生まれる心情に注目し、人との関わりを深める保育が出来ないかと考えた。

今年度の4月に研究会を発足し、子ども達の心の育ち、人との関わりを観察し、「おもいやりの心」を育てる為に、どのような保育が必要であるか考えた。今回、注目したのは、おやつ時間。この時間を使って、自ら考え行動し、小さな困った場面にでくわした時に、子ども達はどんな行動に出るのか、保育者の言葉かけ、関わりが重要となってくる為、話し合いを行い、子ども達の心の育ちを、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿を参照しながら記録した。

#### 2. おもいやりおやつの実践

今回は「おもいやりおやつ」と称しておやつ時間を子ども同士の対話を大事にした保育として捉えた。言葉による伝え合いや道徳性や規範意識の芽生えが出てくる2歳児から5歳児を対象として、大事にする部分を、以下の三つにポイントを置き、ねらいを明確にして保育を行った。一つ目は、子ども達にとっての小さな困り事を、意図して環境を構成する。今回の小さな困り事とは、いつもと違う環境や当たり前になっている事に変化をつけることで、自分で考えて行動に移すきっかけを、意図して環境構成をする。二つ目に、保育者の言葉かけは、子ども達が自分で考える事が出来るように、先入観を持たず、具体化しない。三つ目におやつを食べ終えた後の対話の時間を設け、子ども達の気付きから対話を膨らませ、道徳性を育むことをねらいとした。これらの視点を念頭に置き、研究グループ、または担任、給食室と連携を取りながら保育を行う中で、子ども達がどのように育って

ほしいのか、どのような環境設定が必要なのか、迷うこと多々があった。そこで、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿を元に、育ちを見守り、環境設定をすることにした。

※おやつは最終的に規定の量を食えることが出来るように、おかわりや個別対応を行っている。

※子ども達の撮影は、なるべく子どもの関わりへの妨げにならないように行っている。

#### 3. 子どもと保育者の事例と変化

##### <第一段階>

ありのままの現状を把握するため、保育者が必要以上に声掛け、援助を控えおやつ時間を見守った。

2歳児と3歳児は同じ条件で行った。この日のおやつメニューはマフィン2種類から自分で選んで食べるものだった。6人テーブルに2種類あるおやつが運ばれるが、5つしかないという状況を構成した。

2歳児では、自分がどれを食べたいなど友達同士で口々に話していた。みんなで「いただきます」をすると、おやつがない子や自分が食べたい物が取れない子、好きな物が取れて満足そうな子、泣いている子を気にかける子など、子ども達の様々な姿が見られた。普段、自分で食べる量を選択し、満足いく楽しいおやつ時間とは一変し、混乱する子もいたが、じっくり状況を整理し、自分で考える様子も見られた。時には、周囲に助けを求め、困っている子に自然と自分のおやつを分けてあげるなどの行動も見られた。しかし、自分の欲求が優先され、奪い取ったり、大泣きする姿もあり、そうなった時に保育者が寄り添い、仲介しなければならぬ状況も多くあった為、どこまで介入すべきか、どのような関わりが子ども達の心を育むことができるのか課題となった。

3歳児では、一つ足りないということに気づいた子が瞬時に自分の分を分ける姿も見られ、自分のことだけでなく、相手の気持ちを汲み取り行動にできる子もいた。その一方、おやつを食べることが出来なかった子が自ら行動したり、その周囲の子も気にはなっているが何も手を貸さない現状もあった。子ども達は困った場面があるとまず、保育者を求めることが多い為、自分で考えても分からないことは友だちを頼ることが出来るような関係性に繋げていきたいと感じた。

4歳児では、テーブルの上に一袋数が足りないおやつ

と、お皿を配置した。ランチルームへ入る子ども達は、自分が座るテーブルを決め、順次座っていくが自分の座る席と一緒に食べる友だちを選べない子もいる。子ども達はおやつを目の前にして、自分の分をまず確保しようとする事が多い。しかし、おやつの数が足りないことに気づくと、手にしたおやつの中身を数個皿にとり、残りをあげたり、「多い方がいい？」など話を聞きながらおやつを分けてあげる子等、それぞれに素直な反応が見られた。



一方、困っている事にも気づかず、楽しそうに食べ続ける子も混在した。また、保育者に「食べていい？」「次何したらいい？」と指示を待つこともあった為、日頃の保育で子ども達自身で解決できるような関わりが必要だと感じた。

5歳児は、それぞれでグループを作り、ランチルームへ移動する。ボールに入ったおやつを取り分けから、子ども達が自分で考えることが出来るように、取り分けする調理器具（おたま、大スプーン等）を用意し、食具は自由に取りに来られる位置に配置した。子ども達はいつもと違うおやつ時間に興奮しているようだったが、なかには、いつもと違う事に戸惑う子もいた。取り分けの際、調理器具を使う経験も今まで少なかったこともあり、取り合いや意見の食い違いが起こる。また、それぞれのグループで取り分け方に違いが見られた。一人の子が量を聞きながら取り分けのグループ、各自好きな量を取り分けていくグループ等様々であった。取り分け終わると、ほぼ全員の子が「いただきます」の挨拶をせずに食べ始める。普段は全員揃って挨拶をすることが多い為か、「いただきます」の言葉の意味を子ども達が理解できていないことに改めて気づいた。食べ終わった後は、自然と自分の食器は片付けたものの、みんなで使った調理器具や残ったおやつはそのまま掃除をせずに部屋に戻る子もいた。普段、5歳児は掃除を当番制にしており、食事の後は当番の子が後片付けをする事が多い為か、役割を決めていないこの日は、汚れていても気にしない子どもの姿が目立った。

#### <第二段階>

子どもの姿を把握した上で声掛けや環境の工夫で子どもの姿を見守った。

2歳児では、想い通りに行かない経験を何度か繰り返す中で、友達の表情を見て、言葉を発している様子も見られた。この時期の子ども達は、一日に平均2語半の新

しい言葉を獲得すると言われ、著しく語彙が増えていく時期である。保育者が発する言葉や友達の言葉を真似て、自分の想いを、持っている語彙で表現している。言葉で伝えることが出来ない子も混在する中で、代弁できる子もいた。そのため、この段階のおもいやりおやつでは、保育者が意図してグループ編成をし、できる限り友達同士の関わりにつなげ、全員がおやつを食べることを目標とした。

これらをねらいとする中で、“自分が話す、友達の話を聞く”というやり取りが増え、一方的な想いを貫く子が減った。その過程で、今回課題となったのは、日常の保育から子ども達の語彙を増やし、想いを表現する経験が必要であると感じた。

3歳児では、いつもと違う事が起きた時に、身動きが取れなくなる子がいた。自分で考え、誰かを頼るなど、困難を乗り越えていく環境を作っていくことは、簡単ではない。周りの友達が困っている子に対して、どのような思考を凝らして関わる事が出来るかを見守った。そのため、おやつの前に子ども達を集めて、「少し難しいこと困ったことがあっても頑張る事」「困っている友達がいたらどうする」という内容で話をした。話の内容が心に残っていたのか“友達”を意識した行動が随所に見られた。「ここに座ろう」「ここ空いてるよ」などの子ども同士の声掛け、また、困っている子に対しても手を引いて席に案内し、保育者に困っていることを知らせてくれることもあった。

4歳児でも同様の関わりが見られるが、この年齢では、相手の気持ちになって代弁する姿が見られた。自分の想いを言語化し、相手の気持ちを推測する様子に子ども同士だからこそ、善悪を決めつけずにトラブルも解決することが出来ると感じた。協同的な関わりを行う中で、「感じる力」「考える力」「表現する力」を養い、日常生活の中で様々な体験をすることが大切となる。保育者が子どもの様子を把握しながら、言葉掛けや環境設定をすることが大切だと感じた。

5歳児では、以前おもいやりおやつの時に席を見つめることが出来ずに、おやつが十分にもらえなかったHくんがいた。悲しい気持ちになって涙を流したことがあった。同じ状況で友達のおやつがなくて困っている場面があり、同じグループの子がおやつをすべて半分にして、皆が食べれるようにするが、その時のHくんは半分になったおやつを2つ握り、みんなよりたくさん食べる事を選択し、とても満足そうであった。



この現状が、子ども達の生き抜くための本能だとしたら、共に生きるために分け合うという心を育むためにはどのような保育が必要か考えさせられた。また、前回「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶をしない子が多くいた為、おやつができるまでにはたくさんの人が関わっていただくことができているということを伝える掲示を作って、子ども達に伝えた。少しずつ自然と挨拶をする様子も見られるが、日頃の人と交わす挨拶にも繋がっていきたい。



#### <第三段階>

- ・保育者同士の声の掛け合いを大切にし、子ども達の見本となる。
- ・日頃の保育の見直しをする。

2歳児では、日頃の保育の中で子ども達の語彙を促すことが出来る環境と保育を考えた。たくさんのお話を聞いている子ども達は、「言葉や文字」に興味を持つ子どももいた。また、友達の気持ちを考えることが出来るように、サークルタイム（お集まり）で自分の想いを伝え、相手の話を聞く時間を設けた。子ども一人ひとりの言葉の発達や心の状態を把握した上で、保育者は必要な関わりを意識して行った。



おもいやりおやつでは、まだまだ想いが伝わらないこともあるが、以前は、周囲の様子まで気に掛けることが出来なかった子ども、自分のことだけでなく、友達に関心を向ける姿も見られてきた。また、今まで保育者に尋ねることが多かったが、自分なりに考える姿も見られてきた。

3歳児では、言葉の習得が著しいこの時期は特に、保育者同士の話や声掛けも注意しなければならない。相手の心情を伺いながら、穏やかな声の掛け合いを意識することで、自然と子ども達の落ち着きも見られる。もちろん、子ども達に対しても、必要以上の声掛けや関わりは控え、求めてきたことにはしっかり対応し、応答することで少しずつ保育者の言葉かけも変化した。日頃の保育でもこの意識は、心掛けていく必要がある。また、どの学年でも共通して言えることだが、おもいやりおやつ

経験を重ねることで、子ども達の友達に対する関わりに変化が見られてきた。

4歳児では、友達同士の会話が増え、日頃の保育にも変化が見られる。以前までは、保育者に答えを求める事も多かったが、友達に相談する姿も増えてきた。同時にそれぞれの想いがぶつかり合う経験もある。これらの経験は園以外での生活ではあまり見られなくなっていることが現状である。アイディアを持ち寄り、工夫し、時には自分の気持ちに折り合いを付けながら協力する姿も見られるようになった。

5歳児は、特に想いの食い違いが目立ち、話し合うことが多く、時間も要した。気持ちを言葉にするには、まずは心が動かされる体験があり、その体験を汲み取ってくれる大人が必要となる。保育者が子どもの行動や表情から心情を読み取り、言葉に置き換える事で、言葉を獲得し、友達同士の会話に繋がっていく。それは、保育者同士の会話も同じ事が言える。保育者の声掛けの真似をして行動する姿もあり、改めて子ども達の指針になっていることに気づいた。

#### 4. 子ども同士の対話・行動の分析

おもいやりおやつを行った後に、子ども達の心がどのような事を感じたか、気づきや想いを共有できるように、対話の時間を設けた。特に、5歳児の子ども達が自分の想いを感じ、相手の心を感じる事ができるように配慮しながら話を進めた。

まず、子ども達のおもいやりおやつに対するイメージは、「好きなことをできる時間」として捉えていることが多かった。楽しかったと答える子とは反対に、複雑そうな表情の子も中にはいた。自ら話し出す子ども達は、自分で考え行動することができており、十分におやつを食べる事が出来ていた。一方、思考がゆっくりな子は、自分の想いを伝えることが出来ず、おやつを十分に食べる事ができない子もいた。同じ空間で同じ時間を過ごしても、自分とは違う気持ちの友達がいることに気づけていた子は、この時点では少なかった。そこで、保育者は子ども達に、自分以外の友達の気持ちに目を向けることが出来る声掛けをし、子どもの対話が膨らむようなきっかけづくりをした。すると「○○くん、おやつがなくて困っていた」「少ししか食べられなくて泣いている友達がいた」などの子ども達の見る視点に変化がでてきた。

自分の気づきを伝える時も、周囲の反応を気にすることなく、話続けてしまう子もいる。自分の頭の中で知っている言葉を組み合わせながら、表現することは簡単なことではないが、何度か経験すると子ども同士で話を振ったり、「どう思う?」と言った言葉のやり取りが見られてきた。

#### 5. 10の姿を踏まえた考察及び問題点

おもいやりおやつを実践する中で、子どもの姿をみて

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿のどの部分が育っているか、分析した。

#### ア 健康な心と体

保育者からの指示を待つのではなく、自分で考えることが出来るような環境を作ることで、子ども達はその時の現状から、見通しを持って行動したり、試行錯誤する姿が見られた。

#### イ 自立心

席が足りない、おやつがないなどの困り事に対して、自分で物事を解決するための知恵を出したり、友達を頼ることができない子がいた。一方で少しずつ自分で考えて行動する子や、困って動けない子に対して周りの友達が気づき、尋ねたり助けようとする姿が見られてきた。

#### ウ 協同性

グループ内でおやつを取りわけ方や掃除の仕方を話し合うことができる子もいた。周囲の子もみんな納得するまで話し合う姿が見られた。主導的に話を進める子、受け身で話を聞く子など様々で、時にはグループ分けを子どもの個性別に分けることも試みた。そうすると、いつもは受け身で話を聞く子で集めたグループでは、思いがけない子が主導的に振る舞う姿が見られた。

#### エ 道徳性・規範意識の芽生え

思いやりは、葛藤やつまずきといった体験を乗り越えることによって次第に芽生える。欲しいおやつを手にしたが、目の前の友達にはおやつがない現状に気づいた時に、自分の主張と他の意見の衝突から折り合いをつけるという体験をしている。自由の中にあるルールを守ることが、他者と関わる中で必要なことだと感じた。

#### オ 思考力の芽生え

友達と一緒に考える事で自分の意見がいつも正しいというわけではない事を知る。友達や保育者との対話を通して新しい考え方があるという事に気づき、友だちや保育者との対話を通して新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わっている。子ども達の気づきを見て、大切なのは結果ではなく、考えたり、試したり、討論するプロセスだということを感じた。その過程を大切にできる子どもの関わりは、保育者の関わりや配慮が重要となる。目の前にいる子にとって、乗り越えることが出来る困難なのか、子ども一人ひとりの特性を日頃から把握する必要があると感じた。

#### カ 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

マフィンの数、おやつのおおきさ、ご飯の量、ケーキの形、席が足りるか等、おもいやりおやつの中には自然と数や図形に触れることが出来た。自分で選ぶ中で形や

大きさの区別ができ、自然と算数に繋がる学びを深める姿も見られた。

#### キ 言葉による伝えあい

自分の思っている通りにはいかないこともある為、意思や感情を伝え、友達や保育者の応答する言葉を聞きながら、語彙を増やし、意思の疎通を図る為の会話へと発展していく。時には、保育者が言葉かけや、仲介をすることで言葉による伝え合いは、より豊かなものになっていくのである。子ども達の対話の時間では、一方的に自分の想いを言う子、言えない子、聞いていない子など様々な姿から、保育者がサポートする事で伝え合いを子ども同士で話を深める姿が見られてきた。

### 6. まとめ

子ども達にとっての小さな困り事を、意図して構成した環境から子ども達の新たな一面を見ることができ、日頃の保育の見直しにも繋がった。子どもの素直な発想を見守り、人を思いやる心や感謝する気持ちが生まれるような保育を行う為には、日々当たり前になっている部分が、子ども達を尊重した理念から外れていないか見直す必要があると感じた。子ども達に思いやりの心を持ってもらう為には、保育者が子どもの指標となっている事を忘れず、子どもへの声掛けだけでなく、保育者同士の言葉掛けも大切にしていきたい。また、今回の研究で様々な視点で子どもの心の育ちについて、意見を交わす中で、成長する子どもの姿を共有し、保育者が「次は何をしようか」とわくわくしながら実践する事が出来た。

そして、言語の発達を促す為の遊びや今回の小さな困り事であった、数が足りない、大きさが違うなどの、数や図形の学びを遊びの中で学ぶ事が出来る環境が必要であると感じた。子ども達の困難を乗り越える発想力と、視野を広く持ち、他者の気持ちを汲み取る想像力は、日々、身体や心で感じた事や経験が“おもいやり”といった形で現れてくると信じてこれからも子ども達の将来を見据えた保育を行っていきたい。

#### <参考文献>

- ・保育所保育指針ハンドブック2017年告示板 汐見稔幸
- ・保育の起源保育を巡る今日的論考 藤森平司
- ・さんすう、こくごのはじまり 藤森平司

講評：子どものこころの育ち～おもいやりを通じて見えてきたこと～

評者：天野 珠路

保育者が自身の疑問や関心に沿って研究グループを作っている園で、本研究はそのうちの「食と心」をテーマにしたグループのものです。「おもいやりおやつ」と称しておやつの場面における子ども同士の関わりや子どもの心情を記していますが、保育者が「困りごとを意図して作る」ことには賛同できませんでした。特に2歳児にとっては理不尽な思いが先にきてしまいます。「10の姿」と照らし合わせるのであれば、5歳児だけを対象にしてもよかったのではないのでしょうか。

評者：小林 芳文

子どもの「こころの育ち」について大変興味のある、かつ重みのある研究テーマのもとでの取り組みでした。人としてこれからの時代を生きていく上で必要な、人との協力、考える力、優しい気持ち等を「おもいやりおやつ」と称した方法に視点をおいたことで、大変、身近な実践研究として相応しいものと拝見しました。研究では、おもいやりおやつの実践では、三つのポイントを置いて実践したことで、事例分析がより解り易くなっています。育てて欲しい幼児の「10の姿」に結び付けたことで、この実践研究の位置づけが、更に明確になり良かったと思います。欲を言えばもう少し具体的な深い考察がそこに加わっていただきたいと思います。これからの保育実践を期待しています。

評者：高木 早智子

この研究で10の姿に照らし合わせて分析を行ったことで、保育者がこの研究結果についての理解が深められていることがとても良いと思います。乳幼児期の子どもの発達は1年間で大きく変化するため、各段階を行った時期の表記があると、さらに良いと思います。しかし、今回の設定は子どもにとって自分と相手の利害が絡み合う複雑な「困りごと」になっているため、純粹に思いやりの心の動きを観察するには適当ではなかったように思います。

## 運動能力を養う保育とは

福島県（研究会員）・ユーパロ室ノ木保育園 高萩久美子

### はじめに

子ども達は毎日の生活の中で、幼児期に必要な生活習慣を身につけ成長している。幼児期は、心身の発達の基礎ができる重要な時期であり、そのため幼児期における運動はより良い心身の発達を促すために不可欠なものである。子ども達の保育園生活の中で、活動のほとんどが遊びであり、遊びを通して様々な体の動きを経験していく。しかし、近年、問題視されている子どもの体力・運動能力の低下の問題。子どもを取り巻く環境の中、変化が見られるようになり、集団生活において体を動かす機会があっても家庭では子どもが外で遊ぶ機会が少なくなっており、公園や空き地など、運動できる場所も減少してきているように感じる。

また実際に子ども達と遊ぶ中で、体を思いきり動かして遊ぶとすぐに「疲れた」「もう無理」と体を動かすことをあきらめてしまう子が多く見られる。その中で私たち保育士が、どのような実践をすることで子ども達の運動能力を高めていくことができるか。今後取り入れたい運動や遊びについて調べてみることにした。

### 1、運動能力とは

運動能力とは、運動やスポーツはもとより、広く日常生活を営むためにも必要な身体の基本的な活動能力のことを言う。「体力」と混同して使用される言葉であるが、体力という場合は、筋力、持久力、柔軟性、敏しょう性など、それらを発揮する際のスキル（技術）をできるだけ排除した形でとらえた生体の機能を意味し、運動能力という場合は、走、跳、投といった体力に運動やスポーツに必要な基本的なスキルを加味した能力を意味する。

### 2、子どもの運動能力の低下

子どもを取り巻く環境のもと、社会環境の変化により、子ども達の運動遊びが減少している今、子どもの体力の発達にさまざまな問題が生じている。

スポーツ庁の「体力・運動能力調査」によると、小中学生の「走る」「跳ぶ」「投げる」といった基礎的な運動能力は、1985年前後をピークに低下傾向で、柔軟性や敏しょう性など、体をコントロールする能力も低下している。

こうした基礎的な運動能力の低下は幼児期から目立っており、日本学術会議の健康・生活科学委員会が2017年にまとめた「提言 こどもの動きの健全な育成をめざし

て」には、幼児の運動能力も低下していることを示す研究が紹介されている。この研究は、日常生活や運動遊びに現れる「走る」「跳ぶ」「投げる」「捕る」「つく」「転がる」「平均台を移動する」という7種類について観察的に動きの質を評価する方法を用いて調査したもので、2007年の年長児は、運動能力が高いレベルにあった1985年の年少児とほぼ同様の水準であることが分かった。

### 3、運動能力の低下の原因

なぜこんなにも、運動能力が低下してきているのか。現代の社会環境の変化により、子どものライフスタイルも変わってきているように思われる。子どもは遊びに夢中になり、動き回る中で様々な動きを習得していくが、現在では、子どもの生活から「遊ぶ時間」「遊ぶ空間」「遊び仲間」という「3つの間」がなくなったと言われている。体を使って遊ぶ時間が著しく減少し、以前は、年齢が異なる子ども達が集まって屋外で元気に遊んでいたが、都市化により子どもが自由に遊べる空き地や生活道路が減ったことから、遊びの内容や形が変わってしまった。少子化により、遊ぶ仲間が減ったこと、テレビゲームなどの室内遊びの時間が増えたことも要因となり、子ども達が思いきり体を動かして遊ぶ機会はどんどん減っており、就学前の幼児の段階から動作発達や運動能力の低下につながったと考えられる。

### 4、幼児期の運動遊びの重要性

幼児期は体の発達だけでなく、友だちと一緒に遊ぶ、ルールを守る、仲良く遊ぶためにはどうすれば良いのかを考えるなど、社会性を養うためにも、子ども同士で元気に遊ぶ運動遊びが重要になってくる。

運動遊びは体を動かせば良いというわけではなく、自分がやりたいかどうかが大変である。子どもは自発的に楽しく体を動かすことで、体の使い方を覚えていく。体を動かして遊び、それが楽しかったという経験が重なると「体を動かすことは楽しい」という記憶が作られていくため将来の運動習慣の形成にもつながっていくのである。

また、幼児期から児童期においては、脳、神経系が急激に発達する。そのため、この時期は見る、聞く、触れて感じるなど、様々な感覚を働かせたり、手や足をはじめとする、多くの運動期間を動かしたりしながら体のバランスをとって運動すること、いろいろな方向に移動す

ること、用具などの動きにタイミングよく反応すること、力の入れ具合を調整することなど、基本的な動きを習得することに適している。この神経系の発育が著しい時期に子ども達にとって望ましい環境を準備する必要があると思われる。

すなわち、子どもの発育発達にとって運動遊びは、単に脳を刺激するばかりでなく、感情をコントロールする部分までも活性化することが近年の脳科学や幼児教育の研究の中で明らかにされている。

つまり、幼児期からたっぷりと、しかも楽しく運動遊びを行うことは「生きる力」を支える「健やかな体」「豊かな心」を育てていく上での基盤となるものであると言える。

## 5、遊びと運動能力の関係性

最近では、体育指導に力を入れる園や体操やスポーツを習わせる家庭が増えている。運動神経は小さい頃から大切だということもあり、体育系の習い事をやらせた方が良いのではと思いがちではあるが、最新の研究では、体育の指導をすればするほど、運動能力の点数は低くなってしまふということが明らかになった。東京学芸大学の杉原隆名誉教授の研究チームでは、25メートル走や立ち幅跳びなど6つの種目について全国65ヶ所の幼稚園児の運動能力を調べ、マット運動や体操などの体育指導を受けている子どもと、受けていない子どもの比較を行った。すると30点満点中、指導を受けている子どもは18点台だったのに対し、受けていない子どもは19点台という結果が出た。つまり、体育指導を受けている子どものほうが運動能力の点数が低かった。その理由としてあげられるのが「子どもが経験する動きの種類」にあるという。体育指導では前転や跳び箱など、同じ運動を繰り返すことが多くなる。その中で説明を聞いたり、順番を待ったりする時間が長くなり、運動する時間が短くなってしまふ。また、好きではない運動をやらされると意欲がわかず、運動自体が嫌いになってしまうこともあるという。

人間の基本的な動きは36種類に分類できると言われており、幼児期にできるだけたくさん経験し、バランスよく身につけることが望ましいと言われている。杉原教授によると、こうした色々な動きを経験するために良い方法が「遊び」だと言う。遊びを通して、たくさんの種類の運動を経験することが運動能力の向上につながるとしている。

## 6、運動能力を養う保育とは

子ども達に必要な運動能力を養うためには、どのようにすれば良いのか。何もない場所で自由にさせても、自分から活発に体を動かさない子もいる。色々な動きをしたくなったり、自分たちで工夫して楽しんで体を動かせるような環境づくりを私たち保育士が提供していかなければならない。

現在、私は4・5歳児の担任をしている。年々子ども達の体力、運動能力が低下しているのを様々な場面で実感している。そのため、できるだけ普段の生活の中で積極的に体を動かす保育を行っている。毎日欠かさず行うのが「雑巾がけ」である。雑巾がけは全身運動に最も効果的だということを耳にしてから取り入れ、掃除の時だけではなく、それを活動につなげ「雑巾リレー」というものを行った。チーム対抗で行い、子ども達は夢中になり、負けたくないという気持ちで、1人ひとりが一生懸命取り組む姿が見られ、楽しい雰囲気でも活動することができた。また、できるだけ遊具を使った遊びも行っている。できるだけ屋外で遊ぶようにしているが、屋内で遊ぶときは、屋内遊戯場を使用し活動を行っている。トランポリンやボルダリングといったものはとても有効的で、子ども達も喜んで遊んでいる。その一方で、毎年園で行う体力測定では、走ることは得意としても、跳ぶ、投げるといった能力が例年低い傾向が見られる。そこで様々な運動能力を養うには、どのような遊びが効果的か調べてみることにした。

### (1) タオルを使ったいろいろな遊び

・<遊び方> ひとりで…タオルをボールに見立てて投げ上げキャッチ

ふたりで…キャッチボール

<得られる能力> 握力、投力、捕る力、空間認知、体のコントロール

・<遊び方> ひとりで…タオルをロープに見立てて体ほぐし（背中でタオルを使って手をつなぐ）

なわとび（長めのタオルを用いる）

ふたりで…つなひき

<得られる能力> 柔軟性、筋力(引く力、ふんばる力)

### (2) 新聞紙を使ったいろいろな遊び

#### ① 落とさないように走ってみよう

<遊び方> 新聞紙を広げておなかにあて、一定以上のスピードで走ることによって、新聞紙を落とさず走る。

<得られる能力> 走力、持久力

#### ② しっぽにして走ってみよう

<遊び方> 新聞紙をちぎり、一方の端をズボンにはさみ、しっぽがとられないように走りながら、他のしっぽを取る。

<得られる能力> 走力、持久力、判断力

#### ③ ボールをつくろう(的あて、玉入れ、キャッチボール)

<遊び方> ちぎった新聞紙を丸めてボールを作る。

カゴにめがけて投げる。  
的に向かって丸めたボールを当てる。  
自分の真上にボールを上げてキャッチ  
する。

<得られる能力> 投力、握力、空間認知能力

④新聞紙をジャンプで越えよう

<遊び方> 新聞紙を広げてジャンプ（年齢に合  
わせてジャンプする距離を変える）

<得られる能力> 跳躍力

⑤新聞合戦

<遊び方> 新聞紙を丸めたボールをたくさん作り、  
2チームに分かれ、自分の陣地から、  
相手チームの陣地へ投げ続ける。

<得られる能力> 投力、友だちとの関わり合い

(3) 体を使ったいろいろな遊び

①じゃんけんトンネル

<遊び方> 2人組になり、じゃんけんをし、勝っ  
た方が足を開き、負けた方が勝った方  
のトンネルをくぐる。

<得られる能力> リズム感、敏しょう性

②鬼ごっこ…様々な種類の鬼ごっこがある

（氷おに、いろおに、手つなぎおに）

<得られる能力> 走力、持久力、敏しょう性

これらのような遊びは、遊具を使うだけでなく、身近  
にあるものを使用し遊びに取り入れることもでき、その  
中で様々な運動能力を養うことができることが分かった。

おわりに

幼児期運動指針では、幼児期の運動量目標として「毎  
日60分以上」と掲げている。60分とは合計の時間であり、  
5分でも10分でも子どもが自発的に体を動かせる環境を  
作り、積み重ねていくことが大切であるため、私たち保  
育士が、子どもが活動する時間を増やしていく保育をす  
ることがとても重要になってくるのではないかと思う。  
生活環境の変化で、子ども達の生活リズムの乱れること  
が増え、自分の身体をコントロールする能力も低下して  
いると指摘される。そのため神経系の発達が著しい幼児  
期に影響が生じるため、落ち着きがなかったり、立って  
いられない子が多く目立つようになってきたのも運動不  
足や体力の低下との関連も指摘されている。運動能力と  
は、運動をするだけではなく、様々な機能の発達、そし  
て人とのコミュニケーション、認知能力等、社会性も養  
われていくのに必要な役割を持っていることに気づいた。  
この大切な幼児期に自ら十分に体を動かす楽しさを遊び  
を通して経験することができるように環境をつくり、提  
供していかなければならない。

参考文献

- ・「多様な動きを作る運動（遊び）」パンフレット 文部科学  
省
- ・「動ける体づくりにつながる、すぐ使える運動遊び31選」  
体育研究所 平成20年3月
- ・「幼児の運動能力調査を行う保育の現場の実態」 引中陽子、  
重村美帆
- ・一般財団法人田中研究所「Recrew レクルー 5月号」  
公益財団法人 日本レクリエーション協会
- ・幼児期運動指針

## 講評：運動能力を養う保育とは

評者：石川 昭義

幼児期の運動能力や運動遊びの重要性についての概論が述べられた後に、当園における身近な物を使っての遊びの実践や運動能力を伸ばす工夫が紹介されています。ここに示されている、タオルや新聞紙を使った遊びが、実際に何歳児で行われているのか、子どもはどのように楽しんでいるのか、保育者はそれらの遊びにどのように関わっていたのかなど、具体的な実践についての説明と考察が必要です。また、本文中には、「毎年園で行う体力測定では、走ることは得意としても、跳ぶ、投げるといった能力が例年低い傾向が見られる。」の記述があるので、体力測定の数値（年次推移など）が示されると良かったです。前半の概論のウエイトが大きくなりすぎて、当園の取組の目的、内容、結果の記述が少なくなりましたので、報告書の構成を工夫されることを期待します。

評者：馬場 耕一郎

家庭では、子ども達が外で遊ぶ機械が少なくなり、運動できる場所が減少傾向にある中、保育園での運動は、良い心身の発達を促すために不可欠なものです。雑巾がけという生活を通して、子どもたちの運動能力を高めていく取り組みは大変興味深いものでした。隙間の時間を活用し、子ども達が自発的に身体を動かせることの重要性を感じられたことは、今後、子どもたちの運動能力の向上が期待されます。継続した取り組みを期待しています。

評者：日吉 輝幸

平成24年に文部科学省から出された「幼児期運動指針」に記載されているとおり、現代の子どもの運動量の低下は、子どもの心身の成長・発達について様々な問題の要因になっていると考えられています。報告園ではこの問題に着目し、様々な運動遊びに取り組んでいます。しかしながら「研究レポート」としては、実践から得られた考察が不足しており残念でした。問題意識に伴う実践の工夫が興味深いだけに、今後の更なる取り組みと効果・考察の続報を期待したいです。

## 発達トレーニングを保育に導入すること

福島県（研究会員）・ユーパロつつみ分園 伊丹 陽

### 1、はじめに

保育園に入職してから、発達障害についての研修や、研修報告を受ける機会が多くなった。知識としては、理解していたつもりであるが、定義と臨床が結びついていない状態であった。勤務する中で、「気になる子」が少なからず存在しており、その中で保育者が集団生活に馴染んでいけるよう努力している姿を目にする。今まで受けた研修の中では、早めに医療機関につなげることや、就学に向けてどのような配慮をするかという内容のものが多く、診断名がつくことが大切、というような印象を受けていた。しかし、発達障害を抱えながらも、社会で成功している人物はたくさんいる。例えば、黒柳徹子氏だ。今ほど発達障害という概念がなく、個性が強い子として過ごしてきた。集団生活に馴染めないことで小学校を退学になったほどだ。しかし、母親や恩師に個性を理解してもらい、守られてきたことで、黒柳徹子氏は著名人となる礎を築いた。その他にも、たくさん著名人がいる。私は、関わり方で人生を左右するのであれば、必ずしも診断名は必要ないのではないかと考えるようになった。もちろん、症状そのものが日常生活に支障をきたし、服薬の必要があるなどのケースについては診断が大切なのだと思う。しかし、日常生活はなんとか送ることができるが、「気になる子」に関しては、早期のトレーニングや周囲の理解で緩和されるケースがあるのではないかと考えた。今回「子どものための発達トレーニング」という本を手に取り、私の考えは強くなった。著書の中で「発達トレーニングを行う場合に大事なのは、診断名ではなく、子ども一人ひとりが抱えている特性や課題です。」と述べている。著書には、家庭でも取り組むことのできるトレーニングが紹介されている。このトレーニングを保育現場で活かすことができないうか検討したため、ここに報告する。

### 2、特性の分類

#### 1) 注意力

不注意や気が散りやすいといった問題は、特性の中でもとても頻度が高い。

注意には、四つの機能的要素があるとされている。

##### ①注意の持続

注意の持続が困難であると、すぐ他のことに注意がそれてしまうため、人の話を長く聞いていられず、

勉強にも集中が続き、効率が低下する。注意の持続が低下した状態は、大きく分けて二つの原因で起きる。一つは前頭葉の働きが鈍りぼんやりした状態になる。睡眠不足・疲労・注意欠如/多動性・うつが要因となる。

もう一つは、頭が働き過ぎることによって起こる操状態・注意欠如/多動性が要因である。

##### ②選択的注意

選択的注意は、関係しているものだけを検索する能力である。この、選択的注意の弱い人は、雑音のある環境では肝心なことに集中しにくく、強い疲労を感じてしまう。また、探し物が苦手であることが多い。自閉スペクトラム症・精神的な悩みを抱えるなど神経過敏の状態が要因となる。

##### ③注意の転換

注意の転換は、注意の対象を切り替える働きである。注意の転換の弱い人は目の前の刺激や反応パターンにとらわれてしまい、他に切り替えることが難しい。視野が狭くなりやすく、過集中してしまうため、他のことに気づかない。

自閉スペクトラム症・うつ・不安が強く否定的な考えへの固執が要因となる。

##### ④注意の分配

注意の分配は、同時に複数のことに注意を分配しながら、課題を行う働きである。

注意の分配が苦手な人は、一つの作業をするときに比べて同時に二つの作業をすると、激しく能率が低下する。

### 2) ワーキングメモリー

数秒から数十秒の短い時間、聞いたこと見たことを一時的に記憶しておくメモ的な記憶のことである。ワーキングメモリーが弱いことが、学習障害の重要な要因となる。

### 3) 言葉やスピーチ

言語の発達の遅れ、発音の不明瞭さ、緊張のため人前で話すことが苦手であるなどが挙げられる。言葉の発達は社会性の発達や愛着形成を土台として進んでいく。

#### 4) 視覚・空間認知

視覚・空間認知の能力は、動作性知能とも呼ばれ、目から入ってきた情報を記憶したり、そこから意味を読み取ったり、推理したりなど、目からの情報と手足の運動を連動させながら行動を行ったりする機能を指す。

視覚・空間認知能力が弱いと、以下のような行動がみられる。

- ・運動が苦手
- ・手先が不器用
- ・体のバランスが悪い
- ・動きがぎこちない
- ・図形や立体が分かりにくい
- ・状況を瞬時に判断し、臨機応変に対応することができない
- ・作業がてきぱきとこなせない

#### 5) 基本的な社会的能力

社会性の発達には、段階がある。

##### ①注意・関心の共有

注意を共有できるようになる第一歩は相手と視線を合わせたり、相手の見ているものを目で追い、一緒にみることである。

元来、母親との一対一での関係で身につけていくものである。

##### ②模倣と情緒的チューニング

相手の行動をまねたり、相手の気持ちを一緒に感じるようになることである。

自閉スペクトラム症やその傾向をもった子どもは、情緒的チューニングが生まれつき苦手である。

#### 6) プランニングと統合能力

手順をあらかじめ考えたり、作戦を立てたりすることがプランニングの能力である。

プランニングの能力と関係が深いのが統合能力で、さまざまな質の異なる材料を、構成し組み立てる能力である。大きくなってから、伸ばすのは難しく、小さいころから育てていくことが大事といわれている。

#### 7) 行動と情緒のコントロール

落ち着きがなく動き回るとか、衝動的に行動してしまうといった行動のコントロールの問題は、低年齢の児童にはとても多い。こうした行動の問題は、行動にブレーキをかける機能と関係が深く、行動のブレーキだけでなく、感情のブレーキも同じ脳の領域が関係しているため、行動のブレーキが弱いと、感情や気分のブレーキも弱い傾向にある。

### 3、保育への導入の検討

著書「子どものための発達トレーニング」では、さま

ざまな特性へのトレーニング方法が紹介されている。保育で実践できそうなものも多くあった。もちろん、保育の中で既に行われていることも多いが、日々の保育がいかに大切であるかを感じることができた。昨年度の園内研修の中で、講師が「保育士を模倣して体操するなどいい経験となる。是非保育園に通うように勧めている。」と言っていた理由が分かった気がした。そこで、個別に行う発達トレーニングが、日々の保育に導入できないかと考えた。そもそも集団で行動することが苦手な特性を持っている子どもは個別トレーニングが望ましいが、特性が顕著となる前の小さいうちからトレーニングを重ねていくことによって、特性を緩和できるのではないかと考えた。著者は「子どもたちは、一旦トレーニングの楽しさに目覚めると、自分から進んで取り組むようになります。」と述べている。例えば、私は運動が苦手であり、自ら率先して行うことはほとんどない。しかし、園内研修で運動に取り組んだり、わが子と休日を過ごしている時など、初めは億劫に感じていても、集団の中で遊びとして行ううちに楽しさを感じ、自然と運動を楽しめるようになる。このように、保育園で保育者が楽しそうに行っていることに興味を抱き、他の子どもが笑っていて楽しそうだから自分もやってみようと思うのではないか。また、「気になる子」もそうでない子どもにも発達トレーニングを行うことによって、発達を促す効果が得られるのではないかと考えた。

### 4、保育実践と結果

#### 1) 視覚・空間認知のトレーニング

##### (1) ハイハイでGO

ハイハイする子どもが減ってきたと言われている。ハイハイする動作は、手足の協応を鍛えたり、体や頭を支える筋力をアップする上でも重要だが、発達を促す以上の効果があると考える専門家もいる。

手足を交互に動かして四つん這い歩行することで、運動機能だけでなく、社会性や知能の発達にも良い影響があると考えられている。

ハイハイで追いかけてっこをしたり、障害物をよけたり、宝探しをしたりなど応用は多彩である。トンネルを配置したり、ハイハイしたくなるような保育環境を整えてあげることも大切である。

##### <結果>

歩行できるようになった子どもは、普段は生活の中でハイハイを行うことはほとんどない。

0歳児のクラスには、トンネルを置いているが、ハイハイではなく、くぐるように歩行している。そこで、保育者自身がハイハイを行い、子どもに促すとたちまち子どもは笑顔になり、声を上げて追いかけてっこを始める。膝ではなく、足首を使ってハイハイをしていた子どもや、四肢の協応がうまく取れていない子どもも、回数を重ねるにつれ、しっかり膝を

ついたハイハイをするようになり、協応も取れるようになってきた。

何より、子どもたちが笑いあって楽しそうにハイハイしている様子がとてもほほえましい。引き続き、遊びを発展させていきたい。

## (2) トランポリン

トランポリンは、子どもたちが楽しみながら、前庭機能（平衡感覚）や体性感覚などを鍛え、感覚統合に役立つ道具である。

### <結果>

子どもの中に、階段を降りたり、ブランコを行った後に、バランスを崩してぎこちない歩行をする子どもがいる。私は、その子どもの平衡感覚が弱いと感じていた。トランポリンを行ってみると、他の子どもたちは膝を曲げ伸ばししてジャンプしようとするのに対して、その子どもは最後まで膝の曲げ伸ばしをしようとしなかった。楽しんで何度も行おうとする様子がみられるため、膝の曲げ伸ばしを伝えながらトランポリンを使った遊びを続けていきたい。

## 2) 言葉のトレーニング

言葉の発達には社会性の発達や、さらにその前提となる愛着形成を土台として進んでいく。核家族が増えてきた今、子どもを出産するまで乳児とのかかわりをほとんど持つことがない人が親となっているため、かつてから行われてきた乳児への関わりが伝承されることが少なくなってきたように思う。

### (1) インテリアル・アプローチ

0歳児の保育に携わる保育者として、言葉の発達を促す関わりは重要であると言える。

これまで関わってきた子どもの中にも、言葉の発達が緩やかであると感じることが少なくない。日々の保育で何気なく行っていることではあるが、クラスの保育者が共通した関わりを持つことで、園児の言葉の発達を促すことが可能であると考えた。

そこで、インテリアル・アプローチを保育室に明記し掲示することで、保育者全員が意識できるようにした。

#### ①ミラニング（非言語的応答）

子どもの動作や表情を、そのまままね、鏡のように映し出すこと。

#### ②モニタリング（音声的応答）

子どもの発する声や片言をそのまままねること。

#### ③パラレルトーク

一人二役で、子どもが感じることを、思うことを代わって言うこと。

#### ④セルフトーク

親（保育者）が、自分の視点で話すこと。

#### ⑤リフレクティングとエクспанション

子どもの発した言葉を、より正確な言い回しにして返すこと。

さらに子ども言葉に少し付け足して膨らませること。

#### ⑥モデリング

子どもの関心からそれないようにしつつ、新しい表現や会話の見本を見せること。

### <結果>

日々子どもたちの言語は発達している。取り組んだばかりであり、トレーニングとしての明らかな効果は得られていないが、今後も意識して関わってきたい。

## 3) 基本的な社会的能力のトレーニング

### (1) 表情まねっこ

気持ちを共有するためには、情緒的なチューニングを行う必要がある。

情緒的チューニングとは、相手の常道に波長を合わせることである。

気持ちを合わせるためには、声の調子や体の動き、表情も合わせる必要がある。

情緒的チューニングとも関係が深く、社会的スキルを獲得するうえで欠かせない働きが模倣である。

そこで、絵本「かおかおどんなかお」の読み聞かせや、表情の変化を楽しむペープサートを使用して表情の模倣をする遊びの提供をした。

### <結果>

0歳児の子どもたちに行うと、興味深そうに絵本やペープサートに見入っていた。子どもの中には、負の表情変化に泣き出す子どもがいたり、表情の変化に笑い出す子どもがいたり、反応の違いが非常に興味深い結果となった。まだ、真剣に見入っている状況であるが、絵本「かおかおどんなかお」の読み聞かせの際、保育者が目や鼻を指さすと模倣するようになってきた。今後、表情の変化も模倣することができるようになるのが楽しみである。

また、合同保育の時に、2歳児クラスの子どもの表情遊びを行った場面があった。2歳児クラスには、場面の变化ややりたくないときに激しく泣き出す情緒のコントロールが苦手と思われる子どもがいる。一度目を実施した際、保育者が泣きまねをしていると、始めは普段と違った遊びを面白いと感じたのか保育者に近づいてはきたが、すぐに興味がそれてしまった。2度目に、他の子どもたちとともに、「おこった顔をしてみよう。3・2・1」と表情を作る遊びを行った。始めは、表情が作ることができず、戸惑った表情をしていた。しかし、他の子どもが表情を変えている様子を見ると、その真似をして表情を作ることができるようになった。保育者から、

「正解」と言われると、満面の笑顔で遊びを楽しんでいた。表情遊びは、情緒的なチューニングを養う上で、非常に有効な遊びであると実感することができた。また、今後、保育場面の中で「Aちゃん泣いてるね。」などの声掛けにより、意識して表情と感情をつなげていくようにしていきたい。

## 5、おわりに

今回、発達トレーニングを保育に導入することを検討してみて、効果の有効性までは実証することはできないが、子どもの発育に良い影響を与える可能性はあると考えられる。そして、子どもたちが遊びの一つとして楽しむことができていたことが一番重要であると考え。著者は「何よりも大事なのは、トレーニングを楽しめるということです。」と述べている。また、「トレーナー役となった人がまずやるべきことは、子ども本人の関心に寄り添うことです。」とも述べている。発達トレーニングを、

トレーニングだと意識せず、保育の中の遊びとして子どもも保育者も楽しむことができたなら、発達への良いアプローチになるのではないかと考える。さらに、幼いうちから、このようなトレーニングを取り入れ、また年齢とともに応用させていくことで子どもの発達を促すことができるのではないだろうか。また、保育者が寄り添うことで、子どもたちが自信を持って、また新しい社会へ進んでいける手伝いをしていけたらと考える。著書の中には、年齢に応じたトレーニングが紹介されている。今後、保育の中で実践していきたい。

### <参考・引用文献>

「子どものための発達トレーニング」岡田尊司、PHP新書  
「子どもが自立できる教育」岡田尊司、小学館文庫  
「窓ぎわのトットちゃん」黒柳徹子、講談社文庫  
「小さいときから考えてきたこと」黒柳徹子、新潮社

## 講評：発達トレーニングを保育に導入すること

評者：天野 珠路

園の看護師が子どもの発達に着目し、「子どものための発達トレーニング」(岡田尊重司著)の本を参照に、子ども一人一人が抱えている課題を捉えようと努めています。しかし、保育はトレーナーによるトレーニングではなく、遊びを通して、環境を通して、友達や保育士と一緒に遊んだり試行錯誤したりしながら生活する営みそのものです。子どもの発達はこうした遊びや生活を楽しみ、周囲の環境と関わる中で結果として促されていくものです。看護師と保育士の連携や共同研究が望まれます。

評者：小林 芳文

早い時期から、発達障害のある子への「保育が大切」なことが、ようやく叫ばれて来ました。この研究ではその点から迫っていることに注目しました。しかし、障害のある子に「発達トレーニング」という方法、職種(看護)が関係しているのか、医療機関でない保育園で実践されることに果たしてどの程度意味があるのだろうか、「トレーニング、訓練」ということの重さ、訓練は一方的な取り組みが一般で、時に子どもの尊厳を傷つけることもあります。発達障害を持つ子どもの「遊び保育での支援」について触れていただけたらと思いつつこの研究を拝見しました。参考にしている著者の本の紹介に終わっていること、他の保育実践では、「訓練でなく、支援」というアプローチがあります。今後の検討を期待します。

評者：田和 由里子

今回の研究で「子どものための発達トレーニング」の書籍を参考に「気になる子」に対して、いかに保育に取り入れることができないかを検討されたことは素晴らしいと思われます。発達の特性の分類やトレーニングの方法も詳しく調査をされておりました。実践をされているようですが、写真など合わせて掲載されているとより伝わりやすかったと思われます。「トレーニング」となると身構えてしまいがちですが、今回研究されたことを各年令に応じて日々の保育に取り入れて頂きその成果をまたこのような研究発表で報告して頂きたいと思われます。

## 園での安定した生活向上を目指して ～3つの取り組みを通して、見通しをもてる子を育成する～

岐阜県・川辺町第3こども園 鈴木 智美

### 概 要

4月から子どもたちの様子を見てみると、とても落ち着きがなく、人の話を聞くということがとても難しいクラスなのではないか。そのため、短い言葉で丁寧に指示を出していくものの、複数の指示で動くことが苦手な子が多く、「記憶すること」「言葉や文字からイメージすること」「相手の気持ちを考えること」などの乏しさがあるのではないかと感じた。また、それらのことがあり、見通しをもてず落ち着きがなくなるのではないかと考えた。そこで上記のテーマを設定し、3つの研究目標を立て保育に取り組み実践していった。

実践を通し、1～2個の指示でも不安げに動いていた子どもたちが、3つの指示を考えながら動くことができるようになってきた。さらに、語彙力もついてきたことで、友だちとの会話が増え、集団遊びのルールも理解でき、生活が楽しめるようになってきたことをまとめたものである。

### 1 主題設定の理由

共働きの家庭が増え、家族のあり方が大きく変わってきている。また、地域における地縁的な繋がりが希薄化することで、家族や他人との関わりの中で自然に育まれてきた子どもたちの社会性や模範意識が不足がちになってきている。

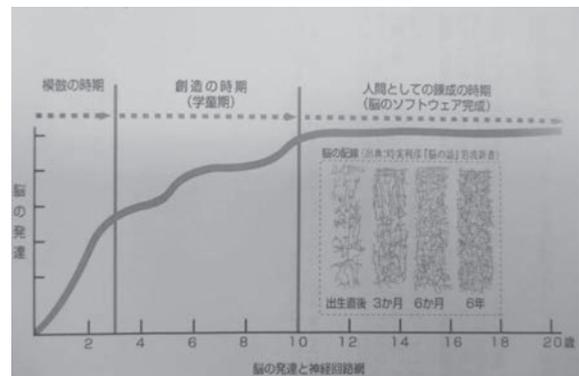
こども園においては、普段子どもたちと接していると、集団遊びを通して沢山の友だちと関わろうとする子もいるが、その反面、自分の思いが言葉で伝えられず泣いてしまう子、複数のルールが理解できず戸惑う子等が見られる。

幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本の中では、「乳幼児期における発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、園児の生活経験がそれぞれ異なることを考慮して、園児一人一人の特性や発達の経過に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。」と記されている。

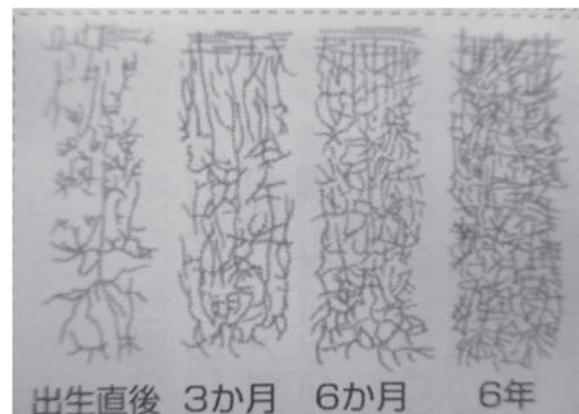
子どもたちは、集団生活をするうえで多くのルールを覚え、実践していかなくてはならない。幼児は、基本的に大人の言動を手本とし、「善いこと」と「悪いこと」を学んでいく。そのため大人は、はっきりとした言動で分かりやすく子どもたちに示していく必要があるが、大人が一方向的に教え込む関係になってしまうと他律的傾向(指示待ち)になってしまう。

年長児は21名(男児8名・女児13名)いるが、日々生活していく中で指示待ちの子が多いことに気が付いた。毎日繰り返し行う「トイレ・手洗い・うがい・水分補給」でさえも、順序が分からなくなったり、「今日これやるの?」と不安になったりと、「正答」がないと行動が止まってしまう子もいる。また、他人事が気になってし

まうと、自分が今何をしたらいいのかを忘れてしまう子もいる。そのため、脳の発達や成長が著しい年齢であることから、3つの取り組み(①記憶力テスト②ホワイトボードの活用③読み聞かせ)をすることで、見通しを持って行動できる子が育つのではないかと考えている。そして、記憶力テストを、一年を通して行うことで、短期記憶が長期記憶にも繋がっていくのではと思っている。



(脳の発達のグラフ)



(神経回路網)

### (1) クラスの実態

今年の年長児は、昨年度のクラスがそのまま持ち上がっている。担任が変わったことで初めはおとなしかったものの、徐々に環境の変化にも慣れ、自己主張をするようになってきたことで次のような実態が見られた。

- 自分の思いを一方向的に話し、相手の話を最後まで聞こうとしない。
- 自分の思い通りにいかない事があると、言葉よりも先に手や足が出てしまう。
- 指示待ちが多く、大人が言葉を発するまで動けない。毎日繰り返して行っていることも、自信が持てないことで、自分で見通しをもって動くという力が付いていない。
- 2～3つの指示を覚えることが難しく、1つ動いては周りを見て真似をすることが多い。
- 目を見て話を聞くことができない。
- 感じたこと、思ったこと、気づいたことを、自分の言葉にして相手に伝えることができない。

以上の姿が見えてきた。

上記の実態から以下の弱さがあると考える。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>• 語彙が少ない。</li><li>• 2～3以上の指示が記憶できない。</li><li>• 集中力に欠ける。</li></ul> |
|---|

### (2) 願う子どもの姿

発達には個人差はあるが、そのことを踏まえ、出来なければいけないとは考えず、興味や刺激を与えていくような保育に取り組み、以下の3点を願う姿とする。

- 自分の思っていることが、自由に言い表せる。
- 相手の目を見て話すこと、聞くことができ、落ち着いて行動できる。
- 絵本や紙芝居に興味を持ち、集中して見ることができる。  
このような目標(目安)を持ち、【園での安定した生活向上を目指して】に取り組むことにする。

## 2 研究の目標

- ①記憶力テストを経験し、集中力や記憶力の向上に繋がるような、援助のあり方を研究する。
- ②ホワイトボードを活用し、視覚的支援を行うことで、見通しが持てるような支援の方法を研究する。
- ③読み聞かせを通して、相手の話を聞くことへの意識の向上に繋がるような、援助のあり方を研究する。

## 3 研究仮説

- ①記憶力テストを継続して行うことで、人の話を理解し、静かに話を聞くことが出来るのではないかと。
- ②視覚的支援を行うことで、複数の指示が記憶出来るようになり、判断力と意欲の向上に繋がるのではないかと。
- ③読み聞かせをすることで語彙力が育ち、自分や相手の気持ちをより正しく理解し出来るようになるのではないかと。



第3こども園の理念である「立腰」

立腰をして「動」から「静」へ



記憶力テストの様子

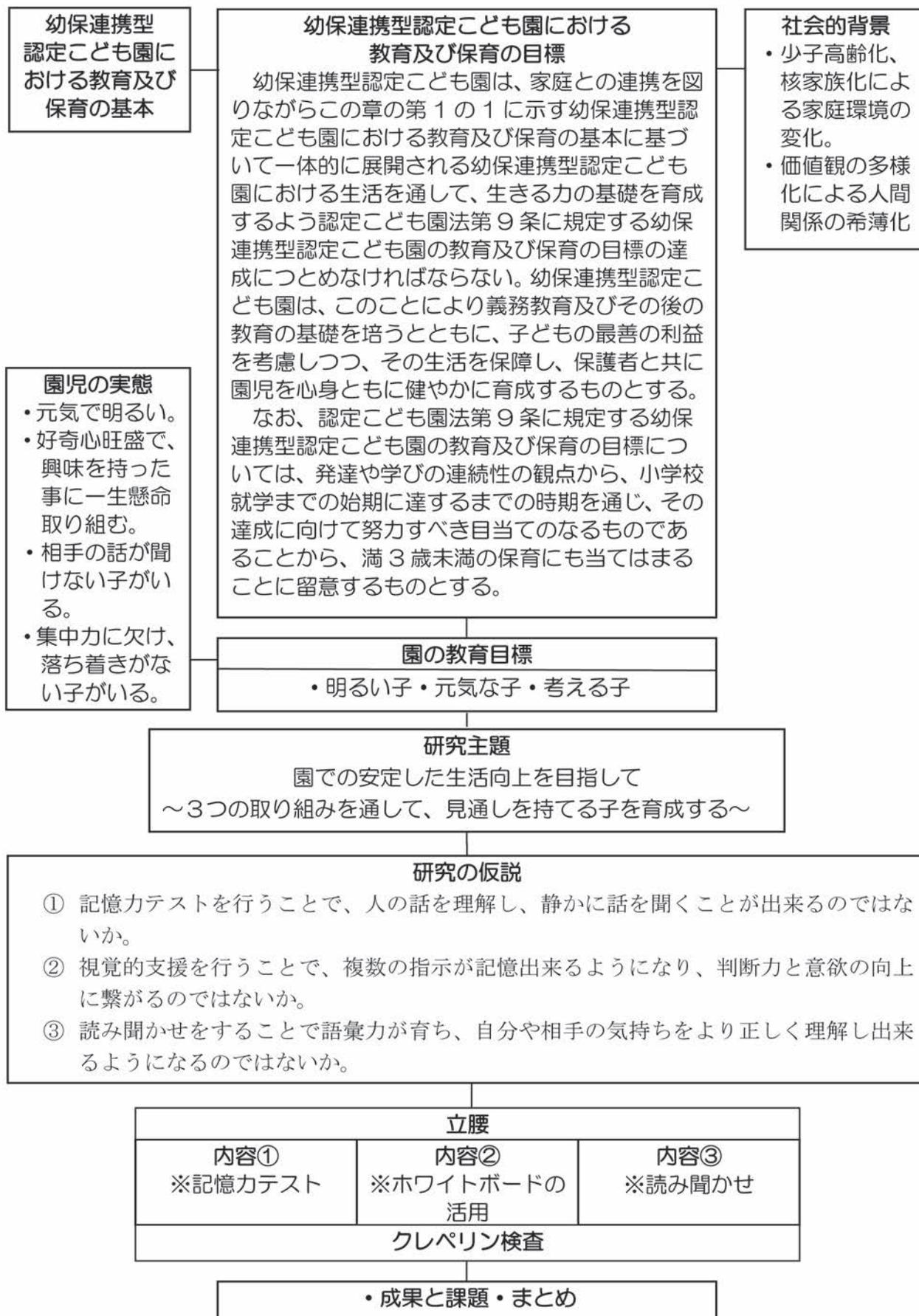


読み聞かせの姿



一日の様子

4 研究の構想図



## 5 立腰とは（「子育ての秘伝」より）

一日の活動の節目、節目にちゃんと（立腰姿勢）を行うことで、性根（意志力・集中力・持続力・実践力）を涵養し、自分の基盤づくりとなります。

動から静へ、静から動へ瞬時に切り替えることができる人間になります。

### 立腰の功德十カ条

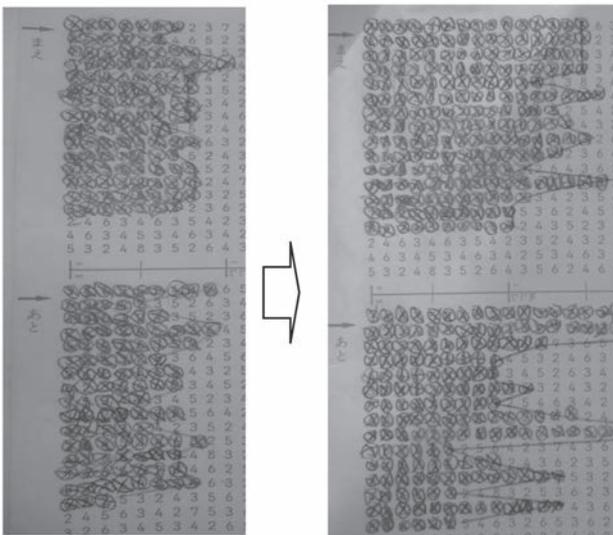
- ① やる気がおこる
- ② 集中力がでる
- ③ 持続力が出る
- ④ 話を最後まで聞くことができる
- ⑤ 内臓の働きがよくなる
- ⑥ 頭脳（あたま）がさえる
- ⑦ 行動が俊敏になる
- ⑧ バランス感覚がするどくなり、相手を思いやる心が育つ
- ⑨ 十歳以降から自分の決めたことをやり抜くようになり、自分らしさが出てくる
- ⑩ 本番が強い人に成長する

本園の基盤である立腰保育に取り組む中で、実践を行っていく。

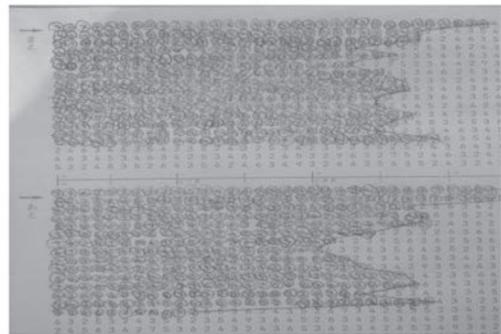
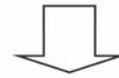
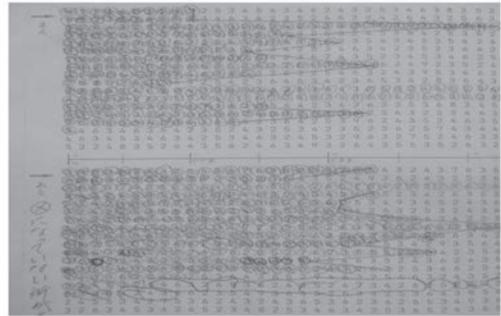
## 6 クレペリン検査から

（資料5を参照）

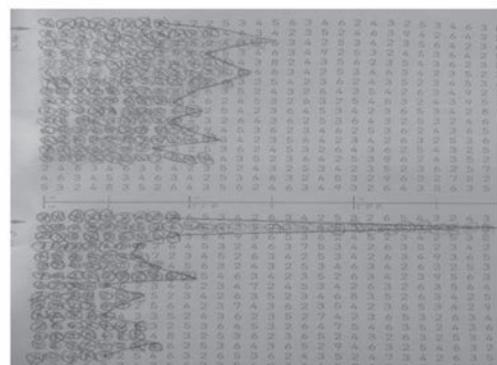
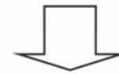
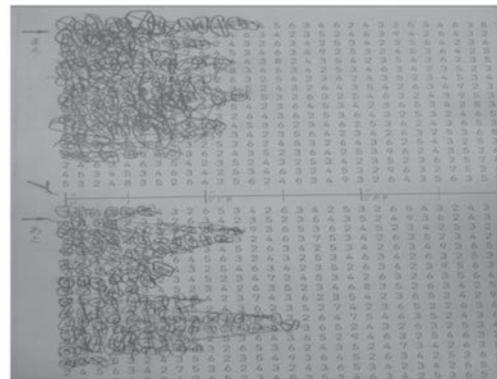
### 【A男の場合】



### 【B子の場合】



### 【C男の場合】



## 7 研究内容

(1) 記憶力テストを行う。

【用紙①は（火）用紙②は（木）】

- ① 6種類の馬を記憶することを、週に2回（火）（木）行う。（5月から）
- ② 4種類の馬を記憶することを、週に2回（火）（木）行う。（8月のみ）
- ③ 6種類の馬を記憶することを、3週間毎日行う。（11/5～11/22）

(2) ホワイトボードの活用をする。

- ① 指示内容は3つにして、視覚的支援を行う。
- ② 生活の中のルールを、絵を使い説明し覚える。

(3) 絵本の読み聞かせをする。

- ① 色使いに変化の少ない絵本から始める。
- ② 子どもたちが選んだ色使いが鮮明な絵本を読む。

## 8 実践

(1) 記憶力テストを行う。

- ① 6種類の馬を記憶することを、週に2回（火）（木）行う。（5月～7月）



（記憶力テスト（6種類）の提示用紙）

(ア) 内容

主活動後に、6種類の馬の絵を30秒で記憶し、その後、手元に配られた用紙の中の馬（12種類）から6つ選び○を付ける。

(イ) 子どもの姿

初めは、言葉の説明だけで行ってしまったため、理解することが難しく、1つに○を付けると止めてしまう子が多くいた。また、集中できず私語も多くあった。そのため、一度保育士が手本となり、やって見せることで視覚的援助も行っていった。そうすることで、私語が無くなり徐々に集中できるようになっていった。しかし、3ヶ月行っていくうちに、「6個も覚えられない。」という子や、用紙を配ると同時に、下を向いてしまう子が出てきた。そこで、「できるかも」「やってみよう」と、意欲に繋がるよう、4種類の絵に減ら

し、「出来た!」「嬉しい!」と自信になるよう取り組みを変えてみた。

- ② 4種類の馬を記憶することを、週に2回（火）（木）行う。（8月のみ）



（記憶力テスト（4つ）の提示用紙）

(ア) 内容

主活動後に、4種類の馬の絵を30秒で記憶し、その後、手元に配られた用紙の中の馬（12種類）から4つ選び○を付ける。

(イ) 子どもの姿

初めは、4種類になったことで戸惑う子はいるものの、2回目からは半数以上の子が完答出来るようになってきた。○付けが終わると、「できた」や「簡単だった」の声も出てくるようになり、子どもたちの集中力も変わってきた。そのため、出来ていることをその場で褒めるようにし、自信に繋げ、次への意欲へと変わるよう声かけを行った。

9月に入り、6種類の記憶力テストに戻すと以前より記憶できる子が増えていた。しかし、運動会の練習などで生活リズムが変わってくると、徐々に集中力が欠けていき、記憶できる子が減っていき、意欲も薄れていった。そこで、時間を決め、生活リズムを整えて行うよう取り組んでみた。

- ③ 6種類の馬を記憶することを、3週間毎日行う。（11/5～11/22）



（写真：6種類選び、○をつける様子）

(ア) 内容

毎日同じ時間帯に行い、生活リズムを整え落ち着いた雰囲気の中で、記憶力テストを毎日行う。1週目は用紙①を毎日行い、2～3週目は用紙①と②を交互に行った。

(イ) 子どもの姿

毎日同じ用紙①を使うことでパターンを覚え、自信を持って取り組む姿が見られ、今まで6個の○を打てたか確認しなかった子も、かぞえながら慎重に行う姿が見られるようになった。また、毎日繰り返すこと、担任が不在だったり誕生日会だったり、ちょっとした環境の変化で集中力に欠けることや、月曜日は落ち着きがないなどの様子が見えてきた。また、筆圧も高くなるという効果も出てきた。

(ウ) テストの取り組みから

【A男の場合】

母子の関係が上手くいっていないことで、安心感が得られず1～2個の記憶で止まっていた。しかし、母親にA男との遊びの時間を確保し、甘えられる時間を作って頂けるよう伝えていくことで、徐々に記憶量が増え、完答出来るようになっていった。その後も、A男の情緒不安定な様子が記憶力テストの結果から読みとることも出来、早めの対応に繋がっていった。

【B子の場合】

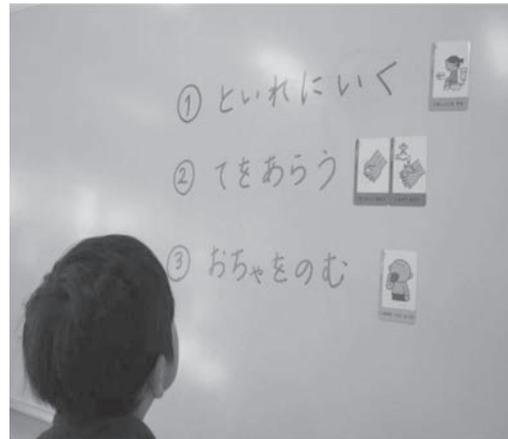
自分の気持ちには敏感だが、他人の気持ちは分からないため、集団の中では常に落ち着かない様子。何をすることも「疲れる」「嫌だ」「やらない」と意欲に欠け、行事で生活リズムが崩れると、見通しが持てなくなり、生活の中で「どうして?」「何で?」と聞くことが多くなった。そのため、B子が納得するまで質問(不安)に寄り添っていくことで、情緒の安定に繋がることが分かった。6月から完答が続くものの、まれに記憶量が落ちる日がある。その日は、本児の中で、集団生活の中での不安が隠れていることが分かってきた。

【C男の場合】

相手の話を聞き、自分の思いや考えを、上手く伝えることができていく。真面目な性格でもあるため、集中して行動することが出来ているが、消極的な面もあり、初めは様子をうかがいながら取り組んでいた。しかし、運動会などの大きな行事を経験していくことで、行動が以前より積極的になってきた。その頃から自信を持って記憶力テストに取り組む姿があり、生活リズムに変化があっても、安定して記憶できている様子が分かる。

(2) ホワイトボードの活用

①指示内容は3つにして、視覚的支援を行う。



(写真：視覚的支援の一例)

(ア) 内容

①トイレに行く。

②手を洗う。

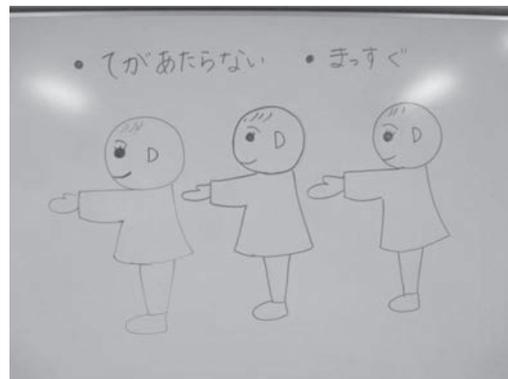
③お茶を飲む。

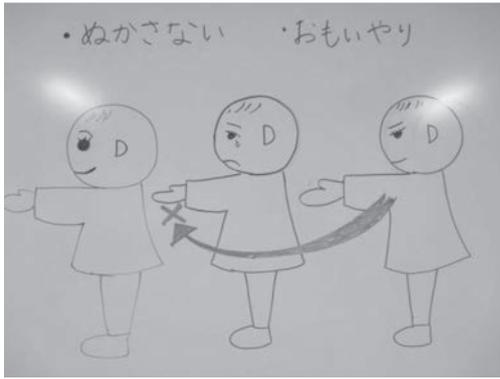
など、次の活動までに行うことを書いたり、準備するものを書いたりして、見通しが持てるようにしていった。

(イ) 子どもの様子

言葉だけで伝えてしまうと、自信のなさから1つひとつ確認する子がいたり、何をしたいのか分からず、動けなくなったりする子がいた。そのため、ホワイトボードに順番を書くことで、徐々に自ら動く姿に変わっていったり、忘れたところから確認したりして、安心して動く姿が見られるようになってきた。出来るようになった指示から書くことを減らしていくことで、成長も確認できた。

②生活の中のルールを、絵を使い説明し覚える。





(写真：表情を付けた視覚的支援)

(ア) 内容

生活の中で、やって「善いこと」と「悪いこと」など、絵を使い視覚的支援を行いながら伝えていく。

(イ) 子どもの様子

「1列に並ぶ」という行動だけで、「順番を抜かした」「押してきた」「2列になった」というトラブルが発生する。言葉で説明したり、子どもたちを実際に動かしたりして説明するものの、なかなかルールが入っていない。そこで、客観的に見ることでできるよう絵にして説明をしていくと、前に人がいることを意識できたり、人との間隔を考えられるようになったり、1列を意識できるようになったりと、ルールを理解する(覚える)ことができるようになってきた。

(3) 絵本の読み聞かせ

①色使いに変化の少ない絵本から始める。



(写真：色使いの少ない絵本の例)

(ア) 内容

視覚からの情報が少ない絵本を選び読み聞かせを始め、集中力を伸ばしていく。

(イ) 子どもの様子

昨年の子どもたちの様子から、「絵の色使いが鮮明すぎることで場面の変化が感じられず、フラフラと動く子や飽きてしまう子がいた」との記録があったため、引き続き、「そらまめくんシリーズ」や「お月さまってどんなあじ？」などの色使いに変化のないものから始めていった。そうすることで、主人公の表情の豊かさや、場面の変化を感じ取る姿が見られたため、徐々に「日本昔話」など馴染みのある話を中心に、色鮮やかなものへと移行していった。また、絵本の種類によって読み方を変えることで、興味や関心へと変わり、集中して聞く姿が増えてきた。

②子どもたちが選んだ色使いが鮮明な絵本を読む。



(写真：色使いの多い絵本の例)

#### (ア) 内容

給食後の読み聞かせの絵本は、子どもたちで選んでも良いことを伝える。その時、「まだ読んだことのない絵本」や「読んでみて面白かった絵本」、「怖かった絵本」など、条件を伝えることで、考えて絵本選びができるようにしていった。

#### (イ) 子どもの様子

初めは、決まった子しか絵本を選びに行かなかったり、絵本を取りに行くことが楽しくて行くだけだったり、絵本に対しての興味や関心が薄かったものの、絵本選びの条件を伝えていくことで、考える姿が増え、2～3人の友だちと相談して選んでも良いかを聞きに来る子が増えていった。また、面白い絵本ばかりではなく、怖い絵本や可愛い絵本など、色々な種類の絵本を見ることで、子どもたちから出てくる感想も、「面白い」「怖い」だけでなく、「〇〇したところの鬼の顔が面白かった」や「もう一回読んでみたいで借りていこう」など、「自分以外の人と共感したい」、「言葉で伝えたい」などの気持ちに自然と変わっていった。



(写真：読み聞かせに集中する様子)

## 9 研究の成果と今後の課題

#### (ア) 成果

- ・言葉や文字で伝えることも大切だが、絵や図で示してやると、発達障害の疑いのある園児も理解度がアップした。
- ・3つの指示を記憶できるようになり、自信を持って行動出来るようになってきた。
- ・毎日繰り返し行う活動が短期記憶から長期記憶として残っていくようになり、見通しが持てるようにな

ってきた。

- ・絵本の色彩を徐々に増やしていったことで、多くの絵本に興味を持てるようになってきた。
- ・豊かな言葉で自分の思いを表現できる子が増えてきた。
- ・イメージしながら、好きな絵を描くことが出来るようになってきた。
- ・個々の自信が園での安定した生活に繋がってきた。

#### (イ) 課題

- ・環境の変化に適応しづらい子どもに対して、継続的に視覚的支援を続けていく必要がある。
- ・絵本だけでなく、集団遊びなどでの経験や学びから、他者を見て感情を想像することが出来るよう社会性を育てていくようにしたい。
- ・個々の成長を見逃さず褒めることを大切に、自信を持って自分の思いを行動に移す力（自己肯定感＝精神的な安定）に繋げていきたい。

#### (ウ) まとめ

今後は、この取り組みを通して身につけてきた、集中力・持続力・聞く力・表現力などをさらに高め、小学校との円滑な連携をして就学に向けて、保育を邁進していきたい。

また、保育は経験を生かして指導することも大事ではあるが、科学的根拠をもって指導することも大切で、保護者との懇談でも、具体的に資料を見せながら話が出来るので、説得力があり有効である。今後もそれを続けていければと思っている。

#### <主な引用文献・参考文献>

- ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領
- ・子育ての秘伝（著：石橋 富知子）
- ・まごころの保育（著：内田 伸子）
- ・川辺町第3こども園全体計画（資料1）
- ・5歳児の発達の様子（資料2）
- ・脳の働きを良くする生活改善の8か条（資料3）
- ・「意欲と感動」を生む基礎条件（資料4）
- ・やる気を起こさせる7か条（資料4）
- ・クレペリン検査（資料5）
- ・川辺町第3こども園スーパーアドバイザー 大竹 常廣先生の資料



## 5 歳児の発達の様子

### ①運動

- ・筋肉が強くなる。
- ・体のバランスをとる脳神経が成熟してくる。
- ・片足で立ったり跳んだりできるようになる。スキップが上手くなり、音楽に合わせて自由に速度を調節できるようになる。
- ・ブランコを大きく振ったり、ジャングルジムのいちばん上で立ち上がったり、冒険を好んでするようになる。
- ・三輪車を夢中でこいで、スピード感を味わうようになる。
- ・ボール投げが上手くなり、遠くまで投げられるようになるが、まだ足の動きはぎこちない。

### ②手先

- ・はさみを使って、曲がった形が切れるようになる。
- ・折り紙を折ることが器用になる。
- ・指を1本ずつ独立して折り曲げられるようになる。
- ・ボタンの掛け外しが、楽にできるようになる。

### ③心の発達

- ・科学的な関心を持って来る。動植物を観察したり、虫メガネでものを拡大して観たり、高いところから水を流して、その流れ方に関心をもったりするようになる。
- ・色よりも形に注意が向けられるようになる。
- ・絵を描いても、積み木でものの形を作っても、細かい部分に注意が払われるようになる。
- ・文字を覚える子どもが多くなり、自分の名前や簡単な絵本を読める子どもも出始める。
- ・親の名前や自分の住所を言うことができるようになる。
- ・20くらいまでの数を唱えることができるようになる。
- ・形を2つに分け、元の形にして見せることができるようになる。
- ・2つのものの違いが分かる。例えば、「鶏と鳩は、どこが違うか？」と聞くと、違うところが2か所以上言えるようになる。

### ④ことばの発達

- ・自分の思っていることが、だいたい自由に言い表せる。
- ・赤ちゃんことばがほとんどなくなり、はっきりした発音で話せるようになってくる。
- ・質問されたことにだけ、きちんと答えることができるようになる。

### ⑤感情

- ・自我を押さえる能力が増し、泣きたい気持ちを我慢することができるようになる。
- ・泣く時間が短くなる。
- ・他の子からからかわれたりすると、泣くことが多くなる。
- ・弱い友だちや年下の子どもの面倒をよく見て、お姉さんらしさお兄さんらしさを発揮するようになってくる。しかし、甘やかされて育った子は、いたわる気持ちが乏しい。
- ・友だちが遊びに来ると、あいそを言ったりおもちゃを与えたりして、サービス精神がでてくる。

## ■脳の働きを良くする生活改善8か条

- ① 「早寝・早起き・朝ごはん+朝うんち」で生活習慣と生活リズムを整える。  
 小学校低学年では、睡眠時間は最低8時間は必要。また、学校生活が8:00頃からスタートするので、6時には起床する。(脳が活動するためには、2時間ほど必要であることと、脳細胞は特にブドウ糖しか栄養にしないので、朝ごはんは米食がよい) ※適度な睡眠は成長ホルモンも分泌し、子どもの成長に大きく影響する。
- ② 元気に外遊びをさせる。  
 多少は危険な遊びも経験させないと、いざという時対処できないこともある。また、体を鍛え創意工夫の力や空想力を育て、人と関わり合う力や心のコントロールが身につく。(室内での遊びだったら、お手玉や剣玉は集中力がつく)
- ③ テレビゲームは、ほどほどにさせる。  
 それよりも親子との関わりや人との関わりを持たせる。
- ④ 毎日、読書をさせる。  
 音読をさせると、特に脳の活性が良い。音楽も良い。(特にモーツァルトなどのクラシックは脳によい)
- ⑤ 明るいところや、やかましいところで寝かせない。  
 成長ホルモンは夜寝ている時に分泌させる。メラトニンは、暗くなると分泌されるホルモンです。  
 ※メラトニン=睡眠の促進や病原に対して抗体を作る働きがあるもの。
- ⑥ 何でも食べさせる。できるだけ固いものを食べさせる。  
 間食よりも、空腹の時間を設け食欲を増進させる。噛むことが脳の発達を促す。
- ⑦ インスタントよりも手作りのものを。  
 調理する音、素材の色、加熱による変化、良い匂い、親が作る姿・・・これらが子どもの五感を刺激し脳を発達させる。
- ⑧ 酒・タバコ・薬物はだめ。母親もアルコール・タバコ・コーヒー・紅茶のカフェインは飲まない。(特に妊娠中)

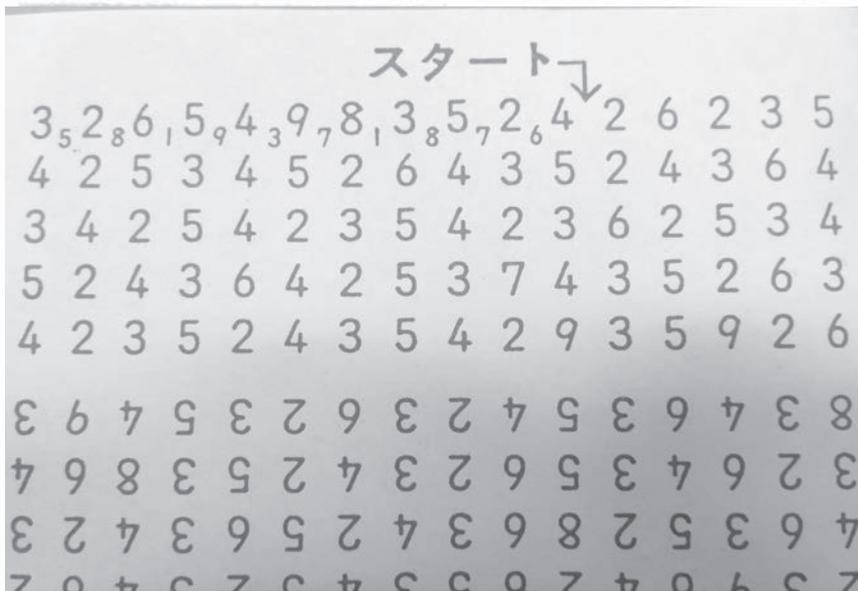
■「意欲と感動」を生む基礎条件

- ・好きになること。そうすれば安心が生まれる。安心があれば意欲がわく。
- ・意欲が高まると「やる気」が出る。
- ・「やる気」の薬は、成功体験である。感動は成功体験から生まれる。
- ・小さな成功体験を積み重ねることが大切。成功が成功を生む。

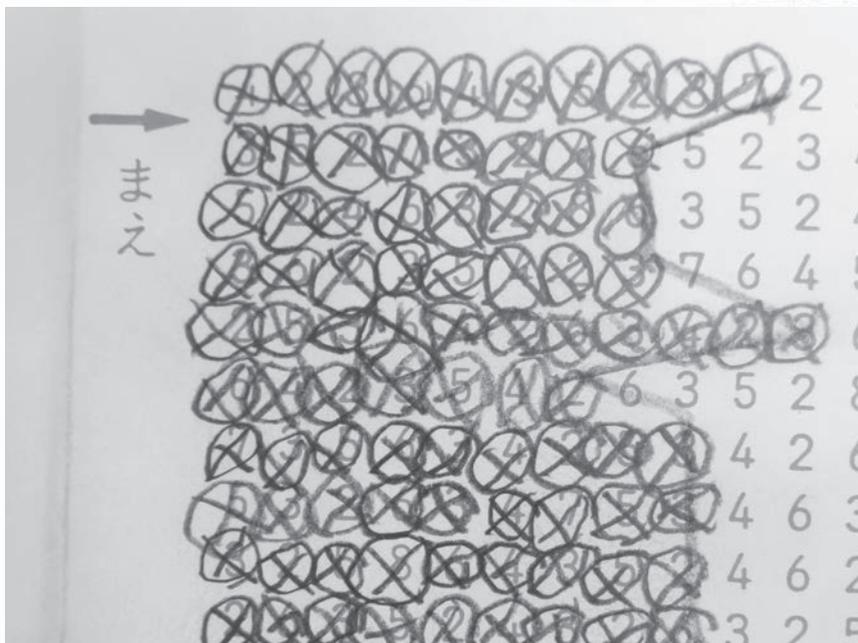


■やる気を起こさせる7か条

- ① ほめる
- ② 目的意識や目標を強く持つ
- ③ 対象などを好きになる（新1年生は担任の先生）
- ④ 快感を味わう（ドーパミンが出て報酬回路が働く）  
※ドーパミン＝学習する基を形成する物質
- ⑤ 集中力を高める（アドレナリンが出て緊張する）  
※アドレナリン＝神経を興奮させる物質
- ⑥ 適度な運動を心がける
- ⑦ 十分な休憩をとる



クレペリン検査用紙



- ・ 数字に○と×を記入し、右へと進んでいきます。
- ・ 1分間行い、「はい、次」の声で下段へと進みます。
- ・ 左記は、情緒の安定や集中力があることが分かります。
- ・ 処理速度が速くても、線がシグザグだと気分がむらがあり、感情の起伏が激しいと判断されるようです。

■クレペリン検査でわかること

性格・行動を3つの側面から把握できる。

- ①発動性……ものごとへの取り掛かり、滑り出しの良し悪し
- ②可変性……ものごとを進めるにあたっての、気分や行動の変化の大小
- ③亢進性……ものごとを進めていく上での、強さや勢いの強弱

側面	状態	長所	短所
発動性	過度	気軽、素直、慣れが早い	軽はずみ、先走り、気疲れ
	不足	自主的、芯が強い、手堅い	我が強い、選り好み、内にこもる
可変性	過度	柔軟、機転が利く、勝ち気	動揺しがち、むら気、感情的
	不足	地道、安定、粘り強い	融通に乏しい、くどい、機転がきかない
亢進性	過度	強気、行動的、頑張りがきく	強引、無理をしがち、むきになる
	不足	温和、控えめ、穏やか	受動的、妥協しやすい、持久性に乏しい

講評：園での安定した生活向上を目指して

～3つの取り組みを通して、見通しを持てる子を育成する～

評者：天野 珠路

ホワイトボードを活用し、絵や図で視覚的に示すことは、発達障害の子どもだけでなくすべての子どもに有用です。また、折に触れて一人一人の発達の状態を様々な方法で確認することも必要でしょう。しかし、保育は何といても楽しさと嬉しさに満ちたものであることが大切です。さらに、子どもは友達や保育者と心を通わし、一緒に遊んだり生活したりする中で様々な学びを得ていくのであり、その成長の過程を「テスト」や「検査」ではなく、生きた言葉で記録していただきたいと思います。

評者：高木 早智子

「願う子どもの姿」に対して、様々な手法を使って研究を進め、保育に科学的根拠を用いようとした姿勢は評価できると思います。残念に思えるのは、この研究におけるそれらの手法について、たとえば「クレペリン検査」の説明と妥当性、結果に対しての考察が示されていなかったことです。それらのことを表記することで、今回の研究が科学的にどのように妥当なのか示すことができ、結果に対する考察も深まるのではないかと思います。

評者：日吉 輝幸

報告園では、子どもが日々安定して生活ができるために、「記憶力テスト」「視覚的支援」「読み聞かせ」の3つの取り組みが効果的ではないかとの仮説を立て実践しています。しかしながら、その効果・有効性については少々懐疑的にならざるを得ません。数か月間の取り組みで対象児の年長児が落ち着いてきたとあることは、取り組みの効果なのか器質的な成長によるものなのかが分かりません。今後は、実践の考察と効果の根拠を明示できるようにしていただきたいと思います。

## 我が園の食育の指導が、いつでも、だれでも、 どこでも定着することを願って！

福岡市・多々良保育園 大神敬一

### 1 はじめに

生涯にわたって、「健全な心身を培い、豊かな人間性を育むために、食育の推進が大きな課題となり、平成17年6月に「食育基本法」が制定された。保育園では食育を保育の内容の一環として、保育園で実施する保育活動全体で推進することになったのである。そこで、保育園全体で食育が取り組めることを願って研究主題を設定した。

### 2 多々良保育園の食育のねらい

○ 給食を通して、望ましい食習慣や食物への関心・態度を身につけさせ、心身の健康の基盤づくりと生きる力の基盤づくりに資する。

### 3 保育士が食育の指導上困っている事、悩んでいる事

- ・年齢に応じた食育の指導の在り方
- ・指導時間の確保
- ・給食時間の時間配分
- ・保護者への食育、給食についての啓発の在り方

### 4 保育園での日常の子どもに関するテーマ解明の進め方

- ① 給食時間に子どもに身に付けさせたいこと
- ② 毎日の給食時間の過ごし方…はじめ—なか—おわりの過ごし方
- ③ 子どもの給食に対する関心の高め方（献立や食材への関心等）
- ④ 保護者（地域住民）への食育についての啓発の在り方
- ⑤ 設定保育による食育の具体例の保育の実際

### 5 多々良保育園の食育の指導の効果的な定着を目指す実践の考察

(1) 給食時間に子どもに身に付けさせたいこと

まず、子どもの発達段階に応じて「保育園の一日の生活の流れ」をきちんと指導することで「おやつ時間」と「給食の時間」を子どもにしっかりインプットさせて、おやつ時間、給食の時間が保育園での毎日の生活の一部であることを認識させることが重要である。そして子どもたちが午前中のおやつ時間・お昼の給食の時間・午後のおやつ時間等の時間的なリズムを感覚的に体内時計として身につけてほしいと願うものである。

次に、給食はみんな一緒に同じ時間に、同じ献立を、同じ食器と一緒に食事をとることを通して、給食の楽しさを実感することを願うものである。

更に、みんなで、おいしく、楽しく給食をいただくために必要な習慣を身につけることも大事であると思う。これらのことについては、(2)の給食時間の過ごし方で、具体的に述べることにする。

(2)毎日の給食時間の過ごし方…はじめ—なか—おわり

- ① 給食時間のスタート＝1・2歳児—11:30、3歳児—11:45、4・5歳児—12:00
- ② はじめ＝・自分達でできる食事の準備をする・テーブルを拭く・食器を準備と簡単な配膳をする・給食の歌を歌う（別添資料 参照）
- ③ なか＝・「いただきます」を言う・担任より本日の献立の説明をする（赤、黄、緑の食品等の説明）（食事のマナーについても触れる）・グループ別に楽しく食事する・食事の時間中は担任が子どもを見守る）
- ④ おわり＝・子どもの代表が「ごちそうさま」を言う・手分けして食器をかたづける・テーブルをふく・午睡の準備をする

\*他に、おやつ時間がある。未満児（0歳—2歳）は10:00と15:00の2回、以上児（3歳—5歳）は15:00のみである。

おやつ内容については、紙面の都合で、以上児（3歳—5歳）のみを次に示す。

○飲み物の種類—豆乳、スキムミルク、牛乳の3種類を交互に与える。

○食品の種類—手作りのもの（大学芋、かぼちゃと豆腐の米粉ケーキ、小松菜とプルーンのマフィン、ツナと野菜のチヂミ、リンゴのトースト、きなこ蒸しパン、黒糖ゼリーとウエハース）果物と市販のお菓子（柿とあられ、リンゴとビスケット、ナシとカレントウ、カステラ…

これらのおやつは10月の献立表から抽出したものである。手作りの食べ物と果物の組み合わせは季節によってその時の旬の食材や果物を使っておやつを作り子ども達に提供している。手作りのおやつは子ども達にも好評である。

(3) 子どもの給食の食事に対する関心の高め方（献立や食材への関心等）

① 毎日の給食の時間に実施している事

◆三食品の表を見て、赤・黄・緑の食品名についての知識を身に付けさせる。

◆三色食品の替え歌を毎日の給食時間に歌う。

② 給食時間以外の保育の場で実施している事

◆給食調理場での給食の料理が出来上がる場面を見学する。

・三歳以上の各クラスの子ども達に調理員さんたちが給食の献立をを手分けして、一生懸命に作っている様子を見学する。

◆新聞に入っている食品チラシで三色食品に分類する遊びをする。

・各自で食品チラシを集めて、食品の広告を切り取り、3つの食品群に分類する。

◆サツマイモやいねの栽培活動をとおして食材の収穫の喜びを味わう。

・園庭の畑にサツマイモの苗を植え付け、イモになるまでお世話をして秋には、みんなで収穫する。借り上げ水田では5歳児クラスが田植えの体験と稲刈り体験をする。いずれも作物の成長を観察し、収穫の喜びを体験させる。

③ 保育園行事における食材の収穫や簡単な料理体験をする事

◆5歳児クラスは8月末に、保育園の園舎を利用して1泊2日のお泊り保育を実施して、当日の夕食の「はんごう炊飯」と「カレー作り」を体験し、全員で食する。

(4) 保護者や地域住民への「食育の啓発活動について

◆保護者への食育に関する啓発について

食育の展開については、保護者にも伝えないと保育園での食育の実践の成果は実を結ばないので、食に関する情報（特に、食事はバランスよく食べること、保育園在園時期には、重要な栄養を摂取すること）を知らせることは大切である。さらには、各家庭における、子どもの食生活のサポートも重要である。

◆子どもの祖父母や地域の高齢者を招いての交流会の実施について

毎年、「敬老の日」の祝日前後に（祖父母交流課）と（地域の高齢者）を招待して、子ども達全クラスのお遊戯やお歌の発表をホールで鑑賞していただき、その後に食事会を開き、園庭のサツマイモのイモズル（サツマイモの茎）のお煮つけ等も味わってもらい、園庭で収穫したピーナツで豆腐を作り、それも味わってもらい、祖父母や高齢者から、「懐かしくて、とても美味しかった」との感想をいただいている。

(5) 設定保育による食育の具体例の保育の実際

食育は保育課程にきちんと位置付けて、保育園の全保育活動において、意図的・計画的・継続的に行われなければならない。そのためには教育課程、特に、食育領域の年間指導計画、月間指導化計画、週計画案、整備、充実が大切である。

特に、食育に関する設定保育の時間をいかに指導していくかが現場保育士の課題でもあるので、私（理事長）は、毎年、5歳児クラスの子どもの中に、入って設定保育の実践をしているので当日の設定保育の場面を再現してみる。

① 設定保育実践日・・・令和元年5月21日

② 主な活動…体に大事な食べ物について考えよう。

③ ねらい…毎日の給食の食材料への興味と関心を持ち、自分の体を作ったり元気のもとになったり、体を整えたりする食べ物の仲間があることに気づき、スキキライをなくす意欲を持つ。

④ 指導過程…別添資料参照

⑤ 指導の実際

ア 導入段階…児童に本時の活動の目当てを掴み、活動に意欲を持たせる段階

\*導入段階における児童の主な反応について次に示す。

○ いろいろな食品の売り出しのスーパーの広告のチラシを見せながらの昨晚の各家庭での献立については、次の反応があった。

・カレー、ハンバーグ、焼き肉、おでん、シチュー、チャーハン、ぎょうざ等々

○ その反応をもとに、再度チラシを見て、食材で多い品物について話し合い、肉類やお魚、野菜や果物、お寿司やお惣菜等の多さにびっくりしていた。

イ 展開段階…毎日の家庭や給食での献立の食品は仲間分けすると三つの色の仲間（赤の仲間）（緑の仲間）（黄の仲間）に分けられることを知らせる。

○ その後、グループの食べ物の働きについて説明して、チラシの食品をグループで三つの食品群に分類させた。児童は興味をもって、食品の分類に熱中した。

○ 20枚の食品の絵を使って、食品を三つの色分けにするゲームをして、体に大事な食べ物についての理解を深めた。

ウ 終末段階…毎日の給食時間に歌っている「食べ物の歌一仮称」を歌い、三つの食品群についてまとめる。偏食の弊害についても説明する。

○ 「食べ物の歌一仮称」をみんなで歌う。「ゴンベさんの赤ちゃんがかぜひいた」のリズムで（からだをつくるのはなんでしょう それは赤のたべものよ おおにくに・さかなに・まめ・たまご）以下4番まで歌う。

\* チラシの三色食品集めの食品分類ゲームの作品例を別添に示す。

\* 今も、三歳以上のクラスでは、給食の時間になる

と「食べ物の歌—仮称」を元気に歌っている。

エ 設定保育参観後の参観者の感想

- ・児童が興味を持つ資料が準備されていたので、よく考えて、活動していた。
- ・準備資料が身近なチラシを活用したり、食品の判りやすい絵で効果的だった。
- ・(教える場面)(考えさせる場面)(活動させる場面)が明確であった。
- ・児童の意見を取り入れながら、ねらい到達にうまく導かれた。
- ・本時の設定保育のねらいを達成するためにはどんな資料が必要かが分かった。
- ・「食べ物の歌—仮称」をみんなで歌習慣づけができていたので、三色食品の働きについての理解は深まったと思う。

\* 以上の感想等をもとに研究協議は次のような質疑がなされた。

①設定保育の指導案等を書くためにどんな事前調査をしたか？

- 事前調査項目—どんなご飯が好きか、どんなおかずが好きか、好きな野菜と嫌いな野菜を3つ挙げよ、保育園の給食は好きか嫌いか、お家で、食事の時のお手伝いをしているか、等々である。

②設定保育の指導案のとらえ方をどう考えるか？

- 保育指導案は(本時の目標)と(指導内容)と(指導方法)を関係づけたプランであり、工程表である。
- つまり同案保育指導案は、本時目標・保育内容(教材)・本時の手順、方法、そして指導者の指導観の四つの要素で構成されるものである。

\* 設定保育で食育の基本的なことを補充し、深化させたことを給食の時間や家庭での食事を通してさらに望ましい食生活習慣として拡充していくことについて話し合った。

- 給食時間の指導の在り方の見直し
  - ・はじめ—食事にふさわしい雰囲気づくりをする。(テーブルを清潔に)(楽しいグループ作り)(おいしく食べれる配膳)(分かりやすい献立の説明)(食べ物の歌—三色の食品—を歌う)
  - ・なか—当番さんの「いただきます」の掛け声でおしくいただく。(こぼさない、できるだけこさない)(お行儀に気を付けて)
  - ・おわり—当番さんの「ごちそうさま」の掛け声で食器類の片づけを。(テーブルを清潔にふいて、休憩に入る。)
- 保護者への食育に関する啓発の見直し
  - ・家庭に毎月配布する「給食献立表」の活用促進を図る。(毎日の献立名と食材と栄養等の紹介で関心を

持ってもらおう事)

(毎月のお誕生会後の誕生者親子会食での給食の食事を味わう事)

(保育園の毎日の給食の献立に関心を持ってもらう事)

(献立名や献立のレシピを家庭料理作りのヒントにする事)

(自分の家の料理食材の栄養のバランスを検討する事)

(自分の子供たちの偏食の矯正に役立てる事)。

- ・家庭に毎月配布する「食育だより」の編集内容に工夫を凝らす。

☆主として次のような内容等で食育だよりを編集する。

(食育の定義、保育園や家庭で行うで行う食育の啓発)

(食事の場と生活習慣の形成、朝食の大切さについて)

(栄養のバランスと食環境の問題、親子クッキングのすすめ)

(孤食の防止と共食の大切さ、と、食生活指針について)

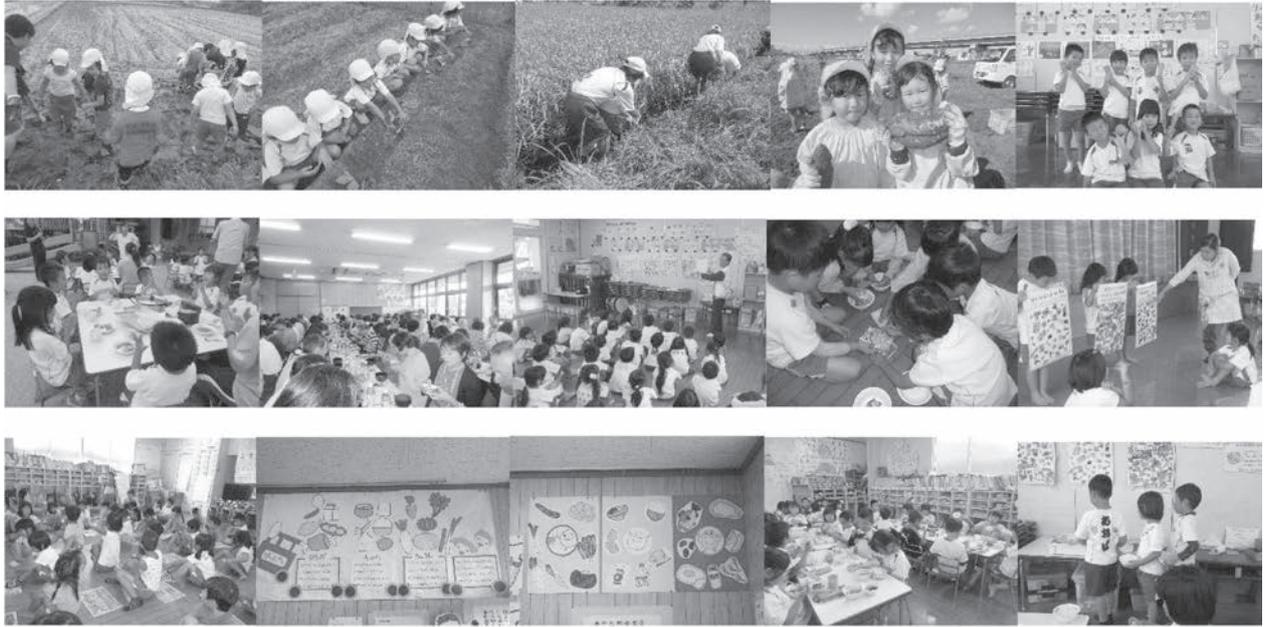
## 6 いつでも、だれでも、どこでも食育を実践するために

保育園の食育は園児の将来の健康を維持し、望ましい食習慣の基盤をつくることにある。そのためには全保育活動を通して、意図的に・計画的に・継続的に、先に論述した食育を実践していけば、「楽しく食事をする子どもが育っていくと自負するものである。それをまとめると、① 給食時間が定められた重要な保育園生活の一部であることを保育士、調理員が共通理解すること、② 給食時間の過ごし方を三歳以上児には定型化して身につけさせて、その楽しさを実感させること、③ 園児の発達段階に応じて、給食の献立や、食材に関心を持たせること、④ 保護者・祖父母・地域の方にも食育の啓発を図ること、⑤ 設定保育の参観を定期的に設定して、クラス担任に具体滝食育の在り方について理解を深め、深化させること等にまとめられる。

## 7 終わりに

子どもたちに対する食育は、心身の成長や人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって、健全な心と身体を培い豊かな人間性を育んでいく基礎となるものである。我が保育園においても、食育は保育園全体で取り組むことを共通理解して、実践に取り組んでいるが、その一端をここに紹介したが、ご批判・ご叱正をいただきたい。

8 参考資料—食育の実践の一コマの写真紹介



5歳ふじ組 [男児24名、女児18名]計42名  
保育指導案

令和元年8月21日(水)

1. 主な活動

からだに大事な食べ物について、考えよう。

2. ねらい

毎日の食材料への興味と関心を持ち、自分のからだを作ったり、元気の元になるエネルギーになったり、からだの調子を整えたりする食べ物の仲間があることに気づき、好き嫌いをなくす意欲をもつ。

3. 子どもの実態と課題

五歳児は、著しい成長期にあると共に、体作りの基礎を築く大切な時期でもある。この期の児童は、好きな献立として、カレー、ハンバーグ、焼き肉等であり、きらいな食べ物としては野菜が主流である。嫌いな野菜は、ピーマン・人参・ホウレンソウ等が上位に目立つ。

健康なからだを作りたい、毎日を元気に過ごすためには、三つの食品群のバランスのとれた栄養をとることの重要性に気づかせたいと考える。

そこで、身近な食材料を元に3食品群の食べ物カードで3色に分類する替え歌やゲーム等による活動を通して、3食品群に対する興味や関心を盛り上げながら、五歳児の児童なりに、偏食をせずに、3食品群をバランス良くとることの大切さに気づくことは意義があると考える。

4. 環境の構成と準備物・資料

環境	構成	準備・資料
①一斉指導時 移動式白板 児童席	②ゲーム時 赤箱 黄箱 緑箱 審判 絵カード グループ	ダンボール箱 (赤黄緑) 野菜のサンプル 大根、にんじん ピーマン キャベツ 絵カード 模造紙 セロテープ カセットデッキ

5. 予想される子どもの活動と保育者の配慮

時間	予想される子どもの活動	保育者の配慮および留意点
10:30	1 野菜にちなんだ替え歌を歌う。	・ スーパーの生鮮野菜売り場を想い起し、多様な野菜を言わせる、どんな料理の材料かを考えさせる。
10:35	2 昨晩の食事について話し合う。	・ 昨晩の食事から、好きなおかず、嫌いなおかずについて、自由に話し合わせる。
10:40	3 毎日の献立の食材料は「3つの仲間に分けられる」事を話し合う。 ・ 赤の食べ物—からだをつくる。 ・ 緑の食べ物—からだの調子を整える ・ 黄の食べ物—元気の元になる。 ・ 赤黄緑が揃えば—	・ 絵カード資料で、身近な食材料で食や家庭の料理が作られていることに気づかせる。 ・ 自然の恵みとしての食材料の存在にも気づかせる。 ・ 「ごんべさんの・・・」の替え歌で1番—体を作るのは何でしょう 2番—元気の元は何でしょう 3番—病気になるかもしれないのはなんでしょう 4番—赤、黄、緑をとりそろえ、きちんと食べれば
10:50	4 絵カードを使ってゲームをする。 ・ 2グループで競う ・ 三つの食品群の箱に分けて入れる。 ・ 三色に着目する。	・ ゲームチームと審判チームに別れる。 ・ 20枚の絵カードの中から1枚ずつ取り出して、食品群の何に属するかを判断して、箱に入れる。
11:10	5 三つの食品群についてまとめ、偏食のこわさについて説話する。 ・ 赤グループ食品は ・ 黄グループ食品は ・ 緑グループ食品は	・ 食事は「自分自身の生命を守ること」として説話を聞かせることである。どんな作物も自然の恵みであること、新鮮な野菜はなままで食べても美味しいことや栄養があることを感じ取らせる。「食べることは生きること」からバランスの取れた食事の大切さと偏食の弊害とを関連させて説明し、今日から「好き嫌いせずに、残さず美味しく食べるぞ!」という意欲を持たせたい。

講評：我が園の食育の指導が、いつでも、どこでも、だれにでも定着することを願って！

評者：石川 昭義

食育の推進を目指した実践をまとめた研究で、複数の実践事例が紹介されており、熱心に重層的に取り組まれている様子が伝わってきます。設定型の保育の展開については、全体の所要時間（終了時刻）が示されるとよりわかりやすかったと思います。記録を読む限り、授業のような進行の印象を与え、「保育指導案」（資料付）に見られる「～させる」の表現は、特にその印象を強めています。この場面は、理事長が5歳児を対象に設定保育を行っています。普段の保育の延長線で行われているのか、やや異質な雰囲気の中で行われているのかについて、担任保育者の普段の食育に関する関わりとの関係において、補足的な説明があると良かったと思います。最後の研究協議における質疑の場面では、誰が参観して、感想を述べたのかわかりませんでした。保護者への啓発の視点も出されていますので、園の課題を地域とどのように共有していくかについてさらに研究が進むことが望まれます。

評者：高木 早智子

法人における食育の取り組みというテーマ設定と実践内容は妥当だと思います。特に理事長自らが指導案を作成し、5歳児に対し教育・保育を行っている、ということに法人の姿勢が強く感じられ、感銘を受けました。残念に思えることは、今回の研究において、多岐にわたる取り組みの羅列より、例えば5歳児の食育教育一点に絞られて論旨を展開されると、取り組みについて掘り下げられ、より深みのある研究になったのではないかと思います。

評者：日吉 輝幸

報告園は、本保育実践研究に度々ご参加いただいております。大変熱心な園であることに敬意を表したいと思います。食育については、報告園に類似した取り組みは多くの園で行われているので、報告園も引き続き食育に関する取り組みを継続していただきたいと思います。なお、本報告を実践研究のレポートとして鑑みると、終始研究者の論文調になっており、子どもや家庭の様子、食育に関する様々な取り組みが、どのような効果があったかの記述が不足しており残念でありました。

## お散歩コースから見えてくる危険な場所

沖縄県・愛心保育園 比嘉 淳子

### 1. はじめに

当愛心保育園は、静かな住宅街の中にあり、地域の方々とのふれあいを楽しみながらお散歩に出かけています。日頃から、歩いているお散歩コースの中に、大きな川が流れていたり、車の通りが多いバイパスがあったり、歩道が狭かったりと子ども達の目線に合わせて危険な箇所がたくさん見えてきました。その中で、私達保育士がどのように、安全に楽しくお散歩ができるかを感じ、取り組んでいきたいと思いました。

### 2. 園の概要

設置主体：社会福祉法人 玉重福祉会  
保育園名：愛心保育園  
開園：昭和58年4月  
所在地：沖縄県那覇市上間384-15  
園児数：定員130名 現員124名

年齢	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	園児数
定員	9名	18名	24名	27名	27名	25名	130名
現員	9名	18名	24名	27名	27名	19名	124名

職員構成 園長、副園長、主任、副主任、保育士20名（フリー、パート保育士含む）調理員4名、事務員（合計25名）

### 3. ねらい

- ・お散歩を楽しみながら危険に対する意識と心構えを深める

- ・お散歩コース内の危険箇所や安全対策などについて職員への周知
- ・災害時、避難場所までのコース確認

### 4. 実践方法

- ・保育園周辺のお散歩コースの再確認

### 5. 実践

実践①保育園周辺のお散歩コースの再確認

・排水・瓦礫やマットのようなものがあり、転んで滑ってしまいそうで危険。落ちてしまいそうで危険。



・排水溝に穴があいているので、子どもの足が落ちてしまいそうで危険。



→段差や穴がある場所では『段差があるから気をつけてね。穴があいているね。』と話しかけたり、危険なものが落ちていたりすると『触らないよ。踏まないでね』など気を配りながら立ち入らないように伝える。

・手すりをつかまえて階段を上る際に、ガードレール戸の隙間に入ってしまうようで危険



→保育士がガードレールの側に立ち、隙間があることを知らせ危険という意識を持たせる。

・階段の下がすぐに川になっているので、転倒する恐れがあるため危険。



・子どもの体が入るぐらいの隙間があり、転倒した際に落ちてしまいそうで危険。



→周りの景色、物などに興味があることを受け止めながらも、前を向いて歩くことを伝える。また、保育士が突起物の前に立ち、ぶつからないようにしながら危険な物があることを伝え意識させる。  
→子ども達の興味関心を一緒に楽しみながら『大きな石の上でカメさんが休んでいるけど、橋の柵に頭を入れないで見てみよう。蝶々がとんでいるので、足を止めて見てみよう。』など集中する内容に合わせて動きを止めて危険な場所がわかるように伝える。

・階段の下がすぐに川になっているので、転倒する恐れがあるため危険。



・子どもの体が入るぐらいの隙間があり、転倒した際に落ちてしまいそうで危険。



→『階段を下りたら川が流れているけど、遊んではいけない場所だから下りないでね。』子ども達の知的興味の一つひとつ答えながら、危険なことを伝えていく。

・ガードレールがなく、歩道の側がすぐ車道になっていて危険。



・車の行き来があり、子どもが車道へ飛び出す危険性がある。



→『車にひかれるとケガをするから危ないよ。車が通るところは、右・左を見ないと危ないよね』など危険な所を想像したり、イメージを膨らませたりと友だちや保育士に伝え合う。

歩道を歩くことや歩道が整備されていない場所では端側を歩くと安全なことなどを、子ども達との会話の中で危険なことに対する意識を深めていく。

・見通しが悪くカーブミラーも無いので、前の方へ出ないと車の来るのが見えづらく危険。



→保育士が先に行き安全確認をするとともに、曲がり角など危険な場所では、必ず立ち止まり、左右確認の意識づけをしていく。

## 6. 実践報告・結果

- ・お散歩コースを各年齢のクラス担任と一緒に確認することで、視点が変われば、年齢別での危険な場所が見つかった。
- ・危険な場所や子ども達の予想される行動における対応策、注意事項を職員同士で確認し合うことができた。
- ・子どもたち自身から危険な場所や危険なものを見つけ出すことができるようになってきた。
- ・歩きながらではなく、興味関心のあることに対して、立ち止まって観察することができるようになってきた。

## 7. 考察

- ・これまでは、子ども達を通る前に危険な箇所に職員が立って回避していたが、現在は子ども達と立ち止まり話をしながら考え合う良い機会となり、散歩をしながら会話が弾むようになってきた。また、子ども達が気づき自分の命を守るという心構えを身につけられるように職員も一緒に意識し始めるようになってきた。

ってきた。

- ・年少児は会話がうまくできないこともあるので、意識できるように職員が危険を伝えながら理解をさせている。

## 8. まとめ・今後の課題

- ・これまでは公園に行って遊ぶことやお散歩を兼ねて歩くことを楽しんできたが、その場所までの道のりに危険があることを子ども達や職員同士が周知していなかった。
- ・園外に出る際には事前にコースの危険を知り、子ども達と『何が、どうして危険なのか？』を一緒に話し合えるように意識していきたい。
- ・保育園独自の安全マップ作りをすることの大切さに気付くことができた。
- ・職員一人ひとりの考える危険を話し合い、全職員が共通した『危険』を周知していきたい。また、災害が起きた時には地域と連携ができるように、地域とのふれあいも今以上に深めていきたい。

## 講評：お散歩コースから見えてくる危険な場所

評者：石川 昭義

日頃の散歩コースの中にどのような危険があるかについて職員同士で課題を共有し、その対応を組織として行ったことが描かれています。結果として、「年齢別での危険な場所」、「子どもたち自身から危険な場所や危険なものを見つけ出す」など、良い観点がたくさん出されていることについて、これらを年齢別に具体的に示せると良かったと思います。

危険箇所がたくさんあることが判明したことを受けて、それを回避するためにコースを変更したり工夫したりするなどの対応を行ったのかどうか、この点の説明と考察があると良かったです。報告書の構成が、写真とキャプションという簡略な組み合わせになっていることから、子ども同士の会話や気づき、子どもと保育者との会話を挿入しながら研究の経過と結果をまとめられると良かったと思います。

評者：高木 早智子

まず保育者自らが散歩コースの危険性について気づき、問題意識を持って検分し、記録として残したことに意味があると思います。またその危険箇所をどのように子どもたちに伝えていったのかも述べられていてわかりやすかったです。「8. まとめ・今後の課題」の表記で園独自の安全マップ作りをしたように読み取れるので、そのマップも添付資料として提示することでより実践を外部にわかりやすく伝えることができると思います。

評者：馬場 耕一郎

散歩中の安全性に着眼した研究です。散歩中の安全管理には各園が試行錯誤されている中、取り組むべき視点が簡素にまとめられていました。何よりも、子ども達と立ち止まり話をしながら考え合う機会が設けられたことは、安全教育を行う上で重要な取り組みと感じました。予め危険を知り、安全マップ作りを作ることで、意識が統一されると思います。子ども達が安心して散歩に出かけられる環境を守って頂きたいと思います。



## 第14回 保育実践研究 報告集

令和2年3月31日発行

発行：社会福祉法人 日本保育協会 保育科学研究所

〒102-0083 東京都千代田区麹町1-6-2

アーバンネット麹町ビル6階

TEL 03-3222-2111 (代)

FAX 03-3222-2117

